

---

# 魔王が居る世界

G T

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王が居る世界

### 【Nコード】

N9072Q

### 【作者名】

GT

### 【あらすじ】

帰宅後何時もの如くPCを起動させ、MMORPGのタイトル『天上転華』のアイコンをクリックすると。そこに現われた物は、見慣れた”Now Loading”の文字ではなく。

気がつくとなんな世界に捕らわれていた人達と、その世界に在る魔王の物語です。

## 01 (前書き)

息抜きでわぁっと書きはじめた作品です。

勢いだけで出来た物ですので、色々突っ込みどころだらけかと思いますが、気に入っていただけたら幸いです。

2 / 24 誤字脱字修正

この妄想はご覧の駄作者の暴走でお送りしていきます。

やや日当たりの悪い入り組んだ路地。

其処は街をはしる主要な通りに建ち並ぶ家々と比べ、隣り合う家との隙間も少なくまた其の見た目もくすんだ所が目立ち、其の上どこか作りも安くさく見える物が並んでいる。

手入れに入れられた力具合も明らかに目立つほど、どこか継ぎはぎだらけのそこを、なれた足取りで歩く、規則正しい足音を響かせ、タツタツタと其の路地の奥へと吸い込まれていく。

其の足音が止まった先、そこには其の空間に似合いこそすれ、やや建物の作りが大きめの、それでもやはり古臭く、安くさく、その建物の用途から考えると、どこか寂しそうに静謐とした空気を滲ませた、二階建ての建築物。

申し訳程度に作られたような門柱があり、そこを潜った先にでかでかと掲げられた看板には

此れ池荘 『空室あり』

と、大きく、それはそれは立派な字で書かれていた。

此れ池荘はどう見ても築30年は越えているようにしか見えない外観をし、其の住戸数は一階、二階共に八戸、併せて十六戸の居住空間を持っている。

木造りの簡素な作りに見えるが、それでいて長い年月を崩れることなく耐え、未だその内にて生活を営んでいる住民を迎えている。

その様は歴戦の猛者とは言えずとも、老い死に逝くのみのお古参の老兵の如くとまでもいかない、まだまだ現役でいけるんじゃない？ てよりまだ現役だし？ いいから契約して住めば？ という感じに見えなくも無い。

とはいえ、この建物の持ち主は、何時その崩落の牙が住人を襲うかも知れない自身の持ち物に、住人が居なくなったら取り壊したいんだけどなあと思っていた。

それであるのに、未だそこから動くことを良しとせず、共に戦うが如く根を張り、そこを終の棲家と定めたと言わんばかりに腰を降ろす住人が居るのである。

これはそんな此れ池荘の住人の一人、205号室に住むとても不運な青年、山田 信士君（18）の色々巻き込まれた上どうにもならなくなった拳句、微かな光明に引き寄せられてなんとか勝ち取って見たものが、結局碌でもなかった物だったとは…これからどうしよう、とほほ

と途方に暮れていたときに出会った206号室の住人に紹介されてここに住むことが決まり、そしてこれから頑張っ行ってこうと心に決め、決意を新たに歩む姿の物語。

に、なるのかな？ なればいいなあ……まあ、明日から頑張ろう。ふとそんな昔を思い出し、重くなる足取りに暗いオーラを纏って備え付けられた外階段を、ギギツと嫌な音を響かせながら上り始めた。

きっかけは、突然だった。

其の日も何時ものように帰宅後、風呂に入り、晩御飯を食べ。

さて今日も頑張ろうと生活習慣の一部と化したパソコンの電源を入れを終え、起動音の後に浮かび上がったひとつのアイコンをクリックする。

中学生の頃から嵌まり始め、今でも続けているオンラインゲームである。

### 『天上転華』

それがこのゲームの名前である。

メインストーリーはあるものの、それに沿った行動をする必要はなく、とにかくやれることが多いゲームであるそれには、毎年一回だけというイベントがあった。

### 魔王討伐

イベントの日にだけ開放される魔王城側に出現する特殊ワンフロアフィールドは、一度に入ることができるのはただ一人。

その入場者が討伐に失敗、もしくは制限時間を超過したら、再びその門が開かれて、次なる挑戦者を迎え入れる、ということを繰り返すイベントであり、討伐成功者は世界全体へとその名前を轟かせることになるという。

が、未だにその光景は見る事ができていない。

その討伐第一号になるべく様々な場所でレベルをあげ、様々な数の武器防具をそろえ腕を磨きと、今では先の見えないメインストーリーよりも、その年に一度のイベントに熱意を向けるユーザーが大半を占めるようになっていた。

信士もまた其の一人であり、知人がログインしてない時はひた向きにソロプレイの腕磨きに勤しんでいた。

友人が居る時は武具の強化素材やレアアイテム集め、メインストーリーを進めてみたいという意見があればそれに助力したりと、そんなありふれた楽しみ方でそのゲームを楽しんでいた。

さて、今日は何処に行ってみようかと、自身のキャラクターをその世界に送り込もうとした時。

ディスプレイ踊った文字は、何時もの見慣れた

” Now Loading ”

の文字ではなく

Welcome to the world

という見慣れない文字と、それを目にした途端暗転し始める視界が

## 01 (後書き)

以降ここは、とある一室を舞台にします。

読んでも読まなくても本編に支障はありません。ただの趣味です。裏話、ネタばれは今後でてくるかもしれませんが、そこはご容赦を。



此れ池荘の壁は薄い。

隣の住居との壁もそうであるが、外部に面した壁もまたこれではないのかと言うほど薄い。

これは暑さ寒さに対して住人に厳しい上、遮音という面でも申し訳程度しか役に立ってくれない。

未だ薄暗い朝の時間、自分には嫌な軋み音しか聞かせてくれない外廊下を、コツコツと規則正しく、どこか軽やかな音が響く。それが205号室の前を過ぎ、と思うと間も無く止み、次いで聞こえるノックの音に、206号室へ用のある人物であることが窺える。

それから音量を抑えた声が二、三流れると、戸を開け閉めする音が一度だけ鳴った。

「ぎゃあああああああ！！」

目覚ましにしては些かぶっそうな悲鳴に、もうそんな時間かと信士は眼を覚ました。

住み始めた当初はそれに血相を変え何事かと隣に確認にいったものだが、いやはや慣れとは恐ろしいものである。

ゆっくり上体を起し、軽くノビをすると、外からはささやかな、申し訳程度の日差しと、小鳥たちのさえずりが鼓膜を心地よくくすぐり、今日もいい天気だなあと、ほのぼのと寝起きの時間を感じていた。

「死ぬ！ 死ぬから！！ いや、それは無理だから！！ ちよっ、

やめてやめぎや ああああああ

そんな声も時折聞こえる中。

外に出て井戸へと向かい、水を汲み上げ顔を洗う。冷えた水は微かな痛みを残して信士の眠気を退け始める。

「無理！ もう三回くらい死んだし！ほんと、ほら血ぎやあああ  
あ……」

今日は終わるのが早かったな、とタオルで顔を拭い断末魔の終焉を聞き終わると、先程出てきた自室の隣に目を向ける。

それから間も無く、ガチャリとその戸が開かれた。

視線の先に姿を現したのは、信士よりも年上に見える人物。

赤黒い髪は腰まで伸び、佇まいも其の顔に浮かべる表情もぴしりと整えられており、生真面目というよりはむしろ潔癖なという印象が浮かぶ、すこし怜悧な雰囲気を持つ女性。

華奢な、というほど腕や脚は細く、それでいて身長は170前後の自分と同じくらいであるため、どこかスラリとした印象を感じさせ、それでいて出るところは出ているために、初対面時は酷く赤面した覚えが有る。

顔の造詣もその雰囲気似つかわしい作りであり、其の上で美人としか言いようのない整った物であるだけに、そんな美人なお姉様とお知り合いだという隣人に最初はかなり嫉妬の念を向けたものである。

「おはようございます」

「おはようございます、毎朝このような騒ぎで、ご迷惑ですよね？」

「最初は戸惑いましたけど」

慣れましたと苦笑を浮かべて見せれば、伏せ目がちに申し訳ございませんと返してくれた。

206号室の沙丹さんは、自分がここに住み始めて一ヶ月は経つのだが、未だに謎だらけの隣人である。

住む場所も行く当てもなかった自分に手を差し伸べてくれた恩人ではあるのだが、余り付き合いが少ない為、どんな人物なのか良くわからない。

「これからギルドへ？」

そんな考え事をしている間に、隣まで来ていたその人、リヴィアさんは、井戸で水を汲みながら話しかけてきた。

「そうですね、何分、稼がないといけないし、腕も鍛えておきませんと」

無理はしないように頑張ってくださいね、と返ってきた言葉の声音に、少し微笑みを浮かべて話しかけてくれたんじゃないこれ？と期待を込めて其の表情をちらりと見れば、其の顔は206号室に向けて

「私も頑張つて『これ以上は聞きたくないです』、それではまた」

はい、それではとりヴィアさんに辞意を告げると、自分もその場を後にした。

この世界の創りは、熱意と時間を注ぎ込んでいたゲーム、『天上転華』にかなり似ている。

町並みも時代背景が様々入り混じった作りであったり、その住人もまた多種多様としか言えないほど様々な姿を見かけ、それらはやはりゲーム時代もそうであった記憶がある。

石造りの家もあれば、木造の家もある。そのうえブリキ製のものまであり、目に飽きない眺めが続く。

布製のテントらしき出店もみかければ、荷車らしき出店もあったりと、店舗形態も様々である。

そこで声を張り上げる姿は、完璧な人型もあれば、やや獣も混じった姿もあつたり、武器を扱う店に目を向ければまた小人の形で鉄を打つ姿や、それを熱心に眺める獣の姿をした人影も見られる。

『天上転華』のゲーム世界での住人は、人間のほかに、エルフ、ドワーフ、獣人、悪魔、幽霊、精霊、そしてそれらのハーフやら亜種など、数え上げて行くと多岐に渡る。

その種族特徴もまた判りやすくする為の配慮からか、容姿の特徴から得手不得手まで判を押したような飲み込みやすい設定。

初期プレイヤーとして選べる種族は人間だけであるが、このゲームのひとつのポイントとして存在するのが種族転生というものである。

このゲームはレベル制であり、また人間種には上限レベルがある。MAXが99であり、そこまでレベルを上げると天上世界へと行くことができ、そこで種族転生することができる。

転生後に選べる種族はエルフ、ドワーフ、獣人、悪魔のうちのどれかで、純血の人間種は選べなくなる。人間を選ぶとすれば、上記のどれかとのハーフで、となる。

エルフは魔法を遠距離技能を得意とし、近距離技能が苦手。

ドワーフは作成技能を得意とし、戦闘技能が苦手。

獣人は近接技能を得意とし、遠距離技能が苦手。

悪魔は戦闘技能を得意とし、作成技能が苦手となる。

人間は万能であるが、其のどれを取っても得意としているものは及ばない。

ハーフとなると、その得意技能を半分だけ受け持つ形となるが、苦手技能は影響を受けない。

エルフとのハーフならば、遠距離技能をやや得意とする、という形である。

そして、このゲームには職業というものが存在しない。

剣を装備できるのは戦士、魔法を扱えるのは魔法使い等という明確な線引きは存在しない。

戦闘スキル、作成スキル等というものは存在するが、其のスキル取得はゲーム内に存在する数多くあるダンジョンのクリア報酬という形で取得可能となっている。

ダンジョンにはレベル制限が無い場所が多い。

とはいえ、そのダンジョン内に跋扈するモンスターを倒せるだけのレベルは必要ではあるが。

変わった場所では人数制限のある場合がある。

人数制限。共に行動し、戦力調整、安定行動、踏破効率を図るためのシステムに、パーティーを組むというものがあり、その上限は六名までとなっている。

通常のダンジョンのほかに、特殊ダンジョンという物もある。

特殊ダンジョンとは最上位技能を取得できるダンジョンであり、入場にキーコードという物を使用する。

人数制限が三名迄、四名迄というものは、基本的に作成技能取得

の場合である。

戦闘技能の取得できる特殊ダンジョンには、一名迄の入場制限という場所も存在し、その攻略難易度は高い。

さらには転生キャラクター限定や、其の上での人数制限ダンジョンというものもある。

そしてそれらの特殊ダンジョンの入場権限、つまりはキーコードを預かるのがギルドという組織である。

ギルドといわれる其の組織は、その仕事の大半が情報屋という活動であり、街の片隅にヒツソリと居を構えている。

ゲーム時代はその建物内にて様々な依頼と言う名のクエストが存在し、またその他に数多くのダンジョンの情報を扱うためのスペースが設けられている。

地下へと続く階段を下りると、其の情報を扱う者がひっそりと佇み、そこへの来客を待っている。

その場所では情報を聞くために一定額、またその鍵を得るために一定額支払って、それから漸く件のダンジョンへと入場可能となるわけである。

カツコツ、と足音を鳴らしながらその地下へと足を進め、露になり始める薄気味の悪いその人物の姿に、少し腰が引け気味の、なよつと見える足取りで近づく信士が、まさに目の前まで辿り着いたとき

「いらつしゃい、どんな情報をお望みだい？ どの情報も高くしくよっ。」

そんな低くくぐもった言葉が向けられた。



## 02 (後書き)

206号室、そう書かれたプレートを前に、魔王はもはや絶望に似た挫折感を顔に浮かべる。

「サタン様。今日よりあなた様の牙城は此方となります」

毅然とした態度でそんな絶望を突きつけるのは自分の右腕たる側近のリヴィア。

「魔王城は差し押さえられました。あ、レンタルは可能だということです。よかったですね」

当分はここで来訪者という愚者を処理しましょう、とそう告げると、勝手に決められた自身の住処となる206号室と掲げられたその部屋へ、自分を差し置いて入室していた。

「さあサタン様。今日から此方があなた様の居城です。」

これからは、ここに乗り込んでくる魔王討伐等とのたまう輩を消していきましょう」

「…ここに、乗り込まれる、のか……」

「それが嫌なら稼いでください。買い戻すのは無理でもレンタル料位なら工面できるでしょう」

どんよりと俯くそのサタンの足元には、小さな水跡が悲しげに数を増やし始めていた。



転生すると、そのキャラクターのレベルという物は初期化される。そして、所持スキルもまた同じく初期化され、また一からのやり直しとなるのであるが、その初期化に関係ないのが所持品と所持資金である。

とはいえ、手元に残る武器防具も、それに呼応した技能がなければ装備は出来ても散財するだけであるが。

装備品には耐久度という物が設定されている。

その数値がゼロになると、『破壊された』となり、修復しようとする、それに必要とされる素材を集めてこななければならぬ。そうなる前に修理に出す、という選択肢があるのだが、その疲労具合によって修理費は増減する。

魔具も併用された装備となると、それに見合ったアイテムが更に要求され、維持するだけでかなりの苦労が強いられる。

例えば、両手剣を例にして、両手剣技能取得済みの場合と、未修得の場合でそれを使い続けたとする。

習得済みの場合は、五十回の使用でも疲労度が半減したとして、未修得では三十回使用した時点で壊れてしまう、くらいには差が出てしまう。

防具は被ダメージ時に判定が掛かるため、回避時にはその影響を受けない。

が、重鎧、軽鎧等の高防御値のあるものは、技能なしで装備すると俊敏値にマイナス補正が入るため、回避にもマイナス補正が入るのである。

現在、山田 信士（18）のプレイヤーキャラは悪魔とのハーフであり、其のレベルも九十五と高い。

廃人プレイヤーと呼ばれるトップ層には至らないが、其の一団を別次元と考えてみた場合は、上位に食い込むくらいにこのゲームに入れ込んでいた。

効率重視のパーティー活動をそれなりにこなす一方で、ソロ活動を軸に単身でのダンジョン攻略、世界探索をも数々こなして来ている。それこそ必要と思われないクリア報酬を持つ技能取得ダンジョンであろうと、そこを単身でクリアできるかどうか、ただそのみを旨に突貫する等、我武者羅に、貪欲にそのプレイヤースキルの練磨に明け暮れたのである。

「星の切れ目、地下遺跡ゲマニエ。お前さん、あそこがどんなところか知ってるのかい？」

信士が告げた行き先は、転生者限定、レベル規制九十以上という特殊ダンジョンであり、人数上限が二人。

人数規制があるダンジョンは、基本的に難易度が高い。其の上で一人限定のダンジョンよりも、ボスモンスターの強さはワンランク高い。

今回指定した場所は、其の中でも上位に思われている場所。クリア報酬は、特殊ダンジョンである以上、最上位技能を取得可能な場所である。

それだけに、目の前の情報屋の人物には一人で来た信士を「何こいつ？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」的な胡乱な目つきでみている訳である。すごくウザ 失礼だと思う。

かといってそれを回避しようにも、現状知り合いと連絡はおるか、

漸くこんな説明のしようもない現状を受け入れ始めたばかりである。

そりゃ確かにここはめんどくさいから誰か居れば保険もかねて一緒に云々とは思うものの。

別段ソロが難しいところでもないし、でも九十以上とか結構探すのもねえ、てよりも自分以外にもこつちに迷い込んでる人いるの？ 等考えてみて、結局探しようがないのだし、とりあえずそこは金策としても優秀だから行っておきたいと考えを纏め、早く鍵を頂戴的なことを告げた。

「…まあ、死んでもいいか。一応レベル確認をする。そこを知ってるなら九十以上なんだろう？」

そう失礼な台詞を告げられ、信士は不機嫌なという表情を浮かべしつつかも腕を差し出す。

右手首に嵌る腕輪。これがステータス確認用の特殊魔具であるらしい。銀色の無骨なデザインであるこれが、ゲームを始めたところからの相棒であるのかと思うと、どこことなく親しみすら覚えさせられる。

「確認した。キーコードも埋めておいた。此れで入場は可能だ。さて情報料をもらおうか」

すつと示された二本の指に、ああこれだけあればパンが一日分（食パン一斤程。安い男なのである）買えるのになと思いつつ銅貨を二枚、目の前の男に差し出した。

目の前の男はそれを掴むと、親の敵を睨む恐ろしい目つきで信士を睨みつけ、ひいっと情けない悲鳴を上げる目の前の哀れな男に、其の握った銅貨を渾身の力で投げつける。

それで幾らか怒りが収まったのか、また再び指を二本立てて見せ

た。

ですよねあはは、と苦笑いを浮かべつつも、そこまで怒られると思わなかったためドキドキしながら懐を漁る。

ああ、これだけあれば簡素な旅の宿なら七泊くらいはできるのになと思いつながら銀貨を二枚、目の前の男にそつと差し出した。

目の前の男はおもむろに立ち上がると、信士の肩をぼんぼんとたたき、不意に見詰め合った二人は、困ったように互いに微笑むと、信士の鳩尾に拳大の何かの衝撃が走った。

渾身のストマックブローである。

もんどりうつてのたうつ信士。それを眺めつつ再度席に座りがぶりを振る男。

なんとか平静を取り戻した信士は、じよ、冗談ですよ〜等と引きつった笑顔を懸命に浮かべながら、渾身の思いで虎の子の金貨二枚を握り締める。

これだけあれば二月はニート生活ができるのに、いやそれだけではない、もう少し食費やらを切り詰めればひよつとしたら夢の三ヶ月ニートもいけるのではと、そんな事を考えながら、其の手を前に出しては引き戻し、前に出してはと百面相を繰り返した。

「……まいどあり、もうくんな」

そんな言葉に見送られながら、重い足取りでその場を後にした信士に残されたのは、酷く空しい寂寥感と、残高銀貨五枚と銅貨八枚という、泣いてもいいくらいの現実だけだった。

地下遺跡ゲマニエ。取得経験地もよく、其の上金策も兼ねる点を考慮して選び出された、最も此れ池荘から近いダンジョンである。

クリア報酬である取得技能は魔術書使用技能の最上級技能開放という物であり、『魔術書こそ究極兵器』と言って使う人が極めて少ないだけに、其のダンジョンに関する情報はあまり揭示されていない。

実際赴いた際も、この難易度で其の技能つて、これじゃ誰も来ないわなと思えるほどに、ダンジョンの入り口を潜ると既に高難易度という仕様である。

しかし、そんな入場後の高難易度地帯を抜けてみると、そこからダンジョンボスまでの間はそれほど難易度は高くない。単体レベルは高い敵が多いものの、分布密度を他の高難易度ダンジョンと比べれば薄い方である。

ソロではやや厳しいものの、ペアで潜る分にはレベル制限的にもそこまでは難易度が高くは無い、というのが一時期足しげく通っていた信士の見解。

そのRePOP（再出現）時間も緩めであり、入り口付近との往復を繰り返してみると、適度に休むなどをしたとしてもそれなりの効率で経験地稼ぎができることを知った。

其の上ボス部屋付近にPOPする敵は、地道に稼ぐのに適したアイテムをDROPする。

そんなわけでそこは信士のお気に入り場所であり、また無くてはならない重要な場所でもあった。

暗い路地を慣れた足取りで進む先。

此れ池荘の門柱の手前に、何か得体の知れない物が転がっていた。見たことのある薄汚れたローブに包まれたそれは、打ち捨てられたようにびくりともせず、遠めにはただの粗大ゴミにさえ見える。

信士はそれから視線を外すと、さて明日からの準備をしよう先程見たものはきつと幻だと心の奥底に押し込み、門柱を抜けると自室を指すべく歩を進める。

「あら？ お帰りですか。お早いですね」

そんな言葉に視線を振ると、左から聞こえた足音に体の向きを変える。

一度視線を此方に向けたりヴィアさんは、その後周囲を探るように視線を彷徨わせる。

「ただいま帰りました。何か探し物ですか？」

「ええ、余りに煩かったもので、この辺りに埋め 追い出したのですが、どこへ行ったのやら…」

「ああ、それなら門の外に捨てられてましたよ。なんでしたら運ぶの手伝いしましょうか？」

「いえ、それには及びません。また埋めておきますから」

そうですか大変ですねあははではこれで、とその場を辞した信士は、先程聞こえてしまった恐ろしい言葉をゴミ箱にぶちこみ、削除と脳内マウスポインタを滑らかに動かし、神速の速さでダブルクリックすると、今日もいい天気だなあ、と晴れ渡る青空を見上げ、いつも通りの嫌な音で迎えてくれる階段を上り、自室へと足を進める。

時折聞こえる何かを右から左に、誰も待つ者のいない自室へ帰還の言葉を告げ、其の戸の内へと姿を消した。



### 03 (後書き)

「ちなみに、レンタル料ってどのくらい？」

「一日で金貨二十枚だそうです」

「あきらかにぼったくりだね？ え、あれ？何これいじめ？」

「保険料もあります、まあどれだけ暴れてもいい、ということらしいので、修理維持費込みということですね」

「ああ、なるほ…でも高いよ…じゃああれは？ 悪魔の軍団みたいな、良くぞここまで辿り着いた的演出に必要な軍隊もそのレンタル料に入ってるの？」

「そこは自前で準備だそうです」

「…そうか。ちなみに、今サタン軍団的な人員はどれ位いるの？」  
「……………」

「え？ あれ、何でそこで沈黙すんの？」

「サタン様、あなたは給料も払わず人を雇えるとお考えですか？」

「えっ！ そこは忠義でどうかそんなんじゃないの?!」

「あなたの何処にそんな忠義を誓える部分があるのですか？」

「あれっ!? 魔王だよねっ！ 魔族の王的な立場だよねっ！」

「え、ああ、まあ、名前だけは？ いや、でももしかしたら…」

「いやいやいやちよっとちよっと！」

「うるさいですね。もう少し静かにできませんか？ あ、できませんか、では静かにさせましょう」

「はいすいません！ いやもうほんと勘弁してください！ 自分、生言いました！ あ、ほんとやめて！ やめっちょよ!!!」

こうして今日もいつも通りに悲鳴が響き渡りました、まる



地下遺跡ゲマニエに辿り着いた信士は、その門が開かれているのを確認し、おや？と首を傾げる。

入場制限のあるダンジョンには、其の入場に必要なキーを認証させるために鎮座する彫像が据えられている。

その彫像の姿形はその場所場所で様々な姿を取るが、認証方法は同一である。

腕輪を翳す。

それにキーが埋め込まれていれば、それに呼応するようにキーが流れる。

それが詩の韻律を奏でるように流れ、一節ほどその音が奏でられると、ようやくその門が開かれる。

である筈なのだが。

これはどういうことだろうか、と考える。

この不可解な現象（気がついたらここは『天上転華』と思われる世界！？）に巻き込まれて既に一月。

背に腹は変えられず、半狂乱といえるほど客観的にあれな感じで理性もなにも脳内ダンボール箱の奥に押し込み、それまでモニター越しでしか繰り返したことの無いモンスター狩りに手を染めた。

そして思考が漸く落ち着いてきた頃。

ならばどこまでこの世界は『天上転華』と同じなのだろうか、とそこに興味が移り始める。

記憶を頼りに街の名前や其処からどちらの方位へ行けば何があるかを思い浮かべ、実際に足を運びながらに簡素な地図を作成し。

実際に自分の体を動かして歩き、眺め、食べ、寝て、戦い、逃げ

惑い、話かけ、話しかけられ。

考えれば考えるほど、体験してみれば体験してみた程、この現状に謎が深まるばかりではあるが、それでも今ではひとつの可能性に掛けて頑張ろうと思っていた。

その為にはまずレベルを上げること、と其の為の拠点を確保する為に歩き回って数日。

そこで奇妙な出会いを果たし、現在腰を据えている此れ池荘を紹介して貰った。

拠点を確保できた後は、近場のダンジョンをその脚でどれ程の距離になるかを探り、難易度の低そうな場所であるうとも、腕鳴らしとばかりに脚を踏み入れ、そして今後お世話になるべき場所を探すためにまたその足を周囲の探索へと向ける。

その時見つけたそれを見たとき、懐かしさを覚えたと同時に、辿り着けたという考えが浮かんでも来ていた。

地下遺跡ゲマニエ。

一目でそれと言い当てることができるほどに通い慣れたそこには、まるでその門を守護する彫像の姿が只の女性像ではなく、女神像にすら見えるほどに神々しく見えたほどだった。

その閉ざされた門を確認すると、次に来るときにはその門を開けるようにして見せることを胸に誓い、再訪の言葉をつぶやいてその場を後にした。

「うーん…認証確認も普通に出来るんだな。どうなってんだこれ？」

翳された腕輪から流れる韻律に首をかしげ、それでも『だからといって何時までもこうしていても』ということを出す。最低限

金貨二枚分は確保しねえとなあ等考えつつ、いざ戦場へと気合を入れ、その一步を力強く踏み出した。

ダンジョン特有の不可視の膜を越えた感覚を受けた後、目に映る光景は夥しい数のモンスター。

それらすべての注意が異物を認識するように自身へと向けられるのを感じ、漸く慣れ始めたその感覚に気持ちを高ぶらせながら、それを戦意へと変換するや先手必勝とばかりに動き始める。

「破棄、広域、烈風迅！」

右腕を前へと翳し、スキルワードを唱える。

それを合図に腕輪の周囲に黄色の円環が仄光る。直径十センチ程度のその円環は緩やかに回転を始め、言葉を紡ぐ度に一つ、二つ、三つとその数を増やす。

その言葉が切れると同時に、ザワリと周囲の空間が歪み、何かを形作る気配を見せた次には、それが捕らえられた気配へ向けて疾る。

ゲームという物は、バランスを調整されているものが多い。

魔法の属性にしる、遠距離、近距離の火力にしる、その度合いは様々ではあるが。

地下遺跡ゲマニエに存在するモンスターの大半が水属性かまたは地属性。

それも水属性が七割と、偏っているといってもいい。

相克属性という概念があるこの世界では、水属性に在るモンスターに風属性での攻撃は、通常よりも遥かに優位に戦闘を進められる。その風属性も上位、最上位と高技能になれば成程倍率単位で火力を上げる。それに伴って消費SPも増加するわけであるが。

今使用された『烈風迅』は、風属性魔法に分類され、ダメージは

やや小さいもののノックバック効果を有するために、近距離戦闘の苦手な魔法戦主体のプレイヤーには重宝されているものである。

「破棄、広域、迅雷！」

紫電が疾り、補足された目標を貫く。

その魔法技能の他に、魔法融合技能というものがある。

それが信士の使っている詠唱破棄、広域化という物である。

スキルワードを唱えるだけで即座に魔法を発動させるそれにも、デメリットは存在する。

この世界もまたレベル制であるため、体力はHPという数値であらわされ、また魔法を含む技能の使用には精神力と呼ばれるSPが消費される。

広域化、詠唱破棄の両技能共に、そのデメリットはSP消費の増加。

それはスキル固有の消費数値に対してパーセンテージでの乗算となり、そこに掛かる負担は軽視できない。

数を相手に立ち回る場合、単体と向き合う場合で切り替えることも出来るのだが、それはあくまでゲームとして楽しんでいた時のやり方でしかない、というのが現状。

モニターで見ていた時のように、詠唱中を表すシークバーが表示されることはない。

詠唱文という物を知らない為、現状では”魔法の使用”詠唱破棄が必須”となっていた。

そして、風属性魔法の上位に存在する雷系とよばれるこれには、バッドステータスに感電という付属効果を低確率で発生させもする。

感電状態になると、数秒攻撃不可状態、移動速度減少と、それで得られる恩恵は高い。

それ故に、消費SP量もまたそれに見合っただけの量を持つていくのが痛いところではあるが。

「破棄、広域、迅雷！」

三度の広域上位風魔法により、一息つけるだけに気配を消したその場所に、次の一手を打つべくその歩を進める。

先の魔法で消え去ったのは、水属性のモンスターののみ。後に残る気配は少ないが、それでも無傷の物は居ない。

のっそりと現われてくるのはマジックゴーレムと呼ばれる土人形。その数も、歩を進める毎に見え始める影は増し、三体、五体、六体と視界に増え始める。

その奥にもまた別の気配が感じられ、ここでもたつくことはできないと告げている。

「破棄、広域、炎竜！」

渦巻く火柱が息吹を得た如く宙を舞い、その暴威の姿で目標を飲み込み始める。

土人形、とも呼ばれるゴーレムではあるが、その性質は地属性だけではない。

無属性という物も存在し、魔法による属性相克が発生しない。

そのため全属性を修めていようと、それだけで全ての敵に優位に立てるといふ訳ではない、というように調整されているわけである。

無属性のモンスター相手に魔法戦で挑む場合、求められるのは単純な火力と消費SPとの相談。

その他、魔法の発動後には、待機時間というものも課せられる。同属性魔法の効果が発現中は、その使用ができない、という物。

瞬間で効果を齎し消滅する風属性に対し、地属性はその効果時間

が長い。

火属性と水属性はその中間という具合である。

火力の高低であれば、火属性と地属性が高く、水属性と風属性はそれに劣る。

そしてSP消費度合いとしては、地>火>風>水という傾向にある。

地属性のSP消費度合いが高いのには理由があり、地属性魔法のほぼ全てが広域魔法である、という理由である。

「破棄、地葬！」

地が唾う様に震え、そこから鋭く尖った錘状の波が広範囲に隆起して踊る。

「破棄、広域、炎竜！」

それに進行を止められたマジックゴーレムに更なる暴威が襲い掛かる。

その炎の尾が消えたときには、そこにあつた影はひとつ残らず消えていた。

ふう、と一息。出だしは好調、と意気込みうなずくと、周囲をきよろりと眺めながら、そこに残された売るためのDROP品（金貨二枚の素）をいやらしい笑みを浮かべながら拾い始めた。

#### 04 (後書き)

「そういえばふと疑問に思ってたんだけどさあ」

「なんででしょうか？」

「リヴィアって幹部っていうか、魔王軍の主力なわけでしょ？」

「はあ、まあ。魔族五天王の一角ですから」

「え、なにその微妙な俗称。あと一人削ってどうにかしたほうがいいんじゃないの？」

「……それもそうですね。では、長い間お世話になりました」

「いやいやいや！ ちよつと、待って！ お願い見捨てないで！  
せめて他の誰か削って！」

「……チツ……：そうですね、他となると……モドは野放しに出来ませ  
んし、ズー殿も希少なお方。アム様は魔王城の城主ですし、デスち  
やんも手放すには惜しい」

「ちよつと待ってちよつと待って。今一人なんか聞き違いかな？

おかしいの居たよね？」

「え？ 目の前に？」

「いやいやいや！ 無いから！ 俺可笑しく無いから！そうじゃな  
くてね。え？ 何？ 魔王城って今アムが管理してんの？」

「管理というか、まあそうですね。サタン様が消えてから暫くの間  
に城主名義はアム様の手に堕ちましたけど」

「がああああああああ！ あんちくしょおおおお！！！！あ

そこは！ 元々！ 俺のもんだろっが！」

「いいじゃないですかここで。似合ってますよ、恐ろしい程に」

「うわああああああああああん！！！！！」

軽やかな足取りを窺えるタツタツという音に併せて、機嫌の良さを示すような鼻歌が聞こえるそこには、ニンマリとしたほくほく顔の男が一人。

「いやあ、まさか一匹目で出すかね。これだけでもうここに来た甲斐があつたね！」

右手にある紅く煌く宝玉を思わせるそれを、愛おしそうに眺めながら呟く其の声には、喜色がありありと滲み出ている。

当初の目的の最上位は経験地稼ぎ、かつ元手の回収。副次的にプラス収支と言う感じで考えていた。

地下遺跡ゲマニエには、使用者の少ない”魔術書技能”取得ダンジョンである。

其の上レアアイテムと呼べる物が少なく、そのDROP率の低さも相まって、目向きもされない場所の一つであった。

そんな中でこのダンジョンにしかPOPしないモンスターというものも存在し、そのモンスターが低確率でDROPするものが今信士の右手に握られた『霊核』である。

「知力の核の上位！ 最上位程のレア度はなく、且つ流通量は稀に見かけることのある物！」

霊核というものは六種類ある。

それが示すのは、基本ステータスである力、俊敏、知力、器用、体力、運の六つ。

特に力、俊敏、知力の三種の霊核は人気の的であり、需要も高け



れば値段も高い。

その霊核にも、ステータス上昇値の上昇量に合わせるように、一般、上位、最上位とランクがある。

最上位と呼ばれるものは上昇ステータス+5という効果を持ち、D R O Pするのも凶悪なボスモンスター限定、其の上D R O P率も低確率となっている。

一方上位の物は、高レベルダンジョンのモンスターが低確率でD R O Pするのである。

一般に至ってはN P C 魔具店で普通に買うこともできる。

これで金貨二十五枚は確實、いやひよっとするとき、三十枚っ！  
？ ゴクリッ

そんなことを考えつつ、ノンビリ歩いていたとき、ちょっとした違和感を覚えた。

ノンビリ、あるけすぎじゃね？

地下遺跡ゲマニエは、モンスター密集地帯が入り口だけではあるが、だからといってこんなにノンビリ歩き続けることができる場所ではなかった。

先程までも、五分と歩かずエンカウントしていたそれらが、十分前後現われていない。

それを訝しがりながらも少し歩調を速めると。

前方から黄色い悲鳴が微かに聞こえた。

それで漸く此れまでの引っかかりが解けた気がした。

入り口の門が開かれていたことも、先程からノンビリ歩いていたことも。全て繋がって見え始めた。

信士はこの先に居るであろうモンスターはどんな奴だったかとい

う思考に切り替えると、即座に駆け出し始めた。

「何でっ！何で効かないの！ 嫌っ！ コツチ来ないでよ！」

のそりと浮遊しながら迫り来る四メートル程もありそうな巨体を持つ『ガーディアンゴーレム』を前に、重い足を引き摺りながらそれでも懸命に抵抗を繰り返した。

こんなところで躓けないんだ、と。

この世界に来て変わった、変わってしまったことの一つに、ダメージを受けてもそれほどの痛みが無いというのを知った。

軽い痛みこそ発生するものの、怪我をしたと、骨折したということはない。

ダメージを受け続ければ体が重くなるだけで。

HPと比例するように、ダメージを受け続ければ受け続けるだけ体の各所に重さが増し、HP表示で2割辺りに差し掛かると、もう足を引き摺るほどに体は自由に動かなくなってしまう。

目の前のガーディアンゴーレムの後方には、明らかにダンジョンボスの部屋と見られるゲートがある。

そのゲート脇にある認証台をチラリと見つめると、ここまで来て引き返したくないという考えが過ぎる。

”あと少し！ ボスさえ倒せば終わるんだ”

そんなことを考えるも、そのゲートを守護するかの如く立ち塞がる目の前のそれに成す術も無い状態。

こんな訳のわからない世界に囚われ、恐怖と混乱に苛まれ、それでもなんとか乗り越えられたのはまったく知らない世界ではなかったからかもしれない。

自分は無力な訳でもなく、其の上この世界を知っていた。

友人の一人に誘われて始めたそれは、気がついたらそこが、其処こそが本当の自分の居場所であるかのように思えた。

だが、其の考えは、この状況になってみて全く違ったというのを思い知らせた。

こんな世界に来たくなど無い、と。元の世界に返してくれ、と。

失って始めて知った自身の心に、しかし心のどこかでこんな世界に来たかったという思いもまた存在していた。

だから、耐えられた。

そして、考えた。戻るためにどうすればいいのか。

しかし、考えたところで答えが見つかるはずもなく。

諦めきれない思いで色々見て探せば、きっとどこかにヒントなり何かはあるのでは？ と思った。

奮い立たせた心に、旅をするためには必要だと思っものを集め、そう考える事ですこし、ほんの少しだけ軽くなった心で街を駆けずり回った。

旅に出ようと考え、此れで大丈夫かと不安になりつつさて次は、と考えたとき。

まずは何処に行くべきか、という問いに悩み始める。

一番無難であるのは、西にある学術都市 ガルエイム、かなと考  
えた。ひよっとしたら何かしか文献なりが見つかるのでは？ と。

そういえば、中途にしていたメインクエストも、確かそこでの依  
頼で止まってたんだっけ。

と、思い出す。  
そして。

メインクエスト、という単語に、どこかしか期待が灯った。

『天上転華』において、その膨大なストーリーを紡ぐメインクエ  
ストは、真剣に取り組むものなど一人もいなかった。

あつちにいつてはこつちに、こつちにいつたらあちらへと、先の  
見えないストーリー量に、其の結末の向かう先を知るものは何処に  
もおらず。

自由度の高いこの世界は、ゲーム自体余り馴染みの無い自分には、  
只歩き回っていただけで楽しいという気持ちのほか、この世界で  
自分は何をしよう？ ということを考えさせられる。

それならばと勧められたのがメインクエスト。  
成長に合わせるように低レベル帯のダンジョンから始まるクエス  
トに、この世界の情勢、成り立ち、それを見聞きし、其の行き着く  
先に何かあるのかを自身の目で見届ける、という概要を教えて貰い、  
それだっ！とばかりに嬉々として取り組み始めた。

そこに一縷の望みがあるのでは、と行動を開始すべく動きだした。  
そしてやや苦勞こそしたものの、一人でもなんとかなるじゃない

か、とそんなことを考えていたのがどこか懐かしく。

退くべきだ、とは頭では解っている。しかし、早く先へ！ とい  
う思いがそれをさせない。

泣きそうな顔になりながらも、動けない足を叱咤し、この状況の  
攻略の糸口を懸命に探る。

が、追い詰められ、気持ちだけは逸り、冷静になれないこの状況  
で、そんなものがすぐに見つかるはずもない。そんなものがあれば  
こんな状況になどなっていないのだから。

無駄な足掻きと知りつつも、このまま何もせずやられるのだけは  
我慢できないと身構えたその時に。

「大丈夫かっ!？」

と、大音声の叫び声に振り向くと。

此方に向けて駆けつけるその姿に、この状況だからだろうか、ど  
こか英雄の勇姿を幻視させ。

気が緩み、倒れこみそうに震える足に気合を入れて、決してみっ  
とも無い姿は晒すまいと。

其の人物がもうすぐ側という時、救援と感謝を告げようと口を開  
こうと視線を合わせる。  
と。

「純…エルフ…だと？ 貴様……ネカマだろ？」

ビキッと青筋が浮かぶほどの怒りと、抑えようの無い殺意を抱き、ミシリと音を伴わせ周囲の空間が歪みそうな程に右手を握り締める。

それに何かを感じたか、その男性は少し腰を引き、更には口元すらも引きつらせ

「ま、まあ今はどうでもいいことだなうん。そ、それより助けたほうがいいのか？ かしら？」

そんなことをやや口早にいつつ、戦闘の準備を始めていた。

「ごそごそと取り出されたそれは、どう見ても魔術書。」

助ける等と言い出した割に、何もわかってなさそうなその男に侮蔑の視線を向けつつ声を発す。

「助けるとか言っておいて、あいつがどんな奴か知ってるの？ いい、魔法が全く効かないの！ 全くよ、ま っ た く！ じゃなきゃ私だってなんとかなったわよ！」

そんな私のキーキー声に、驚いた顔を向けつつも、「まあ、知ってるけど」とぼそぼそ呟き、休んでていいよ、と言葉を残して歩き出す。

知っている、という言葉を言うわりに右手のそれをこれから使うとする様は、明らかに違和感しか覚ええない。

魔術書とは、魔具併用武器であり、その効果も魔法攻撃力補助効果が高いという代物。

それに物理攻撃力が全く伴わない訳ではないのだが、この世界には、同種の効果を求め、且つ物理攻撃力もそれなりにある武器が存在するのだ。

杖がそうであり、だからこそ主流はそちらになっている。

そんな存在の影に隠れる魔術書は、はっきりいって使用者は絶滅種扱い。

知人に変り種が一人いたからこそ目にするのは初めてではないが、それでも戦闘で使用するという人物はこれまでみたこともなかった。だからだろうか。

自分がどこか、この戦闘が先程までの自分の二の舞で終わるのでなく、ひよっとしたらなどと考えるのは。

ふと何かが聞こえ、意識を前方に戻すと、先程の男の腕輪に魔法の使用を示す、黄色に輝く二つの円環が、誇らしげにゆっくりと回り始めていた。

05 (後書き)

「サタン様。仕事をしてください」

「してるから。此れでも一生懸命してるから」

「いいえ、無為な時間が多すぎます。もっと魔王討伐を目指す若者を増やしてください」

「いいじゃんこのくらいで。それにここに乗り込んでくる奴らの顔見てるだろ？あの

『え？ 本当にここが？ 何かの間違いじゃね？』みたいな顔とか。

『うつわこの部屋貧乏くせえ…魔王つてどんだけ』みたいな哀れんだ表情とかさ」

「サタン様。それは仕方が無いではないですか。分相応という言葉もございます」

「…いや。いやいやいや！ それをいうなら魔王と言う名前はこの部屋こそ似合わんだらう？」

「確かにそうです。それゆえに魔王城がございます。あれは素晴らしい。

見た目にも映え、其の存在感ですら誇らしい。正に王の威厳といましようか」

「そうそう。王がいるべき場所はまさにあそこだと思っただらう？」

「ええ、あそこはまさに王の居城。決してゴミ捨て場ではありませんん」

「うんうん…うん？ ゴミ捨て場？ あの、リヴィアさん。つかぬことをお尋ねしますが、えー、どうしてゴミ捨て場などという単語がでてくるのでしょうか？」

「…サタン様、外をご覧ください。今日はいい天気ですね」

「ちよつ、あの、リヴィアさん？ 如何してそんなカワイイそんな者を見るような眼でこちらを眺め、かつ強引に話題を切り替えたんで





「破棄、術書解読」

聞いたことのない技能名に、それによりこれから何がと考える間に、行き成り助ける等と言ってきた乱入者の持つ魔術書から光が零れはじめた。

それを見て、これが魔術書技能の一つなのだろうと考えていると、こぼれ始めたその輝きは、明滅を繰り返すようにその色彩を変えていく。

赤から青へ

青から緑へ

塗り替えられる其の色は、六色まで及ぶと、眩い白光を拡げた後に、吸い込まれるような緑色で固定された。

「風かあ、めんどいなあ」

ぼそりと呟き、ぼりぼり頭を掻いたかと思うと、すうっと重心を下げ、踊りかからんと獲物を見据える。

その視線の先、先程まで手も足も出ずにいたそのガーディアンゴレムは。

未だターゲットイング対象は私のままのようで、気がついてみるともうその攻撃範囲圏内へと踏みまわるといふその時に。

「はっ！」

掛け声と共に繰り出されたのはその男の持つ魔術書での直接攻撃。

ベチン、という情けないような気の抜けるような、どこか場違いな程そぐわないその音と光景に、しかしその後の変化に目を見張らざるを得なかった。

でたらめだ、と叫びだしたい考えも。

ありえない、と糾弾するべき声も。

其の光景を前に何もできないでいた。

### 「破棄、術書解読」

自分が攻撃対象から除外された現状、それでも助けると豪語したからにはまずはその対象をこちらにひきつけることから始めないといけない、と正攻法を捨て、即効勝負へと戦略を切り替える。

術書解読は魔術書技能の最上位技能開放で使用可能なスキルであり、数冊の魔術書に付随する固有術式の展開が可能となる技能である。

固有術式が付随された魔術書は、信士が知る限りでは十冊。

それぞれにそれぞれの効果が内包されてはいるが、その効果を開放するためには魔術書技能の他にも武器研究技能の最上位、魔具研究技能の最上位も取得していなければいけない。

魔術書技能の最上位を取得し、更に武器研究技能の最上位、魔具研究の最上位を修めることができさえすれば、固有術式を展開することができる、というわけである。

そして現在其の手にあるのがそのうちの一つ。

『バスデイマ』 術式開放：モディファイ 開放状態で物理攻撃を受けた対象の強制属性転換。

その際、  
転換属性はランダムで決められる。

六色に煌く其の光が、白光の後、緑で固定される。  
赤は火を、青は水を、緑は風を、黄は地を、銀は闇を、金は光を。

「風かあ、めんどいなあ」

風属性に対する有効属性は地属性。

一撃の火力がそれほど高くなく、其上SP消費が高い。

しかし、術書解体は待機時間がべらぼうに長い。  
気に入らないからもう一度、というわけにいかないだけに、こればかりは我慢するしかない。

「はっ！」

準備の完了時、事態は一刻の猶予も残しておらず。

掛け声と共に、属性転換を果たすと同時、ターゲット対象を此方へと誘う。

ベチン、という聞きなれた音と共に、ガーディアンゴーレムの全体が緑の光に包まれる。

それと同時、振り向かれた体は、其の変化を気に掛けるでもなく鉄槌の如き強度を誇るその右腕を振り下ろす。

そんな慣れ親しんだ攻撃パターンを頭の片隅に、その場から距離を離すようにゆっくり後退し、戦場となる位置を移し始める。

「この辺、かな。さて、派手にいきますかね」

魔法無効、という特性を持ったこのガーディアンゴーレムは、魔法耐性が恐ろしく低く設定されている。

物理攻撃耐性はそこらのボスモンスター並に高いので、何の対抗策も無く正攻法で向き合おうと、通常はかなり凶悪な部類になるモンスターなのである。

そんな凶悪な相手となるはずであった守護者が、一度、二度と魔法を放つ度にガクン、ガクンと目に見えて動きを鈍らせ始めている。

「破棄、岩槌！」

これで終わりとはばかりに繰り返されたそれは、数えて僅か五度目の魔法。

その読みは狙い過たず吸い込まれると、それまで聳えていた巨像の守護者は、其の存在を消滅させていた。

後に残るのは、疲れを見せず、無駄な労力をといたげに怪しい魔術書を右手に持つ無然とした悪魔のハーフの男と、只呆然と其の光景を見ていただけの疲労困憊で立つこともままならないという純エルフの少女の姿だけであった。

「おい、おい、戻ってこーい。おい……だめだこりゃ」

ぐらぐらと揺れる頭に意識を戻すと、肩を？まれ体を揺さぶられていることに気がつく。

何！？　と思うと同時に、何時の間にもそこまで近づかれ、かつ揺さぶられる現在までそれに気がついていなかったということに恥ずかしさが込み上げてくる。

驚いたように飛び上がりかけた自分を見て、やっと気がついたかと呟くと、少し距離を取って溜息を吐き出していた。

其の光景に少し居心地悪く身動きし、チクチクと刺す罪悪感を押しさえつけながら先程の光景を思い出す。

「さ、さっきのあれは、一体なんだったの？　魔法、効いてたよね？」

「ん？　ああ、あれはな。うーん、そうだな、どうすつか」

考え込むようなその仕草に、なにか秘儀的な何かなのだろうかと考え至ると、好奇心だけで聞くのはまずかっただろうか？　と思えてしまう。

「まあ、そうだな、あれについて知りたいなら……金貨二枚で手を討とう」

どうだ、と聞きてくるその表情は、若干切羽詰ったようにも見えるものの、どこかしら『俺、楽しんで儲けたいだけなんだぜ』と囁いている様にも見える。

「それなら、遠慮しておきます。知り合いに武器が好きな人がいますので。といつても、会えるかどうかはわかりませんが……」

面白いほどあからさまに肩を落とした其の男は、武器が好きなという辺りでピクリと肩を震わせ『まさかね……』と呟き、それに続いた言葉に、「ああ、うん、誰かと会えるかはなあ」と呟いた。

「まあ、いいならそれでいいだろ。 どうしてこんなマイナーな場所に来てるんだ？」

それを言うならそちらこそ、と考えたところで、そういえばここは魔術書技能の取得ダンジョンだったつげと思い出し、となれば杖を持つ私がここにいることを不思議に思うほうが自然であると帰結する。

いや、それよりも、と浮かぶ考えは、やはりこの目の前の男もまたこの『天上転華』の世界に捉われたプレイヤーの一人であり、自分と同じ境遇であるということだ。

聞きたいことなど山ほどある。それを思い出してみると、とりあえずここを出て落ち着いた場所に移動したほうがいいのではと思考が移る。

そんな考え込む姿を不思議に思ったのか声を掛けられ、それを告げると納得したように頷いてくれた。

「そうだな。まずはここを出てからか。どーする？ ボス倒しとく？」

あっけらかんと告げられた其の言葉には、何の気負いもなく、それこそ「飯でも食ってく？」みたいなノリで告げられたそれに、どう返事するのが正解なのか迷ってしまう。

先程の光景を見て確かに思うところがないではないが、それでもどこか釈然としない気持ち湧く。

先程の守護者の強さを目の当たりにさせられ、その上さらにボスまでそんな簡単だという風に語られてしまうと、自分がどれ程無力なのかを思い知らされているようで。

それでもやはり、好奇心が勝つたのだろう、しっかりと頷くのを確認したその男は、「んじゃ行こっか」と事も無げに言い放つと、

認証台へと歩を進める。

開かれたゲートを確認すると、やはり緊張する。

其の奥に居るのはボスである。幾ら自分が相手をしないとはいえ、やはり怖いものは怖い。

「そんな固くならなくていいんだぜ？ 時間は少しかかるけど…見ればそんな緊張が馬鹿らしくなるから」

苦笑と共に向けられた言葉。

それを残してゲートへと消える背中を追って、しかしやはり恐る恐るといった感じで一步、足を踏み出した。

ここで待つという選択肢もあるが、やはり好奇心には勝てなかった。

そして、思った。

ああ、私の気苦労など、本当に取るに足らないものだったんだ、と。



## 06 (後書き)

「さて、朝飯朝飯」

イタダキマス、の言葉の後、白い湯気の立つパールホワイトの輝きを放つ茶碗によそわれたそれに箸が届く寸前、バターンと玄関が開け放たれる。

「お前が魔王か！ 漸く辿りつい…、…なあ、本当に、魔王、だよな？」

これからまさに朝一番の至福を味わう寸前の出来事に、事態について行けなかつた思考が、はっと切り替わるように覚醒する。

「くくく、いかにも。我こそが魔王サタンである！」

「…いやな、俺もこんなボロアパートに本当にいるか疑わしかったんだ。それでも、もしかしたら？ っで一縷の望み？ に掛けてきたんだけど…お前が魔王で、いいんだよな？」

「ほう、我を疑うというのか？」

「いやそれ……なにその茶碗一杯のご飯と、おかずが味ノリ2枚？

あと水だけって……だめだろう？」

「…言っつな」

「俺だつてさ、この装備そろえる為に食費切り詰めたりしたけどよ？ どんぶり飯と納豆、味噌汁、それに漬物くらいは食ってたぜ？ ……それで我が羨ましいとでも言っつと思っつたか？」

「いや、其の顔みただけで言わなくてもわかつたから。ほら、泣くなって。無理すん、いやそんな膝から崩れ落ちるとかしてまで耐えなくていいから」

「申し訳ありません、折角尋ねて頂きましたのに」

「え、ええ！！あ、いや、そんな、でへへ」

「魔王サタン様のライフがグロッキーのようですので、私が代わり

を勤めましょう」

「え、いや、そんな、まいっちゃうなあ、ぐへへ」

「いえいえ…それにしてもあなた様も、よくまあそんな貧相な装備で魔王討伐とのたまったものですね」

「うへへ…へ？」

「いえ、これまでここに辿り着いた方々なのですが…比べるのも無礼だと思うほどの方々でしたもので」

「え、つとあの、いえ、これでも自分頑張ってる」

「ああ、頑張りが足りないといっているではありません。実際其の顔で…」

「ちよ！ え？ 顔とか関係ないんじゃない？！ 関係あるの?!」

「え、ああ、いえ…でも、ねえ？ それに顔だけというよりも、顔も含めてもつどこを取っても……」

「何それ！ えっ？ 俺だめなの？ そんな全否定されるほどのなの?!」

「はい、それはもうこれ以上ない程に」

「迷いも見せずに全肯定!!!!」

「ああ、そんなところで蹲らないでください。ゴミ収集車はここまできてくれませんので」

「うわああああああん!!!!!!」

「おーい、暇ならお前もやってみっか？」

ひよいひよいと移動を繰り返しては手に持つそれを床に置き、それを起動させてはそこから離れる。

床に置かれたそれは数秒経つと、青白い光を放つ高さ一メートル程のクリスタルを浮かび上がらる。

『幻体』

確か、そんな名前の魔具だったと思う。

ドワーフにのみ作成が出来、且つ素材を集めるのが難しいため、そんなにほいほいと使われているのはみた事が無い。

効果は発動後モンスターのターゲットを引き受けるというもの。

一定回数 of 攻撃、またはダメージ総量が一定値を越えるまで、効果持続、一定時間経過でも消滅する。

そして、今日の前で見られる光景。

ボスモンスターがその『幻体』に、『重強襲』を繰り返しているだけ。

『重強襲』というのは槍技能に含まれる上位技能のひとつ。

攻撃力を大幅に増す一方で、使用者のHPを2%犠牲にするというもの。

つまりは。

「うはははははははは。あ、ブーストまで行ったら残り5分てとこ

だから」

上機嫌でそんなことを叫ぶ男が只其の作業を繰り返しているのを見ていただけ。

私は、暇な時間を持て余していた。

「おっと、ようやくブーストか」

ブースト、というのはダンジョンボス限定技能の俗称。

効果は個別に違いこそあるものの、瀕死時に発動、という発動条件は一緒である。

移動速度増加、物理・魔法攻撃力増加、詠唱減、防御力低下。

上記の効果がそれであり、その増減数値は各個で異なるものの、脅威になることには違いが無い。

急激に移動速度の上がった相手に、信士はブーストが発動するまでにボスのHPを削りきったことを確認する。

今回選択したボス討伐方法は、ここ以外の場所でも使用可能な相手はいるが、所謂ハメ技という物である。

モンスターの攻撃パターン、此方が何をすれば相手はどう動くか？というものを研究し、一定の行動を取らせ続けることで、戦闘を有利にすすめる技法の一つである。

このハメ技を選択して挑む人は少ない。

単純に知らない人も結構いるのだが、知っていても選ばない人が多い。

理由も単純明快。

まず金銭的にも赤字であること。

『幻体』一つにつきを知人から購入するにしても、知り合い価格で購入しても銀貨三枚。普通に見かける値段は銀貨五枚が相場となっている。

そして、時間が掛かるのである。

重強襲だけを使用してくれるわけではない。

そしてもう一つは迷信の類ではあるが、この方法でボスを倒すと、レアアイテムのDROPP率が低いというものである。

大幅に時間を掛け、かつ散財し、そのうえDROPP率を下げるかもしれない、となるといかに安全なハメ技であろうと、今ではどうしても倒したい時に選ぶ選択肢という認識をされている。

ブースト状態のこのダンジョンのボス、アスタリスクはその重厚な騎馬鎧の姿に長大な槍を煌かせ破壊速度を上げながら次々と『幻体』を消滅させていく。

信士はそれに視線を移すことなく縦一列に幻体を並べ始める。

一つ、二つ……十二を数えた辺りでその作業を終えると、並べ終えたその最後尾で待ち構える。

遠めにも其の距離が魔法の射程を測る為であるというのは窺えた。

アスタリスクは目の前にある幻体を破壊すると、次の獲物を求めて移動を始める。

その対象に選ばれたのは、一列に並べられた幻体。

それに向けて移動を始め、其の手に持つ槍を振りぬかんをした時、炎の竜が現われる。

それが消えるのを待たずに岩の槌が頭上に現われ、更に次には氷の槍が三本奔る。

紫電が駆けた後には火柱が上がり、またしても氷の槍が三本奔る。

「破棄、地葬！」

地が唾う様に震え、鋭く尖った錘状の波が広範囲に隆起する。

それがアスタリスクを二度捕らえた時、爆発を想起させる轟音を残し、幻体を僅か一つだけ残しその姿を消失させた。

「ふいー、終わった終わった」

疲れた様子も見せずにノンビリ歩く其の姿に、どう声をかけたものかと悩むことになるとは、ボス部屋の前で意気込んでいた私としてはさすがに思っても見なかっただけに。

「さっきのあれは……なんていうか、あれでいいの？」

思ったままの感想を口にした。それに対する返答も何の気負いも無く。

「ん？ああ、まあいいんじゃない？ いやさ、実際ガチバトル以外認めないって人も居るけどさ。実際赤字だし、時間かかるし、いい事はないんだけどね。今回は仕方なくかな」

「ここ以外でも、こんな倒し方できる場所もあるの？」

「ん？ああ、結構あるよ？ 有名所だと、『迷いの樹海』のボスかな。あそこは早けりや五分で終わるし」

「…そう、なんだ」

それよりとつと出ようか、という言葉に、「迷いの樹海が……私の苦勞が…」と吐き出され続ける呪詛を溜息一つで締めくくり、そうしたほうが精神的にもありがたいと頷きを返すと、ダンジョンボスを倒すと開かれる、入り口へと送る帰還ゲートへ歩き始めた。

「本日は助けていただきありがとうございました」

テーブルに広げられた料理を幸せそうに口に運びつつ、気にしないでいいよという言葉向けられる。

地価遺跡ゲマニエから出た二人は、信士の近くに街があるからそこに行こうか、という意見を受け、それなら日も暮れる前に移動しようということになり。

半日も掛からず辿り着いたそこは、小さい、というほどには小さくない、それなりの規模を持つ街だった。

ゆっくり出来る場所を探そうという意見に、それなら腹ごしらえも兼ねてどこか食堂にでも行こうとなり。

「これとこれが美味しいけどまあ、好きに頼めばいいよ」

という信士の言葉にありがとつと頷きつつ、頼んだ料理の到着と共に始められた会話は、料理が減るにつれて本腰を入れ始める。

「んー、ごちそうさまつと。それじゃお互い聞きたいことは山ほどあるだろうけど、まず何から話そうか？」

「そうですね。信士さんはこれまでプレイヤーだった人と出会ったことはありますか？」

「んー…三、四…君、えつとカーリンを入れて五人、かな」

「えつ？ そんなに見かけてるんですか?!」

「ん？ ああ、見かけたといのとは少し違うんだけど。俺が今住んでるアパートにさ、俺がそこに住む前から居る人でね。隣に住んでる人にそうだって聞いたんだよ」

ただ、見かけたかというそれは無い、と言う。  
隣に住む沙丹さんが言うには、そうであるというだけらしく、其の人達は長く帰ってきていないということらしい。

聞いた情報だけでいうなら住人は全員九十オーバーであり、純獣人、エルフのハーフ、純悪魔、悪魔のハーフの四人、らしい。  
全員が同じ腕輪を付けているという言葉を聞く限り、その人達がプレイヤーであるというのは信じてもいいだろう。

「それで、カーリンがあそこに居た理由ってのは？」

「そうですね…んと、どこから説明すればいいんだろ。少し長くなってもいいですか？」



それに信士が頷くのを確認し、話し始める。

この世界に来て沸き起こった葛藤。その現実に挫けまいと考えた末に辿り着いた思考。

メインクエストの結末こそが鍵なのでは？

そうして始めた旅の末、順調に進んでいたそれが、あそこで躓きそうになったということ。

「成程、ね。っても、ゲマニ工攻略が必須のクエってあったっけ？」

「えっと今現在の進み具合ですけど、五章の…ガルエイムの学者の依頼で遺跡調査っていうところで…」

「五章…遺跡…ああ。あつたあつた。そうか、いわれて見れば前にも何回かそんな奴と会ったことあるな…：ルートがゲマニ工だったけ？」

「そこまで詳しくは…結構知ってるんですね？ 私は知人に連れられて行くか、情報サイトと睨めっこでしたので」

まあ、と曖昧に浮かべられた笑みは、何となく照れを含ませてはいるものの、苦笑という印象が強い。

それから表情を一転させ、考えるようにして押し黙る。

そんな変化に驚きこそしたものの、考えごとの邪魔をするのもあれかな、と声を掛けるのを控えた。

「メインクエストからのアプローチ、か。ああ、そう言われてみればそれが正解な気もするなあ」

そんなつぶやきに、吃驚して顔を上げる。

あいかかわらず変化のない表情のまま、そうになると、とか、あいつは確か、等と呟いている。

それからふつ、と遠くを見つめるように焦点の定まっていなかった瞳が、漸く現実にはピントを合わせたかのよう意思を宿し、それをぼんやりと見ていた私の視線をぶつかり、バツが悪そうに謝ってきた。

「いや、ごめんね。考え事が長くなっちゃった。うん。俺もそれは可能性があると思う。どうして気がつかなかったかなあ、ほんと…」

其の言葉に褒められたような気がして嬉しくなったものの、続く言葉に表情が固まる。

「五章の最後は確か…魔王城の視察？…門番の討伐だったっけ？あれソロだと厳しかったはずだけど大丈夫？」

油の切れたロボットの様にガクガクギギギという動きで浮かんだ表情は、焦る心を全面に出された酷く滑稽な物だったのだろう。

それを見て苦笑を浮かべられ、自分の考えを先回りするように答えを返された。

「まあ、手伝うのも吝かじゃないけどね。ただまあ、他に知り合いが居ればそっちに頼った方が無難かもしれない。連携とかがつてのは、やっぱりある程度慣れも必要だしね」

魔法主体が二人よりは、という言葉に、ああ、そう言われてみればという思いが沸く。

とはいえ。

知り合いが居れば、という言葉に返答が詰まる。

それを察しているように

「人が一番多そうな、どっちがいいかな…。まあハルムーンかミルドサレアか…。普段どっちの街を良く使ってた？」

大陸中央にある王都であり首都のミルドサレア。

大陸南にある商業都市 ハルムーン。

共にプレイヤーが求める施設が数多くあり、活動拠点として有名な場所である。

「おね…師匠が、あ、このゲームの知識とかそういうの教えてくれた人で、その人が良く使ってたのは中央ですね」

「ミルドか。うーん、俺もそっちのが知り合い多かつたし、一度足運んでみるかねえ」

「あの、その、えーとですね…もしよかったらでいいんですけど…」

うん？ と疑問気な視線を向けられて、言葉が詰まってしまった。そのまま勢いで続けてしまうべきだったと後悔しつつも、なんとどうかこう改まった空気になると、恥ずかしさが込上げ始める。

「その、一緒に、行きませんか？ というか…ほら！ 私エルフだから移動補助の魔法持ってるんです！」

キョトン、と目をテンにして固まって数秒。勢い余って捲くし立てるように告げられたそれに対処が返ってこない状況に、更なる羞恥が込上げてくる。

そんな耐え難い空気に響き渡った男の返答は、肯定を示す言葉だ

った。

「オツケ。一緒に行くか。ミルドで誰もいなきゃまた一人になっちゃうだろうしな。メインクエストも五章越えれば当分は難易度高いのはいし。」

誰も居なかったら、多少きついかもしれないけど、二人で挑戦してみよっか」

それじゃあ旅装から色々準備をしなきゃということになり、明日の朝に街をでようと話を終わらせ。

食堂を後にするときに「あ、会計は別で」という言葉に殺意を覚え、それじゃあ明日、と言って消える背中に、呪詛のありったけを放ちつつ。

まあ、確かに「好きに頼んでいい」という言葉に、勝手に期待したのは自分だし、いやでも店員さんも驚いた顔してたし、自分もあんな場面はきつとなんて淡い妄想をしただけで…でもなあ。

とぼとぼ歩いて宿を探し、部屋を取ると。

久しぶりに沢山会話したなあ、とそんなことを考えていると、襲い来る睡魔に瞼を下ろした。

07 (後書き)

「あれ？リヴィア、髪切ったの？」

「はい、まあそれほど切ってはいないのですが。よく気がつきましたね」

「え？そりゃ四六時中一緒だし。しかし、ふーむ。前の方が好きっちゃー好きだけど、その位の長さも似合ってるね」

「ありがとうございます。そう言って戴けてうれしく思います」

「そんな大袈裟に言わなくてもいいと思うけどね。うん、雰囲気的にも落ち着いて見えていいと思うよ」

「そうですね、ありがとうございます」。

そういえばサタン様、先日ズー殿より臨時収入が御座いまして。

今日は私も機嫌がいいので夕食は少しばかり豪華に外で食べませんか？」

「え？ そうなの？ ズーはあいかわらずいいやつだねえ。そうだね、偶にはそうしよっか」

「それでは準備を致します」

「それにしても、ズーの奴いつ来たの？ 顔だしたんなら俺にも挨拶くらいしてもいいだろうに」

「そうですね。三週間前でしょうか」

「あれっ？！ そんな期間ズーから臨時収入あったってこと黙ってたの？！」

「え？ はい。まあ、いいかなって」

「いいかなって……いいかなって……まあ、いいけどさ」

「それでは参りましょうか」

「あ、ちなみに機嫌が悪いとどーなるの？」

「え？ まあ、そうですね……？ぐ？ いやそれだけだと……ひねる？……いつそ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいもうそれ以上考えないで

今からそんなこと考えないで

『もう、会わない方がいい』

辛そうにゆがんだその表情には、後悔というより慙愧が強く見え、そんな顔にさせてしまったのが自分であると思うと、ひどく居た堪れない、と思うよりも強く、鋭く心に痛みを齎した。

それでも、ここで泣いてはいけない、と、その感情の暴走だけは必死に押し留めなければいけないと、力いっぱい握られた両の手に、歯を食いしばるしか出来なかった自分には、何も返事をすることができなかった。

ただただ、頭に乗せられたその手の大きさに、懐かしい安堵を覚えると同時、それもこれで最後であると、これ以上甘えることはできないと、そう考えるだけで手に入る力はより一層と増していった。

無視されるだろうとも思っていた。

笑顔を浮かべて会話ができるかもとも思っていた。

それでも、結局迎えた結末は、お互いにひどく傷つけあっただけという、予想通り過ぎた結果だった。

しばらく続いたその沈黙に動きがあり、それがこの再開の終わりを悟らせる。

釣られるように見上げた先、見受けられるものはすでにその後姿だけ。それに込上げてきた寂寥感は、必死に押し留めた双眸を決壊させ、一筋の道を作り始める。

『さよなら。』

、きつと大丈夫。

「ぎゃあああああ

あ！！！刺さってる！ 刺さってるから！」

刺さってる？

はて、それはどんな意味だったかとぼんやり思索していると、再び悲鳴が響き、ああそつだこれは朝の、と意識が覚醒し始める。

「ごめんなさい！！ もう逃げませんから！ ちょっと足！ 刺さってるから！ ほら血がこんなに！」

むくりと起き上がり、ぼんやりと周囲に視線を向ける。

先程までの光景が霞むように思考の片隅へと消え去り、ああ、夢を見てたのかと思うと、ひさしぶりに思い出したな、と呟いた。

億劫そうに体を起こし、このままいつまでも考え込んでいられないと顔を洗うべく井戸へと向かう。

何でまたあんな思い出を夢にみたのかと考えつつ、そういえば昨日、久しぶりに他人と長く会話をしたからきつとその影響かもしれないと考えながらふらりふらりと歩いていた時、階段がそれまで以上の悲鳴を上げた所で意識が現実へと引き戻される。

今日は断末魔がずいぶん続くなあ、と思いつつも、待ち合わせに遅れないよう戻って準備をしようと思えばきびきび部屋へと歩む。

準備をすませ、そろそろ店を開ける時間だろうし食料でも買って置こうかと部屋を出ると、断末魔の終焉と共に206号室の玄関が開かれた。

「あら、おはようございます。…旅の準備ということとは、何処かへ？」



「あ、おはようございます。そうですね、しばらく部屋を空けることになりそうです。これからその挨拶にと思ってましたので、ちょうどよかったですよ」

「それはそれは。それで、どの位になるか等の予定は？」

「そうですね、はっきりとは。昨日知り合った人と暫く行動するかもしれませんが。途中近くによる事が有ったら、という風に考えます」

わかりました。私から伝えておきますのでお体にお気をつけて、というお見送りの言葉に会釈を返し、街を指して歩き始めた。

買うものを買って、街の出口を目指す途中、宿の前を通りかかったところで掛けられた声に視線を移すと、昨日であった純エルフの少女が手を振っていた。

お互いに準備が整っていることを確認し、それじゃあ行きますかと街の出口へと足を向けた。

「おや？ どうしましたサタン様」

「ん？ ああ、山田君も行ったんだなあ、と思ってね。僕としては彼に結構期待してるからねえ」

「…彼が辿り着くと？」

「可能性は高いだろうね。リヴィアも近くでみてたし、そう思って

るでしょ？ さて、願わくば……」

それに答える声は無く。見上げた視線の先には広がる青空が映るのみ。

「そういえば信士さんは中央に着いたらどんな予定を考えてます？」

「うん？ 俺はとりあえず…街ぶらついて、プレイヤーがそれなりに居るのがわかったら…これをね」

そう言いつつ取り出されたものは、手の平大の大きさで、銀色に輝く宝玉に見えるもの。

「銀色、で、その大きさって…あの、もしかして、知力の霊核の、上位ですか？」

「ごくり、と喉から手が出るのを飲み込むように、まじまじと向けられた視線に気づくことなく、得意げに頷きつつ肯定の返事を返す。

「そ、それで。ど、どのような形式で？」

「そうだなあ、プレイヤーがそれなりに居るなら、二日のオークション形式で即決無し、かな」

そうですか、とがっくり肩を落とし、自分にはやはり縁が無い物

なのだと諦めを見せた。

中央都市ミルドサレアと、商業都市ハルムーンには、プレイヤートレードを支援する店がある。

装備品やレアアイテム、自作魔具などの売買を代行してくれる代わりに手数料を戴く、というシステムである。

上限日数は二日で、販売形式も即決金額揭示か、オークション形式のどちらかを選べる。

オークション形式の場合、開始値は1銅貨の固定と安く買い叩かれるリスクもあるものの、手数料を安く済ませることができるというメリットもある。

即決形式の場合、手数料が一律で揭示金額の一割。オークション形式は銅貨二十枚と安いのである。

稀に見かけることも無く且つ有用な品はオークション形式で出されることが多く、だからこそその噂が広まるとその競り合いを制すべく終了時間前には購入を賭けてプレイヤーがそこを占拠する。

「まあ、そんな訳で俺も噂を流しつつどれくらいプレイヤーが居るか調べようかなとね。即決で直ぐに物が消えるよりも、人が集まるまで売れない形式にしようかとね。

まあ、稼ぎも大きいほうがいいってのが正直なところだけど、それよりもその中に知り合いが居れば儲け、居なくてもその噂に人が集まってくれば目的達成ってところかな」

はあ、とそこまで考えているとは思って居なかっただけに、先程までの物欲しそうな視線は消えてしまっていた。

まあ、ほんとはあげちゃってもいいんだけど、今回はごめんね、という言葉に、ぶんぶんと首を振ると、噂を広めるの手伝います！と気合の入った元気な声を張り上げた。

「あはは、まあそんな気負わなくてもいいよ。まあそんな訳で俺は

その間適当に時間を潰す予定だから、その時間でカーリンの尋ね人探すの手伝おっか？」

「あ、そうですね。ミルドサレムは広そうだからなあ。お願いしてもいいですか？」

「うん、名前はなんて言う人？ 有名な人？」

「えっとですね、ウサミツチという名前の「え？」…知ってます？」

「…ミルドに居て、ウサミツチ？ あー、もしかしてウエボンマニアだったりする？」

「あ、はい。そうですね。有名なんですか？」

「あー、うん、有名、だねえ…その上思いつきり知り合いだねえ…」

他には？という問いに、二、三人の名を上げてみても、聞いたこととは無いという返事が返ってくる。

一応の特徴は教えておき、もしオークションを見に来ている中に其の姿があればという感じでの協力を頼み、それからまた話題が戻った。

「じゃあ、取り合えずはウサミを探すってことで。あとはオークション二日目に様子見てからにしようか」

あいつが居る場所は決まってるし、という信士の言葉に、二人は同時に苦笑を浮かべた。

「居るとしたら、やっぱり…動いてないですね？」

「あいつがあそこから？　どっかダンジョンに行く以外はあそこしかないね」

呆れたような声音で断定したように話すその言葉に、どこか付き合い合いの深さを感じ興味を覚え、好奇心のままにその疑問をぶつけてみると、言い触らすなよという呟きの後、観念したように答えてくれた。

「まあ、不本意ながらクラスメイトだよ」

といい、見つけたら教えるからと締めくくった。

目前に見え始めるミルドサレムの姿を前に、少し歩調を速めるその後姿を呆然とみつめた。

この人がお姉ちゃんなの？

08 (後書き)

ゴンゴン

「おーい大将う。おーい」

ガンガンガン

「おーい、いねえのか？ おーい！」

メキヨツ

「あ……まあ、いいか。んー、いねえみてえだなあ。どうすっかな……。まあ、書置きでも残してくか」

「え？ あれ、何で玄関壊れてんの？」

「そうですね、出かける前はまだ現役でしたね」

「うん、だよな？ その表現もどうかと思うけど、そうだったよね？」

「ええ……サタン様、これは書置き、みたいですね。……成程、サタン様、どうぞお読みください」

「ええっと、何々。」

『暇になったんで適当にぶらついてくる。 BY モド』

PS 玄関壊れてたぞ？ 何があつたんだ？ もっと頑丈にしておいたほうがいいんじゃない？』

ぶらついてくるって、暴れまわるってことだよな？」

「そうでしょうね。まあ、良く今まで我慢できたと、褒めてもいい位だとおもいますが」

「あー……でさあ、この壊れ方って、どう考えてもそうだよな？」

「はい。モドが強引に空けようとしたのでしょーうね。帰ってきたら請求しておきましょう」

「何かね、胃が痛くなってきた……」  
「大丈夫です。時期に慣れます」  
「……………」

## 09 (前書き)

続きをと考え始めると、投稿分の見直しも必要な気がし始めて…。

細々とはありますが、見直しと続きの展開、構想なんかをしていければと思います。

2 / 24 序盤設定部分加筆修正



MMORPG 『天上転華』の世界とは、巨大な中央大陸がメイン舞台であり、剣と魔法の在るファンタジーな世界を舞台として  
いる。

天上世界の支配を目論む魔王の軍勢。

其の軍勢が突如地上に現われるや地上世界を蹂躪しはじめ、天上世界を目指すべく活動を始める。

その天上世界の神々は、其の侵攻を阻止すべく地上に住む者へと力を授けるべく各地の遺跡を解放した。

急遽湧き出るようにして現れ浸透し始めた魔族の数々に対応するように其の世界において技能を与える試練の間や遺跡の数々にはその場所の守護者として相応の者達が配されるようになった。

其の強さもまた重要な技能を持つ場所を優先して強いものから配置され、その場の荒廃を避けるべく今尚鎮座している。

それに対し魔族の軍勢もまた侵攻を開始しだすと同時、その技能がはいされる場所？や遺跡郡へと大挙して押し寄せ始めたのである。

試練の間に在る技能取得認証台は如何な力が働いてか、魔族の軍勢はそれを壊すにはいたれず、しかしそれを放置することも出来な  
いという考えからそこを根城に来訪者を出迎えるべく出来うる限りの数をその場へと住まわせ始める。

そうして。

守護者はその技能を使うに値する人物が見定めるために辿り着く  
ことの出来た来訪者の腕を試し。

占拠することに成功した魔族の軍勢はその地に訪れる招かれざる

客に牙を剥き。

天上世界の神々の力を借り受け、地上を魔族から守り抜く。  
それがこのタイトルをプレイする人達に与えられた設定である。

大陸中央に在り、王都としても名高いそこは『中央都市 ミルド  
サレム』

その街の中、一際大きな建物の中に呆然と立ち尽くす一人の少女  
が居た。

面倒なことになった。

そんなことに頭を抱えても、それで現実が好い方向へ向かうはず  
も無く。

気がついてみたら知らない場所に居た。  
いや知らないとは言っても何処か見慣れた感じのする光景の中に。  
混乱する頭が情報を求め、その欲求を満たすべく足が動く。

視界に飛び込む光景に、覚えた きしかんは、ひとつのゲームの  
タイトルを告げる。

そんな馬鹿なと思いつつも、真っ先に探したのは銀行の施設。  
長い時間を掛けて集められたそれは、ストレージ容量を埋め尽く  
さんばかりの武器の数々。

それを確認して、はつきりと認識した。

ああ、ここは『天上転華』の世界なんだ

と。

街へと足を向けてすぐ、ふと視界の端で嘆く見覚えのある装備を  
した男性の姿。

自身と同じ、機動性を重視されたそれと、獣人として特徴的な獣  
耳が視界に映り、彼もまたこの世界へと落とされてしまった一人な  
のだろうか？ と興味を引かれる。

呟くように繰り返されている「醒めない悪夢だ」という言葉に、  
成程まさにその通りだと頷いてしまった。

と同時に、悪夢などという生易しい物であるはずもない、と頭の  
中では叫んでいた。

現実であった、最早過去の世界になってしまったそこでの暮らし  
と同じように、腹も空けば喉も渇く。歩いて疲れることは無いが、  
睡魔は当然のごとく押し寄せてくる。

街にて見かける人も、ゲーム時代に見た服装、人姿。

聞こえる声には、音が乗り、型にはめたような定型では無くなっ  
ており、其の上表情までもが動いている。

これを悪夢の一言で受け入れる？  
それは無理だと理性が叫ぶ。

どこまで再現されているのかと、最早癪とも言える程繰り返していた地図の確認動作をと視線を右上へ滑らせてみたところで、そこには広がる青空が見えるのみ。

チャット機能は、と考えるも。

パーティーチャット、ギルド、フレンドと確認しようとして、メニューの表示が何処にも無い。

普通に声が出て、それで話しをしているのだからそれも無くなっ  
てしまったのだろう。

自分は孤立無援となってしまった、という絶望が胸を締め付ける。

食事時に何気なく目に付いた右腕に嵌められている見たことの無い無骨なデザインのそれに、何とはなしに疑問を覚え、それに軽く触れてみると仄かな光を放った後、腕輪の上部に長方形のボヤケタ何かが表示された。

その光景に映画等を見たことのある近未来的な技術を思い浮かべ、  
そこに表示されているものを視線で追いつめ  
戦慄した。

自身のキャラクターを示すステータス表示。

それはゲーム時代と変わることなく表示されていた、のだが。

そこに表示されていたプレイヤー名は、ゲーム世界の自身のキャラクター名である『ウサミツチ』という名前ではなく。

現実世界での自分の名前。

『高木 由香利』

という文字が刻まれていた。

それからというもの。

何かをしたいという意欲も沸かず。

もしかしたらという思いからそこを動かず過ごしていた。

そんな思いは淡い期待で終わることなく。自分への来客という報告に顔を出してみると、そこに現われた人物を見てふと首を傾げた。私の顔を見るなり「ウサミツチ本人？」という言葉に、曖昧ながらに頷くと、安堵したように表情を緩め始める。そうして告げられた名前に覚えはあったが、はてどんな人物だったかと思い出そうとしていると

「俺だけじゃなかったのか……なあ、この状況どう思う？ てか何でこんなことになってんだ？」

弱弱しく、しかし口早に捲くし立てられ始めた疑問の数々に、私がかかる訳がないだろうとウンザリしながら判らないと答えていくと、徐々に肩を落としてはしたが、それでも自分だけではないということに思い至り、幾分かは元気を取り戻しこれからどうするのか？ という話題に変わり始めた。

私は、と自分はどうするか考えていたことを話す。

この人物のように、私と仲の良い友人達は、私がここにいるというのを知っているだろう。

王都ミルドサレムの銀行のすぐ隣、そこにある大きな宿の一室。

ならば下手に探しに動くよりも、自分の知り合いの誰かしらが此方の世界に来ているのなら、もしかしたら思い出してここを訪ねにくるのではないかという期待。

願わくば、と誰かの顔を思い出しそうになり、それだけは寧ろあ  
つてくれるなどその思考を振り払う。

その後二、三言葉を交わすと、誰かに出会ったら私もまた此方に  
来ていることを伝えておこうという言葉を残して、その人物はその  
場を辞した。

どうしてあの時それを制止しなかったのかと、今となっては思わ  
ざるを得ない。

それから日を置くにつれ、来客は増えていった。

予想を遥かに超えて、ではあるが。

確かに友人知人の来訪の数々には戸惑いこそしたものの。

その語られる内容には一喜一憂。

自分はどこから来て誰を見た、魔法も使用可能、其上ダンジヨ  
ンのゲートもゲームのままだとか。

この場から動いていない為に知らなかった情報を教えて貰えると  
いうのはありがたかったものの、それ以上に面倒な話題が徐々に増  
えはじめていった。

「そっいえば『氷槍 ブリューナク』って誰のDROPPだっけ？」

「お願い！ 『黒剣 エクスキュージョン』持ってたら売ってくれ  
ないっ！」

「『魔爪 ガルム』って『地下霊廟』のBOSSだっけ？」

「光属性の武器ってどんなのある？」

「よろしければデートでも」

「杖で魔力補助高い武器欲しいんだけど、何処にどんなのあるか知  
ってる？」

この世界に馴染み始め、何をすればいいのかを考えずに済むように、今まで通りのスタイルを貫こうとでもいうように、この世界で生きるための活動を始めたのである。

それはきつとただ塞ぎこむよりはいいのだろう、とは思う。いいのだろうけれど…。

最初のうちこそああそれならばと、応えることの出来る物には対処はしていたのだが。

今となつてはそれがいけなかったのだと、後悔したところで後の祭り。

気がついてみると友人知人だけではなく、そこから広まった噂の力で見知らぬ人達すらも押しかけて来るようになっていた。

時折耳にした会話にも、何処かに居た人達が、同じ境遇の人が居るのではとミルドサレムへと集まってきているという話もあったため、その影響もあったのかもしれない。

それに多少孤独を紛らわせることが出来ていた当初と違い、最早災害と言つてもいいのではという程にこの状況にうんざりとし、毎日来客に怯えては気疲れを覚えていた。

最近では情報を渡す代わりに対価として目新しい情報を何か寄越せ、という噂を流しているのです、その来訪を告げる足音も寂しいものになり落ち着きを見せているが。

それでも親しかった友人達は、時折顔をみせ何気ない会話をする為に訪ねてくれている。

漸く落ち着き始めた生活に開放感を覚えると同時、少し芽生える寂寥感に、どこか浅ましさを覚えつつもこれはしょうがない事だろう、と自嘲気味につぶやいた。

朝起き、部屋に備えられた洗面台で顔を洗う。

そこにけたたましく響き始めた足音が自身の部屋の前で止み、ついで荒々しいノックの音に誰が何の用で？と首を捻りつつ、来訪客を確認すると。

「大変大変！ 今ね！ 知の上位霊核がオークションにでてるそうなの！」

おはようと挨拶をすることもさせて貰えず詰め寄られ、浴びせかけられたその言葉にこの慌て振りはそれが理由かと、未だぼんやりしたままの思考でそれに納得していた。

急な来訪と共に強行な家宅侵入を果たした其の人物は、エルフのハーフであり現在レベル八十になったばかりの『ラピスラズリ』という、魔法を主体としている人物。

知り合った経緯は人伝という物ではあるが。

何をしたらいいかということに悩んでいた『カーリン』というキラクター名を持つ人物に、リアル繋がりから発動される強制権力で自分の弟子扱いとし色々教えることになったその弟子の、これまたリアル友人という、どことなく近い位置にいる人物である。

それだけでこの世界で出会えたことに涙ながらに抱きつかれたときは、自分としても何処と無く嬉しいような、何もしてあげられることがなく、悔しいような。

「それでね！ 二日間でのオークション形式になってるんだけど、朝から凄い賑わいになってて！」

それは、そうだなあと、のんびりそんなことを思う。



知力の霊核は、D R O Pするモンスターが少ない上に、倒すのが難しい。

そんなレアアイテムであるだけに求める人が多い。

知力はS P上限を引き上げることでもできるために、近接攻撃主体の人だとて恩恵がある。

それ故に自身が使う武器へ組み込みたいという人が多いのだから拾ったところで売る人はまずない、というような代物である。

上位を拾ってこのように簡単にトレードに出す人物となると、最上位を持っている人物か、という風なことを考えてみるも、さてこれまで会った人物にそんな者が居ただろうか？ と首を捻る。

「一緒に見に行きませんか？！ どんな人がそれを持ってきたか興味ありません？」

ああ、それでこの来訪かと一人納得しながら考えてみるも、結局そのお誘いは辞退する。

残念そうにはしていたものの、依然興奮冷め遣らずという感じでぶんぶんと振られる手に苦笑を返しつつ、どれだけの人がその場に居るのだろうか、数々の来訪者の顔を思い出しながら朝食を貰うべく部屋を後にした。

「おはようございます、ウサミツ様。先程来客の方がお見えになつておられましたか？」

「おはようございます。ああ、先程部屋で会いましたよ。」

「あ、いえラピスラズリ様ではなく、その他にも二名程訪ねてこられまして」

食堂にて料理を待っていると、宿の支配人さんにそんな事を告げられた。

二人も、誰だろうか？ と思いつつ、今までに見かけたことのある人物か尋ねてみると、共に初めて見る人物で、悪魔のハーフである男性が今朝早くに、純エルフの少女がつい先程、という返答。

名前は？と聞いてみると、其の両名共にまた訪れると言い残して去ったらしい。

ふむ、また中央へ辿り着いた誰かが噂でも耳にしたのだろうか？ と考え込んでいる間に運ばれてきた料理に考えるのは後でいいかと目前にある元気の素へと食指を伸ばし始める。

朝食を終え、満足気な足取りで部屋へと戻ろうとした時。

「あ、ウサミツチ様。先程お伝えした内のエルフの少女の方が見えてますが、いかがでしたでしょうか？」

その声に振り向いた先。

尋ね人というその少女と視線がぶつかると、まるで金縛りにでも逢ったかのように体の感覚が抜ける。

それとは対照的に顔中にぱつと満面の笑みを浮かべ、駆け出し始めたその少女は可憐そうなその体軀に似つかわしくない速度で迫り、其の勢いのままに抱きついてきた。

「やっと会えた！ 久しぶり！ お姉ちゃん！」

其の言葉に返すべき言葉は何故か浮かばず、それでも沸き起こり始める感情のまま、愛おしそうにその頭を撫で始めていた。

ああ、あなたも来てしまったの。

「久方ぶりです、沙丹殿。只今戻りました」

「あれま、ずいぶん久しぶりな気がするね。無事帰ってきたんだね。おかえりなさい、ティラミスさん」

「それで、旅先にてこのような物を見かけまして、どうぞお受け取りください」

「あー、わざわざありがとうねえ。食料はほんと助かるよ」

「何の、あの時拾ってもらえなければと思えば、このくらいのこと。それにしても…随分奇抜な玄関に成られましたねえ」

「…うん、あんまり見ないで…：…べへ〓モドっていうやんちゃな子かね、なんか暴れまわってるとか、そんな話は耳にしなかった？」

「寡聞には…その者がこれを？」

「そうなんだよねえ、もうホント。ちょっと出かけて帰ってきたらこうなっちゃってさ」

「ちなみに、そのべへ〓モドという者は強いのでしょうか？」

「あ、うん…まあ、かなり強いね、え？ あの、ティラミスさん？ 何でそのう、嬉しそうなんでしょうか？」

「え？ いえいえ嬉しそうなどと。私の恩人たる沙丹殿の住居にこのような不始末をしかす者がいようとは何とも許しがたい、是非手合わせ、懲らしめねばと。ええそれだけです」

「そ、そんなことしなくていいですよ？ あの、ほんとこんなものうってことないですって！」

「僕が我慢すればいいだけであって！ やめてそんな『クククッ』とか！ 漏れてるよ笑い声！」

「おっと、これは失礼…逆に気を使わせてしまいました。私もまだまだですね。」

「あ！そういえば私少々用事があるのを今急に思い出しましたそれではこの辺で失礼を」

「……………」  
「ただいま帰りました…どうしましたサタン様、そんな犬みたいなお顔をなさいますか？」  
「……………」

「それにしても本当に久しぶりだよ。最後に会ったのは…春休みの時だっけ?」

「そうだねえ。それにしても元気そうで良かったよ」

お姉ちゃんはなんか疲れてるね、ということは無邪気な笑顔で言われ、否定できずに苦笑を浮かべる。

今までどうしていた、とか逆にどうしていたのか聞かれたりと、その口が軽快に動くさまを見ると、現実での妹の姿が重なって見えた。

作られた姿のそのエルフの体に、日の光を浴びると栗色に輝いて見えるその髪が、入学先の高校の制服を嬉しそうに見せてくれたその姿が、小さい頃から見慣れた良く動いていた其の口に、懐かしくも暖かい気持ち胸に込上げる。

「でね! ……どうしたのお姉ちゃん?」

そんな郷愁に返事をせず黙っていたためか、心配そうに見上げる視線を向けられ。

なんでもない、と口にしつつ、相変わらずだねえと呟くと、少し恥ずかしそうに顔を背けた。

そんなどこも変わってない妹の姿に、それで、と続きを促せば、怒ってますよと言いたげに睨まれたものの、それに態度を変えることの無い自分の姿に、諦めたような溜息を吐くとまたゆっくりと続きを話始めた。

「ふーん。でもまあ、よく一人でゲマニエに行こうとか考えたね。ああ、誰にも会ってなかったんだっけ。」

先にミルドに寄ってみるとか考えなかったの？」

うつと言葉を詰まらせた姿を見て、相変わらずだねえと呟くと、肩を落としてシユンとなった。

「まあ、あそこにはガーディアンゴーレムが居るから…カーリンじや無理でしょ？そこで引き返したの？」

其の言葉にはつと顔を上げると、そのまま不機嫌な顔に変わる。

ああ、やっぱりそうかと思い、そればかりはしょうがないと言葉をかけようとすると

「それが、ね。後からもう一人ゲマニエに来てみたいでね…助けてもらった、んだけど」

ほう、と思いつつも、疑問を覚える。

助けて貰ったのなら、何でそんな顔するんだろ？

嫌な人物だったのか？ と考えるも、それなら助けたりはしないんじゃない？

そんな思考が顔に出たのか、ぶすつとした表情で、嫌そうにその時のことを語ってくれた。

「本当にね、助けてくれたのは、嬉しいんだけどさ…。ありえないと思うんだよね。もっとこう…。」

その人ね、私を見るなり『純エルフだと？ ネカマか？』って言

ったのよ！」

「は？」

その言葉を理解して、思わず笑い転げてしまった。

呆然と見つめられて悪いとは思いつつ、どんな猛者がそんなことをと想像してしまう。

純エルフ＝ネカマ説

確かにその見た目から、男女問わず人気が出、更にはそんな噂も一時流れた。

だが、それを真っ向から信じている人物など、そうそう居ないだろうに、と思う。

「あー…ごめんごめん。いやそれにしても凄い人物に出会ったもんだね。貴重な体験だと思うよ」

未だ怒り収まらず、とじっとりとした視線を向けられるも、それが照れ隠しに見え逆に笑いが込上げて来る。が、これ以上はと氣力を振り絞って押しとどめ、それから？ と続きを促した。

「うん、まあ、その人がガーディアンもそのボスも……サックリ倒しちゃってね……」

「…それは、凄いね。あそこはあれでいてなかなか上級ダンジョンなんだがねえ」

知り合いに一人で何処へでも出かける人物が居るおかげで、何処でどの武器をといた話を聞いたり教えたりしていたこともあり、これでも色々な場所の知識はある。

その人物が「ゲマニエのボス、魔術書をDROPするんだぜ」と



いう話を持ってきたので一緒に行ったこともあるのだが、さて自分が一人あそこに行ったとして、そこまでサククリと行けるだろうか？

「姉としても師匠としても、其の人に会って挨拶の一つはして置きたいが…ミルドには一緒に？」

待つてましたとばかりにギラリとした視線を返され、やや腰が引けた。

その後につけられた含み笑いにも、どことなく黒い色が付いて見える。

「その人は今、知力の上位霊核をオークションに出しててね、そのトレードが終わったら一旦合流しようってことになってるの！」

「そ、そうなんだ。それは、是非向かわなければ、行けない、の？」

向かわなければ行けない『ね』という言葉をおうとしたが、そんな妹の姿に腰と共に五十音順が一つ後退し、『ね』から『の』になっってしまう。更にはクエスチョンマークまでオプションで付随した。

「そのとおりです！」

ここで肯定を示すのは、目の前に仕掛けられた罠に飛び込むような物だと思回路が警報を鳴らし続けて居るが、もはや回避する術は無いという所まで追い込まれているという感覚に

「…そう、なんだ」

と力なく返すことが精一杯だった。

「誰かと思えば、我が親愛なる友人、変態君じゃあないか」

背後から聞こえたその声に、誰との会話だろう？ と振り向くと、其の声を発したのであろう人物がこちらを見ていることに疑問を覚える。

「おや？私が解らない？しょうがない、名乗ってあげよう、そう私の名は「いやもういい、わかった」…相変わらず愛想がないね君は」「うるせえよ、なんだよいきなり『変態』とか言いやがって」

「はっはっは。それは君がシンス「しん”じ”だ！」「…まあ、そう怒らないでもいいではないか」

誰が怒らせてんだよ、と慥然と言い放つも、それすらも飄々とした笑い声で流される。

「で？ 何の用だってんだ、リーさん」

「そんな邪険にしなくてもいいだろうに、器が小さいといわれなかい？」

言われたこと等一度も無い、とは言わないが、大きなお世話だと

噛み付くと逆に嬉しそうな顔をされそうなので無視をする。

まことに不本意ながら、この人物こそ探したかった人物でもある。何時もこんな感じではあるが、今日はより一層に饒舌な気もする。それも神経を逆撫でる方向に。

こういう時は機嫌が良い時なのだとは知っているだけに、何かいいことでもあったのかと聞くと、「おや、私のことを良く知ってるねえ」などとニヤニヤ笑いながら言うてくるに違いがない。

「そんなつんけんしなさんな。用という程でも…いやそうだね、どこか落ち着いて話でもと、どうだい？」

「落ち着いて、というのには賛成だね。ただ俺は今日ここに来たばっかなんだ、どっかある？」

「ああ、そうなのか。なら…朝食はもう？」

「いや、まだ。できれば飯も食えるところがいいな」

それから向かった場所は、活気の少ない小さな食堂。まあ、確かに落ち着いて話ができるだろうけれど、と相変わらず掴みどころの無いこの人物に苦笑した。

はすむかいからは活気に溢れた食堂が、人の往来を忙しそうに迎え入れていた。

「で？ 話ってどんな？」

頑固そうな壮年の男性一人で切り盛りしている其の店で、男前な料理の品目に目を通しつつ朝からこんな店を勧める人物に、喉まで

出かけた文句の数々を飲み込み声をかける。

「何、誰しも思ってるだろうことだ。この世界について、どう思う??」

直球だねえ、と考えつつも、自分としてもそれに関して話があっただけにありがたいと思う。

「少なくとも、この世界が”どんなものか”ってのは、まあ誰もが疑う余地無く一緒だろ？」

そうじゃなくってことか?」

「そうじゃなく、だな。まあ順番に考えを聞くほうがいいだろう。」

まずは、ステータス画面の確認は、もうしているだろ?」

「ああ、キャラクター名だろ?」

へいお待ち、と出されたそれは、油が輝く唐揚げ定食。

ついで自分の前に差し出されたのは、大盛りの味噌ラーメン。

材料などはどうなってるんだろ?とは考えてみるも、何か恐ろしい方向に思考が飛びそうですそれ以上考えず箸に手を伸ばした。

「現実の世界の体は、”どうなってる”いると思う??」

此方に来てすでに一ヶ月弱。

そのままであるならまず間違いなく、と誰もが考えるだろう。

「あくまで可能性の話だ、自分の考えでいい。どう思う??」

「この体が、どう言えばいいかな…自分の体と重なったと、考えて

いる」

同じか、と呟かれたそれには、何処と無く怒りにも似たものが混じっていた。

キャラクター名ではなく、現実世界での本名。それは、やはり体ごとの移動を想起させる。

「最近街を出て戻らない者が居る。集められた情報だけで三人だ。他の街に行ったのかもしれないと考えることも出来るが…最後に掛ける先を聞いた人に聞くと、ダンジョンへ行くというものだったらしい」

不意に告げられたなんとも不穏な話題に眉根が寄る。

同じ考えに至った人物からのこの話。その先にある答えはきっとそれも同じなのだろう。

「だけど…死んだら大聖堂で復活とか、あるんじゃないのか？」

ゲーム時代は死亡したら大聖堂にて復活を果たしていた。デスペナルティーとして経験地と所持金の減少は地味に痛かったが。

「その人は今でも大聖堂にて待っているらしい。私もそのダンジョンに行つて昨日帰ってきたんだがね…。すれ違つどころか、手掛かりの一つもなかったよ」

「なんとというか……」

キャラクター名を見たとき、ふと疑問を持った。最初はそんなちょっとした疑問でしかなかった。

だが、其の疑問の裏づけを取れたみたいに、まるでその問いに答えを示されたようで。

「この話を知っているのは？ 探索隊、は無理だろうな……」

「まだそれほどは広まっていない、が。時間の問題だろうね」

探索は…、と濁された言葉に、期待は無いのだと暗に告げられた。

「パニック、になるだろうな…だが、知らなければならぬ事実だろう」

「特に低レベルの者のことを考えるとね。背伸びするのは危険だ」

チャット機能が無いからか、PT行動が少ないしね、と。

「全く、面倒なことが多いことで……早めに出たほうがいいなこりゃ」

「何か用事でもあるのかい？」

「ん？ああ、金策とレベル上げてことでゲマニエ行ったとき、メインクエストを進めてるっていう純エルフの少女に出会ってね。そのお手伝いってとこ」

「純エルフ？ 成程、ネカマか」

声が女の子だったけどたぶんそうじゃね？ と返してやると、確定だろ、断定的に話し残存兵力1となった唐上げをひょいと掴むと口に運び、冷め切っているそれを咀嚼した。



10 (後書き)

「サタン様。台所が魔王軍に占拠されました。奴らの首領様、どうにかしてください」

「……いろいろ突っ込みたいんだけど…ねえ、あの黒くてカサカサ動いてるのが魔王軍なの？」

「そうです、どうにかして下さい」

「そう、なんだ……てより魔王軍でこの程度の規模なの？ 違うよね？」

「……はやくどうにかして下さい」

「え？ 何で違うって言うてくれないの？」

「いや、それはちょっと…」

「そ、それにさ、ほら、明らかに種族というか根本的に違う生命体だよな？ 仮に俺が首領だったとして、あいつら俺の言うこと聞くと思うの？」

「ああ、そこは考えてませんでした。無理ですよね」

「………」

「おや？ どうしましたサタン様」

「ねえリヴィア。優しさって言葉、知ってる？」

「ええ、甘やかさないことです」

「ねえリヴィア。傍若無人って言葉は、知ってる？」

「サタン様、それは知らなくていい言葉です」

「………グスッ」



「成程、メインクエストか…確かに、現状では…それが一番可能性が高いか」

「俺も最初は違う路線で考えてたけど……やっぱりそう思うよなあ」

会話の為に、料理を掃討した後もその場に居座ろうとしていたら、店の親父にぺいっと放り出されてしまい、結局は人の少ない往來を歩きながらの会話となった。

オークションに知力の上位靈核を出している以上、二日は動けないことを伝えると、「即決を決めているなら終わらせる」と事も無げに言われ、げんなりしながら即決無しとした理由を教えた。

「今日これからの予定は？」

「ん、ああ、それでさっきの話に戻るんだけどさ。メインクエに詳しい人だれか知らない？」

「ふーむ」

信士が知っているのは終了させている10章まで。その記憶も虫食いでしかない。

何章まであるかは知らないが、攻略サイトにて載せられていた情報には20章以降の文字は見かけなかったはず。

移動等はクエスト会話どおりに進めればいいだけなのだが、人数指定、必要アイテムの入手、また入手場所など、足りない情報は数多くある。

自分の知り合いにそんな人物は思い浮かばないのだが、この変人ならばと期待しての相談。

「もし詳しい人物が居たとして、それからはどう考えて？」

「できれば一緒に行動、無理なら所在確認かな。居場所が解れば聞きに行くことができるし」

「成程。一緒に行動、というのはそのもう一人も承認済み？」

まあ、事後承諾になるだろうけどねといいつつも、理由を話せば納得するだろうとは思う。

「そうか、なら私が共に行こうではないか」

「は？ リーさんメインクエなんてやってたの？ え、ちなみにごまで進めてる？」

ふふふん、とその問いに満足気な表情を浮かべると、此方の様子を伺うようにチラ見し

「19章の後半だ！」

と。

どうだと言わんばかりに胸を張った後、またチラ見してきた。

どんな暇人だよ、と突っ込みたかったけれど、それを言う前にそんな顔が気に食わず思わず手が出してしまった。

綺麗に弧を描く軌道は、そのまま肝臓の有る辺りへと吸い込まれ。

もんどりうってのたうつそれに、「ごめん、やっちゃった」

と可愛げな表情で謝っておいた。

復帰した途端、それならば準備しておこう、と連れ立って店を巡り歩き、日も暮れたときにはまた明日、という言葉で別れた。

一日が過ぎ、再びトレード場へ足を運んでみると。そこは混沌とした一種異様な空間と化していた。

溢れかえる人、殺気走る視線、絡み合う思想、探りあう目線、むせび泣く敗者、平静を装う眼鏡。

その只中に足を踏み入れる勇気が沸かず、こっそり売値の上昇具合の確認に向かう。そこに表示された金額に、自分も彼らの仲間入りを果たしそうになつた。

『知力の霊核 上位』

現在 金貨四十三枚 残り時間 22H

現最高入札者 『炭酸飲料』 様

呆然とそこに表示された文字を追い、二度見、三度見して漸くそれを認識した。

ああ、今日はなんと爽やかな朝だろう。

カーリンは姉の部屋にお世話になることが決まり、今後のことを話し始める。

そこで何を思い出したのか、姉は少し待っててと言いつつ部屋を出ると、再び戻ってきた時その手に見たことの無い弓を持っていた。

「これはね、純エルフ用最終兵器の一つ。『ルナ・ボウ』」

「へえ、名前は聞いたことあるけど、どんな効果なの？」

良くぞ聞いてくれましたとばかりに大仰に頷く姉の姿に、あ、何かスイッチ入ったと口元を引きつらせてしまう。

「純エルフ用、とはいったけれど、これは知力値が高ければ高いほど火力が上がる、という特性がある。普通の弓は力と器用値で火力が決まるだろう？ 其の点これは知力と器用という変わり種だね。

純エルフの特性は知っているだろう？

そうだ、知力と器用にボーナスが付く。だからこそこれはまさに純エルフ用といっても過言ではない。

さて、これは誰から拾えるか

「

こうなっちゃうとなあ、と苦笑しつつも、楽しそうな姉の姿に、思わず笑みがこぼれてしまう。

それだけに、昨日出会ったばかりの時の疲れた表情を思い起こすと、やはり胸が痛くなる。

確かにここに居れば、自分の様に『もしかしたら』と訪ねてくる人には出会えるかもしれない。

でも。

それでも、やっぱりあんな姿になるくらいなら、強引にでも一緒

に連れ出すべきだと思ってしまっ。

「…… なわけだ。幸いにもこの効果はレベル九十以上から真価を発揮すると言われている。カーリンはもう九十を越えたのだから？ …… うん？ カーリン？」

「え？ あっごめん！ うん、九十の、今五十%だね」

「なら、今日からはこれも持っていたほうがいい。火力が知力依存と言ったが、攻撃判定はまほう攻撃ではなく物理攻撃となるからな。ゲマニエにもこれがあれば大丈夫だっただろうが…まあ、これはなかなか見かけることがない以上、入手の面で厳しい…どうした？」

言つて、断わられたら。

信士さんは、知り合いが居るならその人と行くのが一番いいと言つていた。でも、頼めばきつと一緒に連れてくれる気もする。

ただ一人増えるだけ。

それに、二人はクラスメイトだとも言つていたし。

「ねえ、お姉ちゃん。昨日の話は覚えてるよね？」

「どの話？」

「メインクエストを進めてるつて。それでね、お願いがあるんだけど」

一緒に行こう、という言葉に。

身動きする音は聞こえたものの、それ以降は静寂に包まれる。

それから聞こえた微かな音に、姉に視線を移すと、緩く、首を左右に振つていた。

「嫌、というわけじゃないんだよ。ただ、それでも私は、ここに居なければいけない」

「誰か、を…待っているの？」

もしかしたら、と思っってしまう。

だけれど、返ってきた答えは、わからない、という曖昧な物だった。

「なら、さ。明日その人に会ってから考えて欲しい。それでも考えが変わらないなら、無理にとは言わないから」

なお食い下がるように粘った私に、相変わらずだねえ、と苦笑しつつも、それでいいならそうしようという返答に確かな一歩を感じられ、今はこれだけでいいんだ、とそれから先程から気になっていた『ルナ・ボウ』について解りやすく教えて、と上の空で聞いていた講釈を気力で頭に叩き込み始めた。

それから一息ついたタイミングで。

旅に入用なものを買い出しておこうと姉と別れる。

さて先ずはどの店からと考え、何となく気になっていたオークションの状態を確認してみようと足を運んでみるかな、と。

「……どうしたんですか？ こんなところでボーっとして」

平静を装う眼鏡の男性の斜め後ろ。見知った姿を見かけ、其の姿が余りにも心ここに在らずな状態に呆れて声をかけてみるも、表情の抜けた其の顔が此方の姿を認めた後、ゆっくりと腕を持ち上げ何処か一点を指し示した。

一種異様な程の人だかりではあるが、計画通りと得意顔を向けられると思っていた手前、その反応を訝しげ思いながらも、何が言いたいのかとその指し示された先へと視線を向ける。

『知力の霊核 上位』

現在 金貨五十二枚 残り時間 13H

現最高入札者 『うす塩』様

という文字……はあ?! 何その五十二枚って数字!!

ああ、神様こんな理不尽なほどの明確な格差をつけられていいのでしょうか、いやよくないだろう!!

嘆きたくなるほどの実力差、知識量を見せ付けられ、其の上富まこれほどに差をつけられては私の存在価値は只のお荷物になるのではああどうしようと、そんな被害妄想すら覚え始めた。

負けてなるものか、と何に對してかはあえて考えないようにしながらその場を辞し、泣きそうになりつつも今後必要になりそうなものを探しに店を回り始めた。

買うものを買いつえ、姉の部屋へと重い足取りで戻ってみると、そこにはラピスが居た。

感動の再開とばかりに抱き合う二人の姿に、姉は少しだけ影のある笑みを浮かべていたが、それから三人で過ごした時間は、とても楽しいものとなった。

「カーリンはあいかわらずだね。まあ変わりなくてよかったよ」

「ラピスは、最近どうしてたの?」

「うーんとねえ。実は固定PT組んで色々連れて行ってもらってる」

ほー、と驚きつつも、彼女ならそれも納得もしていた。  
私よりもゲーム知識もあるし、明るく元気、其の上私と違って人見知りしたり物怖じもしたりしない。

こんな状況になっても知ってる姿が変わってないというのは、やっぱり嬉しいものだなと思いつつ、それなら一緒に誘うのは遠慮したほうがいいだろうと考えた。

「カーリンは何時まで居るの？」

「うーん、早ければ明日には出るかも。ラピスはずっとここに居るの？」

「どうだろう、一応リーダー的な人はいるんだけど、結局は総意確認してから何処かについて感じだから」

会えるのも次は何時になるか、とは口にせず。

飲み込むように笑顔を作ると、それじゃあまた、と元気良く手を振ったラピスは、別れの言葉を残してその場から消えていった。

それに寂しさを感じつつも。

「若いわねえ」

等と呟く姉に。

「ご飯にしますかと言われ、曖昧な笑みを浮かべてお姉ちゃんも若いでしょと返してみるも、それに対する返答は返ってこなかった。





11 (後書き)

「大変ですサタン様。魔王城に魔王討伐パーティーが向かっている  
そうです」

「そうか、それは急がないとな」

「ええ、速やかに此方に誘導しなければ」

「早速魔王城に……あの、リヴィアさん？」

「何でしょうか？ 急ぐべきだと思つのですが」

「うん、急ぎたいんだけど……ベクトルが違つというか……あの、僕が  
城に向かえば万事解決するんじゃないかなあ、とか？ ほら、これ  
でも……くっ……これ、これでも！ 魔王だし！」

「え？ ああそうですけど、それで魔王の居所がやつぱりあそこか  
つて知れ渡ると、ほら、ねえ？

レンタル料一回金貨二十枚、移動経費、その他諸々。サタン様、  
所持金は？」

「現実のつらさが胸に痛い……」

「思い知りましたら急ぎましょう」

「うん、待つてね。もう少し、動けそうにない……」

「……しょうがありませんね、今回だけは魔王城をレンタル致しま  
しょう」

「えっ！！ ほんとに！ ほんとにいいの！！！！」

「ええ、ですので急ぎましょう。アムには私のほうから話を通して  
おきます」

「ありがとう！！ リヴィア大好き！！ それじゃあ急ごう！！」

「……（ああ、其の言葉のなんと甘美な）……げふんげふん。え  
え、では行きましょうか」

「あれ！？ リヴィアも嬉しそうだね！ ふふん！ 魔王の恐ろし  
さを知らしめに行こうではないか！」



「さて、それじゃあ行くところか」

頂垂れる敗残兵を尻目に、満面の笑みを浮かべたその人物は、その手に銀色の輝きを放つ掌大の宝玉を弄びながら上機嫌で声を掛け  
てくる。

隣には平静を装いきれなかった眼鏡の男性が崩れ落ちていたが、それに視線をむけることができずに表示されている文字を目で追いつ  
つていた。

『知力の霊核 上位』

現在 金貨百枚 残り時間 - - H

現最高入札者 『REPOBITANN』様

喜んでいいのかすらもよく解らず、信士は渡されたその重さに『  
え？ これ現実？』と認識できずに呆然とするも、ずるずると引き  
摺られるような感覚に空を仰げば。

今日も今日とていい天気であった。

「おはよーお姉ちゃん。ほらほら、そんなぐずぐずしないで！」

ゆらゆらと揺られる感覚と共に聞こえてくる声に、ウサミッチの  
意識はぼんやりと覚醒をはじめ。

何時もより早めに起された為か、何で家の妹は朝からこんな元気なのかと思うも、これが何時も通りだっけ？ 昨日の朝はそんな事はなかったのにな、と思ったところで。

そういえば今日は何か約束のある日だったっけと昨日の会話を思い出す。

何でそんなに嬉しそうなんだろうと苦笑を浮かべつつも、はいはいと二つ返事で妹に従うことにした。

「それで、何処でとかって話はもう決まってるの？」

昨日会ったから大丈夫という声の後に、ここの食堂で朝食を取りつつということになったと、昨日のオークションの様子と共に楽しそうな声で語られた。

何だそのカオスぶり、と思わず言ってしまったものの、言わずに居られないほどの高騰ぶりと、見では無いが酷く珍しい状況になったものだとその光景を頭に思い描きながら話を聞いていた。

「まあ、それなら準備も出来たし、そろそろ行くところか」

さてどんな人物が、とどこか期待もしている自分にふと気が付く。話を聞くだけでどこか自分達に似ている気がする。

一部では、奇人変人として有名な。

そんな自分達ではあるが…一部では、って結構便利な言葉だなと考え込んでしまう。

そんなことをこんな時に考えてしまう自分に苦笑しつつ元気よく立ち上がった妹の姿に自分も習う。

部屋を出ると、扉を閉めて食堂を目指した。

カーリンは姉を引き摺り食堂に辿り着くと、見知った後姿のその隣には知らない男性の姿があった。

そういえばメインクエストに詳しくそうな人を当たってみるといつていたから、きっと隣に座る人がそうなのだろう。

どんな人なのかなあ、と思いつつ。

隣を歩いていたはずの姉が、少し後ろで呆然と立ち尽くしている。その視線の先に捉らえられていた姿は、私の憎き恩人たる、悪魔のハーフの男の姿。

動く気配の見せない姉の姿に、待たせるのも悪いしと声をかけつつ強引に腕を取ってその席へと引き摺って行く。

「おまたせしました。カーリンと言います。純エルフでレベル九十。支援魔法主体の魔法型です。

こっちは…」

「ああ、そちらは知っていますよ。一部で有名な人物ですし。まあ、私も、この隣のこいつもですが」

「こいつってどうなのよ。てかなんだよ一部でって。てか俺も一部で有名なの？」

「…ああ、君もそうなんだが…知らなかったのかい？『今夜の山田』という名で…」  
「えっ！ ああ?!」

「何時からそんなになってんの？ え、何カーリン、その『えっ！ ああ?!』って反応。ほんとに一部でなの？ ねえ誰か答えてくれていいんじゃない？」

あれなんだろうこの漫才みたいな空気は、と急な展開に引きそうにはなりつつも、そこに姉が普通に参加している姿に驚いた。いや、普通とは違ったものの、その瞳は未だにどこか現実を認識していないように見える。

戸惑って、とも違う気がする。躊躇う……いや、怯えている？お姉ちゃんが？

「まあ……それは置いておくか。久しぶり、ウサミ」

「あ、ああ、そうだね信士。しかし……久しぶりっていう……気が、しないね。相変わらず破天荒というか……」

「ウサミと会うのは一ヶ月ぶり、になるのか？　しかしまあ、ウサミが師匠ねえ……どんな経緯で？」

その言葉に苦笑をしつつも、此方に向けられた視線で話すべきか迷っているように見えた。

「えっと、実はというか……ウサミッチというのは私の姉なんですよ」

そういうことなんだ、続ける姉に、成程と二人の男性が頷き

「「弟か」「

と。

綺麗にハモった声を発した。

姉はやっぱりというような表情で諦めたように顔を俯きかけた後、何か面白い物でも見たかのような視線を見知らぬ純悪魔の男性へと向けた。

その一方で、私は殺意と悪意と害意の波動の目覚めを実感した。そんな黒く染まりつつある一人の修羅を除き、会話は続く。

「ん？でもウサミに弟とかいたっけ？」

「あー、ほら、小学生の頃に集団登校というのがあっただろう？私達が高学年の時、やんちゃなのが三人くらい居たのは、覚えてる？」

「ああ、居たなそういえば。確か一個下に一人と、二個下に二人だっけ」

「二個下の方だ」

「確か……すすむ君とかおりちゃん、だっけ？」

「そうそう、その「すすむ君かあ」……そうだね」「お姉ちゃん！」

納得顔の悪魔のハーフの憎き恩人。頂垂れ哀愁を漂わせる獣人のハーフの姉。憤る波動に目覚めた純エルフの私。含み笑いを上げ始める純悪魔の男性。

もうやだなにこの力オス…。

「いやいや。なかなかに愉快的構成だね。そうになると、私以外の三人は顔見知りなのかい？」

「あー、そういや言ってなかったな。俺とウサミは同じ高校だよ。クラスも一緒」



「妹は、学校は違うね。二市離れた、地元の中央高校だ」

「中央？ あそこ結構偏差値きつくなかったっけ？ ん？ 妹？」

それで寄せられた二つの視線は、『マジで？』というような疑り深い物で。

どれだけ自分をネカマに仕立てあげたかったんだという怒りに、テーブルを掴む両手がわなわなと震え始める。胸が怒気怒気してくる。

それから暫らく。

運ばれた料理を先に片付けてしまおうと他愛もない会話に移行して。

「ウサミは今後の予定とかあんのか？」

その問いに、姉は迷いを見せていた。

やっぱりこの人なんだ、とそんな姉を見て確信する。

話し辛そうに、何かを言いよどむその姿に、何か声をかけるべきか迷う。

二人だけにしたほうがいいのか、それとも私からお願ひしてみれば？

「少しそのお嬢さんを借りていいかい？ これまでのクエストの分岐経路を確認しておきたい」

という言葉が聞こえ、顔を上げるとその男性、リーさんと呼ばれていた人に腕を取られて引き摺られていく。

「まあ、君がそんな顔をしてると、君のお姉さんも色々考えてしま  
うだろうしね」

「すみません、お気遣いいただきまして…あの、それで姉も同行さ  
せたいと思うんですが」

「何、信士も状況は解っている。君のお姉さんを連れ出そうと誘っ  
てくれているだろう」

だから、気にしなくてもいいよ、という柔らかい声音に、向けら  
れる視線の先は二人の姿。

食堂から少し離れたエントランスにある応接ソファで、向き合う  
ように座る私に、あの二人はどういう関係なんだろうねえ、という  
呟きが聞こえてきた。

「まあ、そんなに構えなくてもいいよ。私の名前は、『REPOB  
ITANN』と書く。」

「……はあ」

一瞬何処となくインテリ的な名前に見えたそれが、声に出してみ  
るとお手頃な物に変わり、なんとも言えない表情を浮かべてしまう。

「呼び方は、そうだね。1、リーさん 2、お兄ちゃん 3、ご主  
人様 どれでもいいよ。」

お勧めは二番目かな。いやあ、家にも妹が居るんだけどね。可愛

げ？何それ？って感じだね。只一人の兄をこき使おうとするんだよ  
これが。ひどいと思わないかい？」

「それは……まあ、むしろその人の気持ちが変わるといっつか……」

「なんか壁を感じるねえ。それじゃあ、私の秘密も教えよう。聞きたい？聞きたいでしょ？」

「はあ……」

「あ、ちなみにこれはあの二人に秘密だよ？君だけに内緒で教えるんだからね。」

実は四年前なんだけど、僕に弟が増えてね」

楽しそうに話す其の姿は、まるで子供のように無警戒に綻ばされ。  
聞きたいと言わずとも次々と言葉を紡ぎ、流していく。

それに返せた声には、きつと感情も乗らない相槌だけで。

そろそろ戻ろうかと言うその人の視線を追うと、悲哀の表情を浮かべる姉と、其の正面に座る見慣れ始めた後姿。

そちらへと足を運ぶ中、考えてしまうの先の会話。

曖昧な態度で生返事をした、数秒前の自分に後悔を浮かべる。

今、目の前を歩くこの人は

何故そんなことを私に教えたのだろうか？



## 12 (後書き)

「……誰も、来なかったね……」  
「どうやら途中、モドに出会ったようで、そこで潰えたそうです」  
「レンタル料…取られちゃったね……」  
「ええ、これで当分は魔王城を借りられませんね」  
「アム…嬉しそうだったね……」  
「後ろ指差しながら爆笑してましたね」  
「どこで間違っただらうね……」  
「生まれ……失礼しました、ええ、サタン様に非は在りませんよ」  
「……死のうかな」  
「それはなりません、サタン様。それでは私はどうなるのです？」  
「……喜ぶ？」  
「ええそれはも…いえいえ、悲しみに暮れて後を追いかねない勢いです」  
「リヴィアって残酷なほど素直だよね……誰に似たのかな……」  
「……サタン様。その先は…どうか言わないでください」  
「……そうだね、ごめんねリヴィア」  
「サタン様が謝ることでは御座いません。これは私の、浅ましく安いプライドの為なのですから」  
「そういうところも……。帰ろうかりヴィア」  
「はい、それでは参りましょう」

最初の出会いは、小学生の時。

上級生の卒業に寄る、集団登校の班併合からだった。

自分の地区と、すぐ隣の彼の地区が、上級生が抜けたために一番の年上が自分達二人だけしかない状況になった。

三年生になった時、クラス替えて同じクラスにはなっていたものの、接点もなく一年を過ごし、そうして小学四年生となったその時が、きつと最初の接点だったと思う。

クラスが同じというだけで、緊張もなく気軽に話し始めていたきもするけど、それでも会話をするのは朝の其の時間だけだった。

教室に入るとそれぞれに男の子は男の子で、女の子は女の子で集団を作り、それが当たり前の生活であるように過ぎていった時間は、小学校の卒業と同時にひとつの変化を迎えていた。

中学にあがり、三つの小学校から集まった生徒数は、一学年の人数が今までの倍以上に増え、其の上様々な知識を得始めている少年少女に取っては、これまでの子供じみた行いに恥ずかしさを覚え、それと同時に大人に憧れ、そしてそれがどんなものなのかという情報に必死に食らいつくように背伸びを始める。

誰が可愛い、誰が格好良い、背が高い、運動が得意、勉強ができるなど、その最たる例なのかもしれない。

小学校の頃よりも、自分に向けられる視線が増えたのは分かっていたが、それ以上に視線を集める同級生の女の子も居たおかげで、それほどまでの息苦しさは感じなかったが。

度々耳にしはじめる、好感を持てる男の同級生という会話の中に、その名前を耳にすると言い知れない何かを胸に抱くようにもなっていた。

共に部活に入ること無く、家が近い為に帰りに一緒になることがあると、昔の登校時のように他愛もない話をして家路を並んで歩いた。

成長を見せ始めたその顔は、昔ほどの無邪気さは隠され始めたものの、優しそうなところは変わることなく存在し、最近嵌まり始めたという趣味の話や聞かせてくれたり、また自分が好きで読んでいた小説の話などを興味深そうに聞いてくれたりもした。

そして、そんな関係は急激な程唐突に。

中学も二年に進級し、夏休みが開けたばかりの賑やかな教室で。

その日朝から姿を見せない彼に、そういえば最後に会った時、あまり顔色もよくなかったことを思い出し、病氣、入院、などの不吉な単語が頭に浮かぶ。

それからガラガラと教室の戸を開けて姿を現した担任の姿に。

その少し沈んだ表情に。

「あー、皆静かに。驚かないで聞いてくれ。うちのクラスの山田信士が、この度家庭の事情で転校することになった。もう知っている者もいるかもしれない。級友が遠くへ行くというのは残念なことではあるが、二度と会えないという訳じゃない。卒業まで一緒に居たかったが」

其の後もことは、うまく思い出すことができない。

何故そのことがそれほど衝撃的だったのか。それをきつとわからなかったからなのかもしれない。

色の無い世界、そんなことを考えながら過ごした中学時代。

告白をされ、変化を求めて肯定の返事を告げたものの、その関係にもどこか空虚さを覚える自分。

そんな付き合いが長く続くはずも無く、数ヶ月で終わりを告げた後。

そこには未練も何もなく、だからこそより一層あの時の別れが思い起こされた。

ああ、そうか。

これほど未練がましいく思う程。

私は、彼の事を好きだったのかと。

今まで必死に忘れようとしていた思い出が浮かび上がると、それに併せて二人で交わした数々の会話の遣り取りが色づき始める。

忘れられなかった記憶は、忘れたくないものとなり、それでも連絡などつくことのない現状に、無力な自分を痛感させられる。

中学三年の夏。

淡い期待を持って調べ、解ったことは少なかった。

現在は二つ離れた市にある、母方の家に居るらしいこと。

そんなことを考えつつも、進学先に悩んでいるとき、その地域にある高校が何気なく目に入った。

そういえば、彼は工作が好きだったっけ。

その理由というのも、父親が大工さん、という物で。



きつとそんな父親の姿に憧れがあったんだろう。

そんな。

何気ない思いつき。

何でもないような記憶の一部に、どこかしら期待が込められてくる。

父親が設計の仕事をしているためか、自分が其の進路を選ぶと言ったとき、母と妹はそんな男子校みたいところは、と否定的なことをいうも、父は諦めたように自分の好きにすればいいと言ってくれた。

成績的には余裕だろうという言葉と共に、もう少し上の、近いところを受けないか？ という進路指導の教師の言葉に首を振り、それでもここまで来て落ちることだけはできないと、必死に勉強をした。

合格を確認し、それに胸を撫で下ろしながら周囲に視線を巡らせはしたものの。

離れた土地、見た事の無い顔ばかりの孤立を感じ、居心地の悪さが胸に蔓延し、見知った顔を捜したい気持ちを引き摺りつつも、母校へと合格の旨を告げる為やや足早にその場を去った。

入学後、クラス名簿に目を通した私は。

逸る気持ちを落ち着けつつも、『山』という苗字を探して視線を滑らせる。

一つだけ見つかったそれに、続く文字は『山中』というもので。そこに期待していた名前が無いことを知ると、覚悟はしていたものの、やはりそれはひどく堪えた。

そっか。

という思いと、それでもこの近くに家があるなら、もしかしたら会えるのでは、というところまで来ても諦めきれないその思いに、こればかりはどうしようもないのかな、と自嘲した。

入学式が始まるまで、自分の名前の紙が張られた机に顔を伏せ。

そんな思いに自分の顔がどうなっているのか気になったまま、時間の経過だけを只願っていた。

「はい、皆さん。入学おめでとございます。これから一年、クラス担任になる　です」

そんな声に顔を上げ、気が付けば周りにある机はすでに埋まっているのを確認する。

女子生徒は名簿の通りに少なく、窓際の席に八名いるだけ。残り は全て男子生徒。

名前と出身学校を告げる簡単な自己紹介を、ということになり、それから暫くすれば体育館に移動して貰う、という担任の言葉に続いて、教室の右側前席から自己紹介が始まった。

ガタリという椅子の動く音で立ち上がった右隣の二つ前の男子生徒の時。

「えー、はじめまして。　中出身で、名前は徳間　しん”じ”」

です。趣味は読書、かな」

そんな。

懐かしい自己紹介が耳朶を打つ。

中学入学のときも。2学年への進級時、そのクラス替えのときにも。

信士、という名前を、シンシと言われ、其の都度しん”じ”と、

子供のように反論していた、懐かしい記憶が色づき始める。

ひどく嬉しかった。今すぐ声を掛けたかった。振り向いて、其の顔を見せて欲しかった。

それでも、込上げるものを押さえつけなければ溢れてしそうになると思い、必死に、本当に必死にそれを押しとどめることに気力を振るった。

自分の自己紹介で、きつと彼は振り向いてくれるだろうと考える。それまで我慢しなければ、と、浮かぶ笑みを消すために。

その時にどんな反応が返ってくるかを考えて。

「二つ隣の 市の 中から来ました……つ、高木 由香利です。趣味は読書です」

市、という辺りでびくりと動いた体は、その出身中学を耳にした段階で振り向けられていた。

最後に見た時から、かなり変わっちゃったなあ。

どこにも子供染みたところがなく、優しげな印象のあったその表情は、今は驚きを一面に出し、その視線が自分を捕らえると、其の後は急に不信な行動をしたためか、恥ずかしそうに前を向きなおした。

その一連の動作を楽しそうに見れたけれど、背中しか見えなくなつたその姿に少しだけ寂しさも感じた。

椅子に座ると、それまでよりも気持ち落ち着いているのを実感する。

趣味の読書というのも気になった。あの驚いた表情も面白かった。まだ忘れていなかったんだなあ嬉しかった。背ものびたなあ、等、

そんな思いが溢れ始めた。

そこで漸く気が付いた。

彼の苗字が変わっていた事に。

二人きり、という空間となった途端、改めて自信の感情が彷彿と蘇る。

「信士も、この世界に囚われてしまったんだね」

「俺は…これでよかったのかもしれない、って思ってるよ。でも、お前は違っただろ？」

家族も居るだろうし、と。

それを告げる時の冷めた表情に、ずきんと鈍い痛みを覚える。

「どう、なんだろうな。よくわからないんだよね、その辺」

「だったらなんだってそんな……まだあのことに気にしてんのか？  
まあ、何時も言ってるけどそんなに気にすんなよ。あれは俺の問題だし、もう済んだことだろうが」

そうなんだけどね、と思うものの。  
それを言葉に出来なかった。

「まあそれは、今は考えないようにしとけ。それより、今後のことだが…。」

あいつの姉ねえ。性格が似てない気もするけど、実際どうなん？」

「そうだね…見た目だと、顔はそれなりに似てるといわれたことはある、かな。

性格はまあ私は父親に、あの子は母親に似たんだろうとよく言われる」

言いたいことがすぐ顔にでるあたりとか、という言葉には即座に苦笑を返される。

まあ、その反応だけで色々とわかってしまう。妹から聞いたゲーム二工以降の旅の話に、その相手が信士であると認識した上で考えてみると、面白い程の喜劇が出来上がってしまう。

「メインクエストを進めるんだっけ？ 私と信士は…11章の開始からだっただかな」

「確か。お前の付き合いで進めてただけだし、お前の方が詳しいだろ？」

「まあ、あんな妹だからね。姉としては助けてあげたいわけだよ」

このゲームにおいての指標として、それを進めた身としては。そんな言い訳を利用して、誘い出していただけの気もするけれど。

「ああ、成程ね。しっかし…確定じゃないんだが…言っておいた

ほうがいいだろうしなあ……」

「何か問題が？」

考え込むように遠い目をし始めるこんな姿の信士には、早い段階で答えをせびった方が隠し事をされないうですむというのを知っているだけに、さあ早く吐けとでも言わんばかりに返答を求め言及する。

「死んだときの……ああ……。まあ、聞いても大声は出すなよ？」

考え込むようなその姿勢から、自身が漏らした言葉を反芻し、バツの悪そうな顔を浮かべたと思うと、気難しくも躊躇うように言葉が続ける。

その言葉に、よからぬ気配を感じ、背筋が伸びる。

きっと知らないほうがいい情報で。

知って居なければ行けない凶報。

そんな予感を肯定するように重い口調で語られた言葉は

「この世界で、死ぬと。復活……できないっばいんだよね」と。

正確ではないが知っている情報は……と話された続きは。

耳に残ることは無く。素通りしていくようで、その都度胸に重くのしかかり。

「カーリンに、伝えるべきかは……お前に任せる。言いくらいなら俺

かりーに言えばそれとなく時間を作って教えておく。

「その上で聞くんだが…」

「お前は俺達を止めるか？ それとも、お前も一緒に来るか？」

告げられたそれが、真実であったとして。

ここで別れて、その後逢えなくなるという意味は。

断わるこののできない宣告をされたような。

囚われた体に、更に楔を打ち込まれたような。

思考が重く、沈みこむように捉われる一方で。

どうしようもないほどに。

その言葉を告げるその人物が。

例え其の先が破滅であろうと

『彼』が『私』に言うのだから。

私は。

私には。

それを止めることも

その誘いを断わることも

私に出来る日は、今後訪れることがあるのだろうか？



13 (後書き)

「聞いた?! リヴィア! 明日この街でお祭りがあるそうだよ!」  
「はあ、血祭りですか? モドでも帰ってきましたか?」  
「……いや、普通の、町興しの…小さい規模らしいけど…」  
「どうしました、そんなに肩を落とされて?」  
「うん…なんかね、最近、疲れやすくなったのかな」  
「それはいけませんね。私が元氣の出る薬を大量に手に入れてきましょう」  
「いや、うん。そこまでしなくてもいいかなあ? ほら、僕貧乏だしね? 自分でいうと傷つくけど、ほら僕貧乏だしね!」  
「幾らか元氣になられましたね。ああその自虐的な表情、私を誘ってるんですか?」  
「えっ?! あ、いやうん、お、お祭りにね! うん、そう一緒に行かないかとね!」  
「そうですね。明日は…ところで開始時間などは?」  
「確か昼過ぎから始まるみたいだけど…夜がメインっぽいから、日が暮れたらかな?」  
「それなら時間的にも大丈夫でしょう。明日私は朝には出ますが、日が暮れる前に戻りますので」  
「うん、それなら僕も家で待ってるから」  
「わかりました。それでは今日のお仕事を開始しましょう」

「プレイヤー・キラー  
…PKも、在りうると？」

かすれる声で絞り出された問い返しに。  
残念ながら考えられる、という諦めきった声が返され、より問題の深刻さが浮き彫りにされる。

『天上転華』というゲームには、PVP（プレイヤー・vs・プレイヤー）に関するシステムは存在していない。

それだけに町で出会おうがダンジョンで出会おうが、特にプレイヤー同士で問題が起きるといことはまずない。

が、それはゲーム時代は、というだけで。  
現実が変わってしまい、常識が変わってしまった今。  
これが指し示す意味は、考えるだけで恐ろしい。

「その…ゲーム時代的な攻撃というのは、ダメージが全くない、体への変化は？」

「ある。大ダメージを喰らい続ければ…」

体が重くなり、動くこともままならなくなる。  
そんな無防備な姿を晒した末路は。

「そういう意味でも、今後は知らない奴ってなるべく敬遠したいところはあるよな。」

特にお前とかあの妹も、女ってだけでそうだろ？」

「…大きな街というのは、今後危険になりそうだな…一度パニックになるとどうなるか…」

「ここもそろそろ危ないだろう。さっきの死んだらどうこの話だが、徐々に浸透していつてるらしい」

そのパニックに、飲み込まれるか、持ちこたえるか。

どちらの可能性が高いかわからない。それだけに大勢がどちらに傾くか。

PKがこれまでなかっただけに、その人の本性は計りづらい。

これだけ人の居る場所で、一体どれだけの人間が隣の人物を心から信じているだろうか。

だからこそ、できるだけ急いでという思い。

悩む時間すらもう無いのだというように。

そんな時に。

「話は決まったかい？お二人さん」

リーさんという男性が妹と共に戻ってくる。

同行を告げ、無邪気に喜ぶ妹の姿に、全てを伝えるべきか悩む。

もしその凶行を目にした時に、妹以外が解ったような顔でそれを眺めることになったとしたら。

知らされて居ないのが自分だけという立ち居地に孤独を抱き、そこに距離ができてしまうだろうか。

それともその状況を受け入れているという態度ができる私達の姿に、畏怖の視線が向けられるのか。

願わくばそのような場面にはというこの考えは、果たして自分の

弱さだろうか？

再び合流し、全員のメインクエストの進み具合、これまでの分岐ルートでの精査、戦闘スタイルの詳細、その他確認したいことは終わつたと告げてこれからどうするかを決めようという流れへ話は進む。

「5章ルート。それはそれではずれじゃないよ。AとBだとその後素材集めがあるからね。」

次は魔王城の視察だろう。城門脇にある『調査団の足跡』の確認だね」

「Cルートだともうそんなに進んじやうのかよ。ああ、俺もそれ引きたかつたな」

「私達は……Bルートだったか。ああ、あの沼で延々と河童狩りしたんだつたか……」

「まあ。Cルートは去年から追加だからね。条件クリアで選択肢に入るんだよ」

「じゃなければゲマニエ指定は厳しいでしょ、と苦笑しながらリールさんが補足した。

それからやはり。

ミルドサレムの情勢が怪しいということは一応伏せ、できるかぎり早急にクリアを目指そうと。

銀行施設も今後は気軽に訪ねられなくなるだろうという話に、一番堪えたのは誰かと名前を挙げるまでもなく。

「そうなるけどどこかに移すべきなんだろうが。あいにく私には安全そうな場所が思いつかん」

「やはり、諦めるしか、ないか」

「あー、んじゃ俺の部屋の隣借りればいいんじゃないか？安っぽいアパートだけど」

「ならば、他に案もないだろう。そこに運び込もうか。ちなみに…只の興味本位なんだがね。」

『ウエポン・マニア』の収集品は、どれだけあるのか聞いてみてもいいかね？」

「ん。確か……二百五十七、かな。その他に自分で使う武器が五本」

「……また五本増えてんぞ……」

「昨日妹に一つ渡したから、昨日までなら二百五十八だった」

「……」「お姉ちゃんすごいねえ」

それがよく解らない妹だけが、どうやら自分の味方らしいと、そんなことを思ってしまった。

一人、準備の済んでいない自分の為と妹が街を嬉しそうに駆けずり回り、男性二人が銀行施設まで同行し、引き出される宝物の数々を遠い目をしながら自身のアイテムポーチへバケツリレーを繰り返す。

上限百種という粹一杯を、三人でぎりぎりというまでに使い切つて、ようやく終わったその作業に誰ともなく溜息を吐いた。

「そろそろ日も暮れる時間だけど…。信士の住み家つてのはどっち方面？ ゲマニエに居たってことは西か南だよな？」

「ん？ ああ、ゲマニエから歩きで半日も掛からん所の…こっから南西にさ、あの七章の開始で行く『調査団の村』つてあるじゃん？ そこから南東に二日くらい行けば、五章で一回だけ寄る『エスプリ』つて街あんの知ってる？ あそこあそこ」

「タイムリーというか何と言うか、今の状況だと都合がいいね。人も少なそうだし、その上魔王城も近い。」

それに、南の商業都市ハルムーンまでそれ程距離もない。できればあそこの様子も知っておきたい」

それなら早速行きますかという呑気な声と共に、ミルドサレムを出るべく一行は歩き始めた。

大陸中の至るところに生息するモンスターではあるが、脅威となるモンスターは高レベルダンジョンの側にしか生息していない。

そのため比較的安全な位置に村や街は出来るのであるが、立地的に重要な地点には囲いを作ったり衛兵を置くなどの処置をとり、そこに居を構える場合もある。

『調査団の村』というのは遺跡郡のある砂漠地帯からやや近い場所に作られた拠点。

近くに数多くある遺跡周辺は、脅威度の高いモンスターも数多く、それでも退けぬと軍を置き、研究者を集めて一種独特の村を形成

している。

熱気と喧騒に溢れた村は、旅行く冒険者の持ち寄り情報に、厚い歓迎をもって迎えるであろう。

それがゲーム時代、この村に対する説明として語られた内容であった。

「どうなってんだこれは……」

先頭を歩く信士の呟きに、追いついてきた一行もまたそれを認識する。

広場中央にある大きな篝火は変わることなくそこに在り。

簡素なあばら家も、テントに見える陣幕も、立て札も、二つ並んだ井戸も変わらず見受けられた。

しかし。

人影が、人の気配が、生活の匂いがまったくしない。

あばら家へと忙しく詰め掛ける研究者の姿も

陣幕で怒鳴り声を発する軍人、巡視兵も。

井戸へと赴く人の影も。

何がと考えて解る物では無いその光景に、物陰からの物音で視線を移す。

「あーああ。よく寝た……ん？誰だおまえら？」

エルフのハーフと思われるその姿の男は、眠そうに眼をこすりながら、順繰りと確認するように此方を眺め始める。

その視線が一度、二度と動くたび、その口元には笑みが浮かぶ。

「はっはっは。これはこれは。奇人変人七人の内、なんだこの勢ぞ

るいつぷりは。

奇行士のREPPOBITANNに武器マニアのウサミツチ、おまけにあの山田様まで居るときた」

どんな合縁奇縁だと高笑いするその姿に、どう話しかけるべきかが思い浮かばない。

「それならば、君もその内の一人だろう？『ソリスト』だっけ？それともカシミアと呼ばばいいかね？」

ソリスト、というのは永遠のソロプレイヤーの意味だったか、とその言葉が指し示す意味を思い浮かべる。

それからふと、なんだその奇人変人七人というのはとその言葉にやや呆れてしまう。

そして、思う。

あれ？ 今自分もその内の一人として一緒にたに言われなかったっけ？ と。

自分以外の、リーもウサミも奇人に変人だとは思うものの、何で自分が思ってしまう。

いやそれよりも。あのって何だ、あのって。何故様付けなんだとこう、小一時間問い詰めたい。

「名前まで覚えていただけってたとはね。っは、さすがというかなんというか。

それで？そんな御一行様が一体全体何の用でこんなとこまで来たんだ？」

「いや何、この世界の観光がてら、知っている場所を見て回るうかとね」



笑いながら話すその目は、探るように冷徹な色を見せ。

なにやら探りあいが始まったようだ、下手に口を挟んで巻き込まれないように会話を全てリーに任せるべく信士はリーに視線を送り、頷くのを確認すると残る二人を促しやや後ろへと引き下がる。

感情が顔に出やすい人物が側においては、手札を伏せた会話は無理そうだし、と。

信士を含む三人が会話の聞こえないであろう位置まで移動したのを確認すると、再び視線を依然動くことの無い目の前の男、カシミアへと向ける。

そして映った挑発的な笑みに、仮面を被るように微笑を返し、待たせてすまないね、と言葉を続けた。

「各地を見たいね。それなら俺が教えてやろうか？ ガルエイムとリンレンはのんびりしたもんだつたよ。ミルドは五月蠅すぎて吐き気がするね。その点、ハルムーンはカオスっぷりがいいね。是非訪れたまえよ」

「学術都市ガルエイム、山岳都市リンレン…位置的にも、街の施設的にも静かな所だろうね。」

私達はミルドから来たのだが…ハルムーンがカオスとは、どのような状況か聞いても？」

「へえ、ミルドからね。じゃあ、答えという名の質問だ」

ミルドのプレイヤーは正気か？狂気か？

「あつはつはつは！ いい顔だ！ この村の様子が気になっただろ？ 正にそれが答えさ！」

「殺し合い、という言葉でいいのかな、そこまで発展している？」

「おや？ ミルドはまだあそこまでいってないのか？ もうすでに思ったんだがな」

「…あそこまで、ね。その様子だと見て来たようだね。聞いてもいいかい？ 死んだ後、その体はどうなるのか」

「変わった質問だな…いや、ミルドで誰か消えたか？ おいおい、その顔は正解か？

くそっ！ ミルドも始まってんのかよ！ こっから先は胸糞悪くなる情報ばっかだ、それでも聞くか？」

その怒りを隠さず、堪える様に強く握られた手には、語るだけでも強い覚悟が強いられているように見え、この先一字一句、違えることなく聞くべきであると、強く確りとうなずいて見せた。

「俺がハルムーンに着いた時…そんな時はまだそこまで酷くなかった。だが街の気配にそうなり掛けているという何処か嫌な予感があった。それが何かを探ってみて、あの阿呆共を探り当てた。

一人相手に十人ほどで魔法撃つたり、剣で槍でと弄ぶようにな。強奪だよあれは。これ以上やられんのが嫌なら持つてるもんを寄

越せつて怒鳴りながらな。

ある日、もう手も動かない程になるうが、そんな強請りを拒み続けた勇氣ある馬鹿が居た。

何難しい顔してんだ？ そんなことで命を捨てるような奴は頑固なだけの馬鹿だろ？ 誰も得しねえよ。

それに感情的になった阿呆が激昂し、初めて死人がでたんだよ。ぴくりともしなくなつてたね。

俺たちが死んだら？ モンスターと違つてそいつの死体はその場に残つてたよ。

ここでブルつてくれたらよかつたんだが、それからその阿呆共は留まるどころかエスカレートしていった。

動けなくなるまで剣やら魔法やらで痛めつけて、その後殴る蹴るをして死んだらどうなるか、今度はモンスターに殺させてみればどうなるかとね。

モンスターにやられると俺達の体は消滅し、装備品は解除され、その場にDROPAアイテムとして手にすることが出来るようになるらしい。

もちろん、最寄の大聖堂に送られることなくな。

それから何日後だったか、どっかから流れてきた一人を同じように強奪すべく攫つていった。

そして、大物を手に入れた。

『神剣 ミストルティン』

そつからは……わかるだろ？

阿呆の集まりだ。

仲間内での奪い合い。それだけに留まらず、周囲を巻き込み手勢を増やし……爆発的にその腐った実験結果が広まった」

出来上がったのは狂乱の宴。  
収集のつかない欲望の坩堝。  
逃げ場の無い悪逆の祭典。

逃げ惑う弱者を手勢に引き込み、それが叶わなければ敵に回る前にその芽を摘む。

そうして次第に誰の元には何があり、誰の周囲にはどれだけが居ると。

剣で、魔法で自由が奪われて行くその瞬間、人は何を思うのだろうか？

猜疑、対立、懐柔、懸念、恐怖、疑心、憤怒、孤独、強欲、禍根

一度始まってしまったそれは、もはや修復不可能であろう。  
それを留める法もなければ権利もないこの世界で。

この世界から開放される日があるとして

ここまでの世界の常識に囚われてしまった我々は

果たして、開放されてもいいのだろうか？

14 (後書き)

「ふふん、ついにこのときが来たようだね……今日こそ君達の出番だ！」

キラリと輝くその肢体！数々の『無駄遣い』という魔の手を逃れ、共に戦い抜いた君達の……！」

「御待たせ致しました。サタン様、準備はよろしいですか？」

「やあ！ 思ったよりも早かったね！ 何時と違う装いで、随分と輝いて見えるよりヴィア！」

僕のほうも準備はばっちりさ！」

「ありがとうございます。それで、その手に握り締めている……！」

「これかい！ ふふふ、これこそ正に！ 僕の努力の結晶さ！ 飢えに耐え、欲望に耐え、共に生き残った正に！ 正に魔王軍と呼ぶに相応しい勇士達さ！」

「……その銀貨五枚がですか？ ……おっと、ポケットから金貨が三枚も……！」

「……あらあら、拾おうとしたらまた五枚ほど溢れてしまいました」

「……すみません、これから出かけようという時に、とんだ粗相を」

「……うん、気にしないで。ほんと、大丈夫だから。ほら、僕魔王だし、そんな……そんな……！」

「すみません、サタン様。はしゃぎすぎまして……その、つい癖で……つい……癖……ゴクツ。あっああ、うん気にして無いからね！

それじゃ行こうかりヴィア」

「はい。それでは腕を組んで参りましょうか」

「ははは、リヴィアは魔王の右腕だもんね。うんそれじゃそうしようか」

礼の言葉を残し、去り行く背中が視界から消えると。

ザリッと砂を踏む足音に振り返り、ゆっくりと此方へ歩み寄る姿を認め。

先程までの激昂を吐き出すように呼吸を整え、うんざりとした表情を浮かべて其の人物を出迎える。

「あいかわらずのしかめっ面ですね隊長さん。今の奴等は？」

「隊長とか呼んでんじゃねえよ。観光だとさ、気楽なもんだ」

吐き捨てるように返答しつつ、自分の言った言葉にそれはないだろうけどな、と即座に否定する。

あんな面子を揃えて観光などと、冗談にもならない真っ赤な嘘だと。

「はーん、観光ねえ。てことは……ここにいてことは、これからハルムーンに？」

「怖い人達がいるからやめとけつつつといたけどな。まあ、どうすんのかまで俺は知らん」

おどけた様に肩を竦めるその様に、慣れて来たとはいえチリリとしたイラつきを覚える。

手の掛かる子供だと言われたようで。

我が侏なガキだと見下されたようで。

「相変わらずお優しく面倒見のいいことで」

だからこそその言葉を言われるたびに、表情だけは不機嫌に染まる中、胸に安堵が込上げる。

素直に成れないだけなんでしょう？ と、それくらいは解ってますからと告げているその視線に。

「ちげえよ。言ってるだろ？ 俺はあんな頭が天気良すぎじゃねえの。かつて奴らが嫌いなだけだ。」

其の上で鴨に葱を背負わせる趣味がねえだけだよ」

「はいはい。んじゃ昼飯の準備の時間だってあいつら煩いから、一緒に来てくださいな、カシミア隊長殿」

『調査団の村』を出て二日後の日が暮れかけた頃、信士達一行は目的地である『エスプリ』の街へ辿り着いた。

「いやはや、随分と賑やかな街だね」

「いや〜俺がここである前まではこんなに喧しくなかったんだが…  
…ん？ 何だこれ？」



リーの感嘆の声に返答した信士は、やや戸惑いながらその光景を眺めて、ふと視界の隅に捉えた張り紙が気になり何が書いてあるのかと顔を近づける。

それを読み進めていき、ああそういうことかと納得する。

そうしてその張り紙を指差して、今日は町興しの祭りの日らしいことを皆に伝える。

「まあ、とりあえず部屋を借りに行くか。先に歩くからついてきて」

そうして慣れた足取りで進む先に、やや日当たりの悪い歩きなれた路地が見え始める。

複数の足音が控えめに響き、不安げな声が時折聞こえては苦笑いを浮かべ。

申し訳程度に作られた門柱を越えると、その存在感を誇らしげに示すやや大きめの看板に出迎えられた。

此れ池荘 『空室あり』

大きく、それはそれは立派な字で書かれているそれは、変わることなく其処に在った。

リーとカーリンを205号室へと詰め込み、ウサミツチと二人、並んで管理人室へと足を向ける。

101号室に住むこのアパートの管理人は、この部屋が206号室に居ることが多い。

コンコン、と軽くノックをした後、返答が聞こえたために今日は部屋にいたのかと、そんなことを考えつつ、ならば206号室の住人は今頃『どう』なっているのだろうか、そんなことを考えた。

埋められてるのかなあ、そうじゃないといいなあ、これから挨拶したいしなあ。

ガチャリという音に次いで、姿を現した女性の姿に、隣から息を呑む音が聞こえる。

「あら、山田さんでしたか。お帰りなさい…隣の女性は？」

相変わらず美しいとしか言えないその姿に、袖に見える赤い何かを考えないようにし、ただいま帰りましたと告げた後、来訪の意図を説明し契約をするべく説明をする。

「実はこの、ウサミツチっていうんですけど。こいつの部屋を借りたいんですよ」

「そうでしたか。空き部屋はそうですね…山田さんの隣も空いてますから、其方でよろしいですか？」

「204号室ですね。それでいいと思います。いいよな？」

それに未だ心ここに在らずという表情で未だ視線を彷徨させたまま、それでも話は聞こえていたのかカクカクと頷き肯定を示すのを見て、リヴィアさんは一度室内へ戻ると『204』と書かれたプレートに付いた鍵をウサミへ渡し、それから月契約にするか、年契約にするかと契約事項、諸説明を話し始める。

それを横目に見つつ、視線を周囲へ向けて向けてみると。

…ああ、あそこだけ土が盛り上がって…埋まって、いや、這出した跡？

「ああそうでした。今日はお祭りがあるそうですよ。長旅の帰りのようですし、お二人で行かれてはどうですか？」

そんな声が聞こえ、視線を戻してみると契約を終えて部屋へと戻るリヴィアさんの後ろ姿と、此方を呆然とした表情で、それでも少しだけ何か期待した目で見ているウサミの姿に苦笑を浮かべると、今日位はそんな息抜きもいいのか、と部屋で待つ二人にどう提案しようかと考えながら、とりあえずは部屋に行こうとウサミを促し、耳慣れた悲鳴で迎えてくれる階段をゆっくりと昇り始めた。

204号室の玄関を抜けると、同じ造りの部屋ではあるが、やはり何も無いから少し広く感じられた。

リーも呼んで早速とばかりにぽんぽん武器を出し始めると、そこに拘りがあるのかせつせと並べ始めるウサミの姿に、何処か必死さというか鬼気迫るものを感じ。

漸くといいたくなる程の時間経過の後、そんな作業を終えたウサミは満足そうに頷いていた。

もはや人の住む場所を失ったその部屋は、只の倉庫と言っているような気がする。

「祭りは夜メインらしいからもう始まってそうだな。飯もまだだし皆で見に行こうか？」

「ふむ、今日はそのほうが良さそうだな。それじゃあ私がカーリンを呼んでこよう」

そう言い残して隣の部屋へと逃げるリーの姿を尻目に、この目の前の光景に、この部屋で朝を迎えることは出来るのだろうかとなんかそんなことを考え始めた。

宿の空気があればいいが、祭りとなるとどうなのだろう？

最悪自分の部屋に四人も？ さてどうしたもんかなと考えていると、バタリと戸の閉まる音と、二つの足音が聞こえ、まあその辺りは街に出てから考えようかと未だ自分の世界に居るウサミを引き摺

りその部屋を後に、四人は並んで歩き始めた。

「少し、疲れちゃった」

食事を並ぶ屋台を巡りながら済ませ、出し物の演目に足を止めたとき、ウサミに呟くカーリンの言葉を拾い、それもそうか、と余り考えずに誘い出したことを少し後悔した。

幾ら姉が一緒とはいえ、知らない人間との長旅というのは、十六歳という年齢から考えてみると精神をすり減らすものだったのではないだろうか。

それなら先に戻ってなさいとウサミが自身の部屋の鍵を渡すのを見て、そのほうがいいだろうと頷きかけた時、え、ちょっと待てあの惨状の部屋に休むスペースが？ と慌ててそれを止めに入る。

「ん？ 信士？」

「あ、いや、ほら。カーリンの荷物とかは俺の部屋だろ？ だったら俺の部屋使えばいいよ」

「そっかい」『205』と書かれたプレートの付いた鍵を渡し、道は覚えているか聞くと、大丈夫という返答を貰う。

「とはいえ、この時間だ。途中まで私が送っていこう」

リーのその提案に、カーリンは戸惑いや躊躇いを見せずに感謝の言葉を告げていた。

何時の間にそんなに仲がよくなったのだろうかと思いつ

つも、ウサミは疲れとか大丈夫？ と声を掛けると、問題ない、という返答を貰った。

二人が消え、周りが騒がしくなってきたなと思って会話を拾ってみると、もうすぐ花火が上がるといふ声が聞こえ、懐かしいなと思いつながら歩いていると、前方に見知った姿を見かけ、声を掛けておこうかと思い、歩き出そうとして足を止めた。

「あれは、管理人さん、だよな？」

「あ、あぁうん。それであの、隣と一緒に腕組んでる人が206号室の沙丹さんだ」

どこか信じられない物を見たという感じで呆然と突っ立っている自分達は、押されるように人の流れに意識を取り戻すと、祭りの目玉である花火を見るため、その流れに従って歩き始めた。

「こうして祭りに来るのも、久しぶりだよな」

「そう、だな。高1の時だっけかあれ。あん時は洋介も…あいつも居ただけだな」

「……二人で、だと小学校以来になるのかな」

「んー？ あったっけそんな…ああ、神社の、あれは小6の時か」

良く覚えているなあ、と思いつながらも、そういえばそんな事もあったっけとそのことを思い出す。

あの頃は、平穏な日常だったな、と。  
それから。

終焉へと向かい始めた平穩を。  
何がいけなかったんだろうな。  
どこで間違っただらうな。  
どうしてそうならなければいけなかったんだらうな。

原因はなんだったのだろうか？

「 - - ーんじ？ 信士！ どうしたの急に？」

それを思い出しそうになった時に声を掛けられた。

「あ、ああ悪い、ちょっと昔を……それより行くこうぜ。もうすぐ始まるみたいだ」

昔を、と聞いてビクリとしたウサミに、失言だったと思いつつも  
気持ちを切り替えるように話題を変える。

わつとあがり始めた歓声に目を向けると、空に大輪が咲き誇り夜  
空を色取り取りの色彩で染めて。

鮮やかな色形で観衆の期待に応えるそれを見ながら。  
無邪気にはしゃぐ子供を、それを笑顔で見つめる親を、手を繋ぎ  
幸せそうな笑顔を浮かべる男女を。

微笑ましいと思えず

羨む事もできず

ただ鼓動に併せて胸に響く、鈍い痛みを感じながら  
自分が居るべきはあの世界ではないのだと

アノヒトタチハソバニイナイノダト

どうしようもないほどに 開放感を覚えていた。

祭りの醍醐味、もしくは締めくくりとでも言うべき一際大きな大輪が夜空を染める。

その光が闇に飲まれると、一瞬の静寂の後には引き返す人波の喧騒が辺りを占め始め。

その人波から外れた位置にある高台に、静かに佇む一組の男女。

その一方がゆっくりと視線を空から外し、先程から感じる気配へと向き直る。

その高台へと続く、一本道に立つその姿へと。

「ごめん、リヴィア、先に戻っててくれないかな？」

「どうしました……わかりました。それでは失礼いたします」

常なら気づいていようそれに、反応が遅れたことを悔やむようにそれ以上の言及は続けず、素直にその願いの通りに行動するべく、その男の側を離れた女性は、帰宅の途を辿るべくその道に立つ男の脇を通り過ぎ、振り返ることなくその姿を消した。

「さて……はじめましてでいいのかな？　それで一体、どのような用件なんだい？」

「用件は……そうですね、お話をしましょうというものですよ」

「お話、ねえ？　それにしては……随分物騒な雰囲気というか表情と  
うか。まあいつか。それで、何を話そうか？」

対峙からこれまで、抑えていたのか微かな気配が感じられただけのそれが、二人きりになった途端に暴風の如く顕現する。

それが何を意味するのかは、考えるだけで様々な答えを自身に示す。

その上で目の前の人物の正体が、どんなものであるのかという答えに近づける気はする物の。

さてその距離は、どれ程の物かと思案する。

「先ずは何から、と考えると、難しいものですね。っと、時間は大丈夫なのでしょうかね？」

ええっと。そうですね、話をするとして私はあなたをどう呼べばいいのでしょうか？

沙丹さん？　サタン様？　それともジ「ストップだ」



「そこで、ストップだ。いいね、リヴィア。わかったら離れて」

この状況にあっても表情を変えること無く佇む姿に、目の前のこの男を賞賛したくなる。

瞬時に背後を取り、その頸動脈上にその鋭利な爪を突きつけられ、殺生与奪を握られて尚動じる素振りをかけらも見せない。

その上で、先の言葉。

「やれやれ、先に戻ってと言ったのにね。まあ、今回は助かった、のかな？」

さて、時間だった？ 全く気にしなくていいよ。僕も色々話をしなくなった。

僕の話は、サタンさんでもなんでもいいよ。それで、僕は君を何と呼べばいいのかな？」

さて、帰ってくるのはどんな答えかな、とその先を予想し期待に鼓動が逸る。

「そうですね、リーさんでも何でもいいですが……判り易く『四番』とでもおよび下さい」

先程止められた言葉。

四番。

それから導かれる答えは、必然的に一つであり

「成程。そういうこと、ね。いやはや、これは何の因果だろうね…

…」

そうだろう？

そうとしか言えないだろうこんな偶然。

それとも、これは必然であると？

全く、こんな世界が存在するのは、一体どうしてなのだろうね。  
話したいことは山ほどあると、それもそうだろう君と僕は。

「それじゃあ話し合いをはじめようか？」

貴志君「

「サタン様、申し訳ございません。米が尽きました」

「……え？ ……、え？？」

「サタン様、申し訳ございません。お米様が、お米様がもうっ！」

「は、はは、あはは、やだなありヴィア。そ、そんな悲しそうな顔しなくてもいいじゃないか。」

米がないなら花林糖を食べればいいじゃない」

「サタン様、それは『炭』です！ チャコールです！」

コンコン、ガチャリ

「お久しぶりで御座います、サタン様。同士リヴィア……どうしました？」

「これはズー殿、丁度いいところに参られました。サタン様、ズー殿がお見えに、サタン様、どうぞ現実へお戻りください」

「おや？ サタン様はどうなされたので？」

「それが、目下食糧不足の憂き目に……」

「……っは！ 僕はなにをつっ！？ あっズーじゃないか！ 久しぶりだね」

「これはこれは、お久しぶりで御座います。事情は聞きました。私が一肌脱ぎましょう」

「えっ！ いやそんな、悪いよそんなっ！ べ、別に僕は肉が食べたいとか、そんなこと思っついてないよ！」

「いえ、気にすることは在りませんサタン様。さあ、ガブツと来てください。さあ」

「え？ いや、あの…何、ガブツと？」

「”お腹が空いてるんだね！ 僕の顔を食べなよ！”」

「なんでそんな裏声でっ！？ いや、それにそのセリフは不味いよ！ 色々と駄目だよ！！」

えっ？大丈夫なのこれ？！ 見た目的にも大丈夫なのそれ？！

僕のキャラ大丈夫なの？！」

「今ですサタン様。ガブツつと行ってください！ スペアはアムおじさんに作って貰っておきますから！」

「ちよっ！ リヴィアなんで流れに乗っちゃってんの？！ 止めてよ！ アムおじさんて誰？！」

「”遠慮は要らないよ。僕はみんなのヒーローだからねっ”」

「遠慮じゃないよ！ 厭悪でしかないよ！？ えっ！何でそんな白い目でみられなきゃいけないの？！」

「同士リヴィア……あなたはサタン様の食事に贅を尽くしすぎたのではないですか？」

「……否定できません。そうですね、これからはもう少し質素にするよう勤めます」

「やめてよっ！ それ以上僕の心を削るのはやめてよっ！！！！！」

## 01 (前書き)

2章、開始します…が、まだ着地点が未定です……。どんな結果にどうもって行こうか定まってませんので、少しそのう、更新頻度というか……。

そのような理由で、章タイトルは今後変えるかもしれません。

お気に入り登録ありがとうございます！ コンゴトモ ヨロシク

商業都市 ハルムーン

巨大な中央大陸に措いて二大都市とも言われる其処は、人に溢れ、活気に溢れ、富に、商品に、色彩に、雑多さに、それはもう語りつくせぬほどに特異な街を形成している。

外海に面したその場所には、そこから吐き出し迎え入れられる数々の交易船、観光船によつて様々は文化や思想、人種に特産品を受け入れていた。

そうして膨れ上がった街の全容には、まるで住み分けるように区画が出来上がり始め。

貧と富の差が明確に見える世界となった。

それが今や。

只の設定だけではなく。

日が昇れば影が出来、闇が深まれば月が映えるように。力と数による暴虐の宴を催した後

弱者は貧者へ強者は富者へ。

「てめえ！ 俺が誰だかわかってんのか！ 俺の武器を知ってて歯向かってんのかっ！！」

「はっ！ 威勢だけは褒めてやんよ。それがどうしたよ？ びびってんならケツ撒くっていいんだぜ？」

「ぶっ殺す！！！！」

街には暴力が溢れ。

「クソツ！ 裏切りやがったな！」

「ん？ あははは、裏切っただなんて。よくもまあそんな甘い考えを。最初からですよ最初から。そんな考えしか出来ないからそんな無様な格好になるんですよ」

「クソツ！クソツ！」

喧騒は怨嗟に溢れ。

「これはこれは、懐かしい顔だ。お元気でえすかあ？ 楽しんでますかあ？」

「それはこちらのセリフだが……。成程、これはこれで……。さて、ならば君に楽しませて貰おうか？」

新たに街に足を踏み入れる者があれば、その姿を隠すことなく衆目に曝し。

視線が絡み、欲望がまた更なる暴力を生み、絶え間なく終わりを見せず。

商業都市 ハルムーン

死と生の重さを量るその天秤は、力に因つてのみ傾けられる弱肉強食の街となった。

眼下に眺める街の風景は、街そのものが何かに怯えているようにひっそりとしていた。

闇を嫌うように灯された明かりにすらも、何処か弱々しい雰囲気を感じてしまう。

「隊ちよーう、どうしたんすか？ 柄にもなく緊張してんですかい？」

からかう様な軽い声に、それをどんな表情で放ったのか想像でき、振り返って応えてやる気がこれっぽっちも起こらず、そのまま眼下の光景を眺め続ける。

やれやれとでも言いたげな溜息が聞こえたが、次いで聞こえた足音は、自分の隣で止まると「よっこらしよ」という声の後、周囲は再び心地よい静寂を取り戻す。

「いよいよ明日。始まったらもう戻れないんですぜ？ 隊長。俺は正直、どっちでもよかった。

でも、やるってんならとことんやってやるってのは考えてる。それは、俺だけじゃなく、他の皆もそうだろう。

隊長、別にあんたに全責任を負わしたい訳じゃないってのは、わかってくれてると思う。

だが、俺らにとってはもうあんたが隊長だ。その上で、聞きたいだけだ。

覚悟は、出来てんだよな？」

隣に座り込まれ、より近くで聞こえたその声に。

覚悟は出来てるかと聞かれたところでそんなご大層なものとはじめからない。

俺に在るのは何だろうかと考えてみても、相応しく思える物が思



い浮かばない。

力に驕った奴らへの復讐？

ガキみたいな英雄願望？

震えるだけの過去との決別？

どれでも無いようできて、その全てのように思う自分に、相変わらずどうしようもない屑だなと嘆息する。

こんなんだから俺はその標的に選ばれるんだと。

やり返す事もできず、逃げることも出来ず、ただひたすらに耐えて黙して、相手がそれに飽きるのを待つだけか、こそこそ人目を避けるだけの自分。

家が貧乏だったから？

背が小さかったから？

駆け足が遅かったから？

引っ込み思案で暗そうなやつに見えたから？

其の全てが理由に思え、それ以外の何かが理由な気もして。

自分より弱そうだと認められただけで、その優越感の為に、そのストレスの捌け口の為に。

その行為は年々、体と頭脳の成長と共に陰湿さを増して

人目を避け、自身より上位の者の影を避け、執拗に、陰険に、より劣悪に自身を蝕み。

気がついてみると、自分は一人、孤立していた。

絶るべき姿は手の届かないところに、助けを求めるべき相手は声

の届かない距離に。

そうして逃げるように噛り付いた世界。

一人で全てをこなした。力も、知識も、技能も装備も揃えられる何もかもを。

自分の力と知識を羨み、取り込もうと擦り寄って来た奴も現れ始めた。

それを見るたびに現実の自分を思い出し、そんなことをする人物がどんな奴かを考えては突き放していた。

そして、その世界は。

自分の暮らす世界と化した。

だからこそ自分よりも弱い阿呆が我が物顔でのさばるのを見て怒りを覚えた。

弱者が！ と告げる視線を受け、それが数を背景に自分の強さを示すだけの其の態度に。

それに憤りを覚え、この世界の法則となった『力の強さが全て』というルールを

目の前の阿呆に教えてやりたいと拳を握り。

それ以上動けなくなった自分に、呆然とした。

足が竦み、動悸が激しさを増し、瞳は怯えるように揺れ、握られた拳も力を無くし始める。

力の強さは、心の強さに比例しない。

悔しかった。惨めだった。無様だった。  
それでも、これ以上逃げ場は無いことは悟っていた。

一人、隙を見てはその後をつけ、闇に乗じて禍根を断つ。  
そうして過ごし始めて数日、同じことをする奴に出くわした。  
一人、二人、五人、十人。  
そうして集まった奴らの全てが、自分を隊長、リーダーと呼び出しはじめた。

それを苦々しく思う傍ら、嫌だと思わない自分がいた。

だから

「ここまで来て止められるかよ。これ以上あの阿呆共の好きにさせてたまるか」

「そつだ……そつ、我慢するのはここまでだ。そつだよな、カシミ

ア隊長。

じゃあ、俺はあつちから街に入る。朝には潜り込みたいから、もう行くよ」「

「ああ、早く行けよマル。俺も明日に備えてそろそろ寝るわ」

それじゃあまた明日、と。

それ以上は何も告げず、遠ざかり始める足音を聞きながら、眼下に映る景色を眺める。

日付が変わり、朝日が昇る時。

はじめよう、反逆の為の行動を  
取り戻そう、平穏と安寧を

決別しよう、孤独とそれを受け入れ続けた過去の自分と

狼煙が上がる、日の光と共に。

それを合図に、ひとつの影が街へと消えた。

「さて、始めるか」



「いやあ、お祭りつてのは楽しいものだねえ」

「はあ、そうですね」

「出店も多かったし、人も活気も凄かったね」

「はあ、そうですね」

「それに、あの花火は綺麗だったね。数もあそこまでってなれば、中々ないんじゃないかな」

「はあ、そうですね」

「……あの、リヴィアさん？ その、テンション低いっすよ？ どうし、されました？」

「はあ、そうですね」

「えっと、因みにその、そのお手元の熱心に記入なされている書類は、あの、どのような物なんでしょうか？」

「『ズー先生の通信講座 一発合格！ マーダーライセンス』ですか？」

「マーダー？ どこかで聞いたことがあるよ……だめだよ！ え？ 何でそんな物騒な資格あるのっ！？」

え、ズー先生何してくれちゃってんの？！ 誰が発行してるのその殺人許可証って？！」

「もちろんズー先生ですよ、何をわかりきったことを」

「わかりたくないよ！！ いやそもそもどうしてそんな物に興味もつちやったの？」

「はあ、昨日のあの男をこう、キュツと殺りたくて。あの男さえ来なければ……」

「え？ あ、彼？ いやいやだめだよそんなの！ それにお祭りは花火で終わりだったじゃない。後は帰るだけだったんだし、そこまで気にしなくても、許してあげようよ」

「サタン様。遠足はおうちに帰るまでが戦争だと教えて貰いません

でしたか？」

「いや、確かに聞いたことは……無いよ！ 戦争って初耳だよ！

誰がそんな事教えるのさ！」

「ズー先生です」

「あんちくしょおおおおお————！……！」

「魔王城の視察ってのは、どんな内容だっけ？」

信士達一行は昨日まで過ごしていた此れ池荘の在る『エスプリ』の街を後にすると、一路魔王城へ足を向けている。

結局お祭りからの帰宅後、204号室が惨状を呈して居る為、ベッドをウサミツチとカーリン姉妹に提供し、男は床にござる寝で四人同じ部屋にて一夜を明かすことになり。

早朝の奇声絶叫断末魔にベッドの上で体を寄せ合う二人、それを目覚ましにしている自分、お構いなしにすやすやとしている凶太い神経の持ち主で迎えた一日の始まりに、早めにここを出たほうがいかな、とそんなことを考えた。

「城門に沿って右に真っ直ぐ行けば『焚き火跡』があるんだよ。その周辺にある調査員の残したメッセージを探すこと」

それを報告して終わり、と締めくくったリーは、未だ眠そうにふらふらと歩いている。

昨夜も何時帰ってきたのか、朝起きたら近くで寝ていた。

起き抜けに昨日は何がと尋ねてみると、それはとても意味深に、少し困ったように眉を寄せ其の上で面白そうに、あざ笑うような形を浮かべた口を開くと

『それは野暮な詮索だよ？ 私は君と違って大人だからね。ああ、それが解ってて聞きたいんだね。全く、おませな子だね。しょうがない、教えてあげよう、そう、始まりから終わりまで』

ということを上位者という目線で見つめながら語る様に、つい力



ッとなってやった。

俗に言う敗北者の一撃と言う名の強制的二度寝誘引である。

### 魔王城。

最大級のダンジョンであり、また数々のイベントで訪れる場所であり、武器、防具、魔具、レアアイテムの宝庫とも言える、難易度の高い狩場でもある。

敷地も広く、其の中には独立したように離れた場所の建物があり、そこもまたダンジョンとしてプレイヤーを迎え入れている。地下水路、地下坑道などもあり、そこは上に下にと様々な姿を以て。

そんな敷地を囲うように巡らされた城壁には、人の背丈を軽く越える、三メートルから四メートル程の巨大な城門がどしりと構え。

現在その城門前に二つの人影が立っている。

「ここら辺で多いのはあの羽目玉だよな？ 他どんなのいたっけ？」

「羽目玉って……もう少し製作者サイドの気苦労をわかってあげてもいいんじゃないかい？」

まあ、そうだね。一番多いのはビボイドだけど、黒蛇が少数、他だとデユラハンかな」

やや緊張した足取りで歩いているウサミツと、その後ろをおっかなびつくり付き従うように歩くカーリンの後姿を眺めながら、デユラハンが出たらきついだらうか？ と考えながらも、追いかけることはせずただ見送った。

「それにしても…純エルフで光魔法持つてるなら、そこまでは制限しなくてもよかったんじゃないかい？」

表情こそは変えないものの、声音にやや不満を乗せて響かせたり  
の言葉には心配の色がアリアリと窺える。

「今後のことを考えるとそうもいつてられないだろ？ 今はまだ五章だけど、どっちにしる……」

濁された言葉に、そこに含まれる意味は互いに言うまでもなく認識している。

メインクエストを進める上で、どうしても通る街の名前。

商業都市 ハルムーン

中央都市 ミルドサレム

ハルムーンの惨状は聞いただけではあるが、もしそれが事実だとしたら其の街にてクエストを進めるために滞在するとすると、自衛の手段は多いにこしたことはないだろう。

それに、ウサミツチもまたこれまで自室に籠りきりであったことを考えると、この世界での戦闘を経験させておかなければまずい。

その為に今回の魔王城の視察というクエストにおいて、二人だけで行動させ、其の上でカーリンには『ルナ・ボウ』の扱いに慣れて貰うように光魔法の使用を三度までと制限を加えた。

「それに、あの二人には聞かれて無いほうが話易いこともあるだろう？」

それに対して返る言葉は、まあねという簡単なもの。

「八章開始にハルムーンでの進行に入る。それまでに対策を考えな

いといけないだろうね。

もしあの話が本当だとして、信士はどう考える？」

「実際厳しいよな。たぶん、うてる手は少ないだろう？ こっちは何にも情報ない。あつちはどんなこつたるうと人体実験まがいのことまでやって知っている」

モンスター討伐ではなく、対人戦。

それも有効な手段を手探りで調べるしかない自分と、それを繰り返してきた相手との戦い。

逃げ回るだけでいいなら、幾らでも対抗手段はある。

しかし、それだけのために街に行くのではない。

「ただ、それについても相手はどのくらいまで知っているのかなんだよな。

例えばさあ、技能あんじゃん？ あれ『声』を出して発動なんだけど、それ知らない相手なら口塞いじやえばそれで終わる、とかさ。その辺で対応も変わってくつから」

「ああ、成程ね。いやしかし、結構考えてるね。僕としては孤島行きの船に押し込めてさようならが一番かなと考えてたくらいだよ。どうやってというのはまだ思案中だが」

「ああ、それもいい……でもそれもある程度自由奪ってからにしないと無理なんじゃねえの？」

「そうなんだよ。そこで止まっちゃうんだよね。魔法主体の奴は猿轡でもなんでも噛ましておくとして、他だよねえ」

「普通にHP削ったところで、自然回復したら戻るしなあ。関節外

しておく？ ……それとも……」

自然回復、というのは座る、寝る等の非戦闘行動、非臨戦待機行動時に発生するHP/SP回復を指す。

自然回復には其々にHPは体力値、SPは知力値に依存し、その数値が高ければ高いほど回復力も高い。

「ああ、肉体言語だね。因みに私はインドア派だね。そっち系の素養はないよ」

「普通にサブミッションって言えば……」

なんとも前途多難なことだ。

十章はミルドサレムにてクエスト進行が始まる。

そちらも気になるし、その他の街も気にしなければならない。

問題は山済み、其の上命は一つきり。

「八章を進める前に、あのお嬢さんにも…話さない訳にはいかないしね」

そんな状況に変わってしまった中で、メインクエストを進めて街を歩き回るといふことは、そういう事だと知らなければまずいだろう。

危機感もなくはしゃぎ回ればどうなるかなど考えるまでも無い。

ここで引くならそれも良し。

それでも進むなら

「もし、カーリンが降りるとしたら。信士、君はどうするんだい？」

「そうだったらそうだったで構わないよ。俺は、一人になったとし

ても」

それでも先へ進むために。

其の途中で、野垂れ死ぬことになろうとも。

あの時の自分を救ってくれ、それからも自分を受け入れていた。

『山田 信士』の名で呼ばれ。

『山田 信士』で居られた世界。

その世界の物語を見届けることができるというなら。

その過程がどれほど過酷だろうが、ここで足を止めるつもりは無い。  
い。

「なら私も共に行こう。十八章には二人でという物がある。そこまでも、そこからの知識も必要だろう。」

それに……私にも理由ができたのでね。ここで降りるわけにはいかないのだよ」

それが、昨夜の遅い帰宅に関係するものなのか。

それはわからないし、探ろうとも思わないが。

カーリンが降りるとなれば、ウサミもきつと降りるだろう。

この男と二人旅というのは、疲れるような気もするが、それもきつと悪くないだろう。

そんな感慨に似た気持ちを振り払うように、ふと思いついたことを声に出す。

「あいつら、遅いよな？ どうすっか。どうせメッセージっての見

つければここに用も無いし、帰るだけってんならこっちから向かっておく？」

「心配性だねえ。まあ、言ってることは尤もだ、追いかけてようか」

二人が壁に沿って歩き始める。

その足が三度土を踏みしめた後。

後にした城門の開く音に、振り返って見ると、その大きな扉が開き始めていた。

ギキイ、ギキイという異音に、前を歩く姉が歩く速度を緩めこちらへ顔を向ける。

あの声は『羽目玉』だね、と呟き臨戦態勢へと入っていく。

羽目玉というのはここに一番多いらしいモンスターと聞いた。

攻撃力は低く、防御力も然程高くはない。

が、その移動速度の速さと数の多さ故に魔法主体のプレイヤーには厳しい相手らしい。

ずっと左手にルナ・ボウを取り出す。

弦の張られていないそれが、淡く光を放ちながら、それに薄く緑色の弦を現し始める。

姉は両手に剣と言うにはやや短めの、短剣というよりはやや大きいそれを握り締め、それから一息に走り始めると、その移動速度で

距離を詰め始めた。

速い

と思うと同時、出遅れたことに慌てて後を追いかけると、そこには三匹の羽目玉と、それを同時に相手取る姉の姿に、追いついたと同時に弓を構える。

弦に手を触れると同時現われた魔力の矢に、凄じ便利だと目を瞠り驚くと慌てて頭を振り、次いで込上げた不安、自分に弓術の経験などないが大丈夫なのかという思案が脳裏に過ぎる。

それでも練習あるのみと狙いをつけるべく構えて見ると。

赤いマーカールの様な物が視界に映る。

これはひよつとして？ と思いつつ、それを人の頭程の大きさを持つ羽目玉の一匹に照準を合わせ、右手を引き絞ると同時その力を解放する。

カツ、という小気味良い音が鳴ったのは先程マーカールが見えた位置。

吸い込まれるように疾った矢は羽目玉の体を穿ち、続けて放たれたもう一本の矢に次いで、姉の双剣による一撃の下、小さな断末魔を一度響かせその姿を霧散させた。

「カーリン。少し走り回ってみるからー、動いてる的に当てられるか試しておこーかー」

その後二匹目をサクリと切り裂き、残るは一匹の羽目玉の体当たりを、ひよいひよいと交わしながら姉が叫んでいた。

それにりょーかいと返事をする、姉は左に飛んでいた。

速い、と視線の先から簡単に姿を消す姉を目で追うと、ややその速度に遅れつつも羽目玉もまたかなりの速度で追隨していた。

狙う、放つ、外れる。狙う、放つ、外れる。狙う、放つ、外れる。狙う、放つ、外れる。  
……あ、かすった。

幾度となく外れる攻撃に、羽目玉の行動を追うのではなく姉の動きを予測するべきという方向に切り替える。

右に左に奥に手前にと動き回る姉の姿に、それをやや遅れて追い回す羽目玉。

その姉が左に飛び、それを追いつがる羽目玉にくるりときびすを返すとその脇をすれ違つよう移動方向を真逆に変える。

その瞬間の数瞬の停止。

カツという手応えを示す音を耳にし、嬉しさに飛び上がって喜ぶ。

気が付くと目前まで迫っていた羽目玉、の体には剣が生えており。

断末魔に続いて霧散を始める羽目玉の奥。現われた苦笑する姉の表情に、気まぎれに笑みを浮かべ、笑って過ごそうと考えて漏れた声は、えへへというやや乾いた物だった。

それから聞こえた相変わらずだねえという呟きも、先程の嬉しさが消えてないせいか、肩を落とすことなく聞くことができた。

「焚き火跡ってこれかなー？」

暫く同じように遭遇する羽目玉を武器を変えてみたり技能を試してみたり、其の合間の空白にのんびり話しをしながらゆっくりと進んで居ると。

城壁の切れ目が見え始めたころ、漸くと言いたげに重い息を吐き出すと、周辺に存在するとされるメッセージを探そうと二人はやや距離を離してその周辺へと歩き始めた。

こうしてこちらの世界の住人となってみると、この焚き火跡というものも結構度胸のある行動だなあ、と益体も無いことを考えつつ、



それでも視線だけは探すべき何かを求めてキヨロリキヨロリと動き回る。

それからもあちらこちらと探してみるも、なかなか見つかることのないそのメッセージに、せめてヒントぐらいはあってもいいのでは？ と焚き火跡をもう一度調べてみると

”木の根元”

と小さな文字を見つけ、あつたんだ、と自分の見落としに苦笑する。

「お姉ちゃん！ こつちこつち！ これだと思うー」

そんな時に掛けられた声に、妹の姿を求めて巡った視線が止まった場所は。

そこから少しはなれた一本の木の根元。

言いよの無い疲労感を覚えながら側まで歩いていく。そこにあつたメッセージを見、きつとそれで大丈夫だろうと、ならば早速戻ろうかと話し、残して来た二人の居る城門のほうへと足を向け、

カチン、カチン

不意に聞こえた其の音に、何処かで聞いた覚えの在る、それでいて最大限の警報が鳴るような錯覚に囚われ、ゆっくりと視線を動かしてそれを認めて浮かぶ思考は

何故こんな所にあんなやつが？

「お姉ちゃん、あの、あれがデユラハンとかいうモンスター？」

其の細く不安で震える声にハッと頭を振ると、そうだよねと尋ねるような、確認するような表情で突如現れたそれを見つめる妹の姿が映る。

「いや、デュラハンはあるな深紅の鎧姿じゃないし、怨嗟の声を上げて歩いてるからね。」

あれは、『レイジー』という奴なんだが……」

しかし、何故……

あれは城内のモンスターのはずだ  
はずなのだ

従来ならば

世界が変わり、常識が変わった今

魔王城の中は、魔王城は一体どうなっていると云うのだろうか？

## 02（後書き）

「しかし……ズー先生の通信講座、無駄な位の数が……おや？　これは……『理不尽な暴力 耐性講座』だと？　資料……銀貨二枚……ゴクリ」

数日後

「いやあ、やつちゃったね！　送っちゃったね資料請求！　届くの早いね！　流石ズー先生だね！

えーと、何々、先ずは心得を心に刻み込む、か」

『理不尽な暴力に対して必要なものはなにか。諦める。受け入れる。そして現実逃避だ』

「……ここは、勇気とか覚悟とか、挫けない心とか、そんなのじゃないの……お？　そう思っていた人は？」

『そんなものがなんになる！　そんな役にもたたんもの、犬にでも食わせておけ！』

「そうか……諦める。受け入れる。現実逃避……。こうしてみると、いい響きだね。胸と胃が痛くなる」

『最初の内は辛いだろう。慣れれば其の痛みも消える』

「そう、なんだ。……こんな俺でも生きていていいのかな」

『これに応募する人は、きっとここで弱気になるだろう。だが聞いておいて欲しい。』

いいか、その理不尽な暴力つてのは、耐えられる奴は少ない。お前が消えたら、それが何処に向かうと思う？　お前の死体が跡形をなくするのは確定だとして、その次は何処へ向かうのか』

「跡形も……確定……何処へ……何処へ向かつちゃうの？」

『獲物はそこかと追い回し、死後の世界、死後転生が在った先でも追われまくる』

「……安寧の地は、無いのですね」

『それが運命。だからこそその心得であり、勇気ある戦士に送るべき

言葉である』

「はい、ズー先生、いや師匠！ いやマイロード！」

『とまあ気休めになることを書いておいたので、後はがんばってください。強く生きてください』

「……………」

城内の、という声にカーリンの息を呑む音が聞こえる。

魔王城Ⅱ上位者パーティーでも死と隣り合わせという噂でしか、足を踏み入れたことの無い人にはそこに存在するモンスターの強さを推測することが出来ない。

妹の反応を見る限り城内に入ったことはなく、デュラハンも、レイジーすら見たことがないということだろう。

あんな武器の宝庫に勿体無いとは思うものの、今はそんなことを考える暇は無い。

深紅の鎧姿のそれ、レイジーはまだ此方を認識していないのか、カチン、カチンと歩く度に微かな音を耳に届けるだけで、徘徊するように、しかし此方との距離をゆっくりと詰める。

突如のイレギュラーな事態に逃げるべきか？ という思考が擡げらる。

自身は獣人のハーフという種族であり、その特性としての俊敏値のボーナス、その他にも移動速度に対する恩恵もある為、一人であれば余裕があると考ええる。

しかし。

怯えるように瞳を揺らすカーリンに、それに冷静に対処して行動することが出来るだろうか？

考える。

逃げを打って一度躓き、そこから戦闘となった場合を。

戦闘準備を十全とした後、奇襲を持って先頭を開始した後を。

「カーリン。私が先に出る。ターゲットを取り、その後レイジーの

HPを七割まで削る。

そうしたらあいつは両手剣技能『閃武』を使ってくる」

片手剣、両手剣技能の一つ、『閃武』

上位技能の一つであり、攻撃速度を一定時間上昇させる技能である。

ゴクリ、と喉が鳴る音と共に、それでも緩く頷いた。

「そこまでいったら、カーリンは『シャイニング・ショット』を三回、其の間に私も攻撃を加え続ければ」

ガチャン、ガチャン

という音に迫る気配が速度を上げて距離を詰め始めるのを、次第に近く大きく聞こえ始めるその音量から実感させられる。

話を打ち切り即座に駆ける。

走り出し、迫る巨体が出迎えるのはその手に握る巨大なクレイモア。

全長二・五メートルはあろうかというその鎧姿に、其の中に納まってあるべき姿は何処にも無い。

空洞、に見えるそこには、ぞわりと黒い煙が漂うように揺らぐだけ。

まるで見えない糸に繰られる人形のような動きで振り上げられたその巨剣は、それだけで人間の身長ほどもあり、必殺という名が似合いそうな威容を誇るそれは、振り下ろされるだけで鳥肌が出てくる。

あれはゲーム時代からある、データ上だけの攻撃だ

と、引けそうになる腰を深く落とし、一息に前進をすべく両足に

力を籠めると、ふつと短く息を吐くと同時両の手に持つ愛用の双剣『双竜・天地』を、すれ違い様に深紅の鎧に叩き込む。

いける、と自信を取り戻すと、先ずはHPの三割を貰おうと双剣を持つ手に力を籠め、踵を返し駆け出した。

剣戟を潜り、着実に切りつけられたレイジーの動きが数瞬止まる。そして其の手に握られるクレイモアが淡い光を放ったその後、其れまでの動きが嘘であったかの様に鋭く多彩な動きを見せ始める。はじまった、という思いを口には出さず、グツと歯を食いしばると意識を切り替える。

獣人という種族は体力値と知力値の伸びが悪い。

とはいえ近接戦闘を主体とする種族である為、エルフのそれよりは高いとはいえ。

最高峰の俊敏ボーナスを誇るその機動性で戦うことを旨とするだけに、重装な防具を捨て軽装を好む故に、強力な一撃で受けるダメージは大きい。

そして知力値の伸びが悪いということは最大SP値も低いということになる。

その俊敏な動きと其れによる手数で押し、決め時を見極め技能を使う。

それが獣人種の基本的な戦闘スタイルである。

一度のミスが招く結果は大きい。

大きいけれど、致命的ではない。が、今は一撃こそが致命的だと考えて動くべきだ。

それを意識し、しかし怯むことなく果敢に迫り、正確に、確実に、それでいて明確に相手のHPを削っていく。

一閃、すれ違つと同時に振り向くと、その深紅の巨体は別方向からの攻撃にグラリと体を大きく揺らす。

闇属性に類するレイジーに、カーリンの光属性魔法『シャイニング・シヨット』が命中する。

光魔法に攻撃手段は少なく、其上攻撃力自体もそれほど高いものは無い。

とはいえ、闇属性のモンスターは火、水、風、地魔法に対する耐性が高い。

唯一とあっていい有効属性が光であり、その効果も二倍と軽視できない威力上昇である。

其の上で純エルフという知力ボーナス値が最高峰を誇る種族が使うと、其の効果の程はいうまでも無い物となる。

期待通りの援護に自分も負けては居られないと、ターゲットが移らない様即座に駆ける。

焦らなければ問題ない、このまま押せば三度目のシャイニング・シヨットで戦闘は終了するだろう。

そうして踏み出された足は、ふとした違和感を感じて躊躇う様に速度を落とす。

何が気になった？ と思うも特に自身の体に違和感はない。

成らばと視線を移した先、その場で停止しているレイジーの巨体を捉える。

停止？

と考えた直後、其の足元に浮かぶ光に目を瞠る。

現れているそれは、淡く、闇色の影を浮かべる、円形に形取る

魔法円！

しまった！ と自分の失策を認めると同時、それが何で在るのかに思考が加速する。



思い出せ

レイジーが持つ闇魔法技能がどんな物なのか

思い出せ

魔王城へと狩りに出向いた際、注意すべき点はなんであったのかを

思い出せ

これから何が起こり、それにどう対処すればいいのかを

ぞわりと吹き上がる闇色の何かが、自身に向けて迫り始める。

迫るそれを睨み付けながら、ようやく全てを思い出す。

が、既にレイジーにより放たれたそれに捕らえられた後

「カーリン！走って逃げて！」

視界が暗転するのを感じ、浮かぶ焦燥を吐き出すように力の限りに叫んでいた。

徐々に開かれた城門の、その隙間が人の通れる程に開いた時。

ひよっこりと覗かせた姿を見て、それがモンスターで無いことに詰めていた息を吐き出す。

それに連動するようにピクリと揺れた獣耳に、此方に気がついたのを示す様に興味深げな視線が向けられた。

そこに新たに現れたのは、一人の小柄な女性の姿。

「こんな所に人が来るとは……私だけかと思っていたが物好きな者が他にも居たのだな」

そう言い、嬉しそうに近寄る其の姿に、其の手に在る存在に、目の前の人物がどんな人であるのかを、名前を聞くまでもなく悟られる。

特殊武器カタール その最上位に在る『断罪の執行者』

それを持つ人物は一人しか知られておらず、また其の人物を指し示す、揶揄するような、畏敬を示すような俗称が

『戦闘狂』

純獣人にして現在最高レベルと称される、レベル百四の頂点プレイヤーである。

転生後の上限レベルが目下百五までなのでは？と噂される中、そこに迫る人間の一人であり、雲の上の存在である人物の登場に、どうすべきかという判断が瞬時に下せない。

そんな気後れし、戸惑い焦る信士とリーの二人を尻目に、当の人物はというと嬉しそうに笑顔を浮かべて近づいてくる。

構えるべきかと考えるも、そうしたところで勝ち目があるのか、逃げ切れる確率は？ と思考が一部で計算を始めるのだが……。目の前の人物の無警戒ぶりに、こちらが先に刺激するのもどうかという意識が強く浮かぶ。

「いやあっはっはっは。そんなに構えなくてもいいんじゃないかね？ 私としてはもっとフレンドリーに『いい天気ですね』の一言く

らい欲しいものだが、おつとそう言えばまだ名乗っていなかったか。私の名は『ティラミス』と言う。聞いたことはないかい？ ほら道場破りの獣人が等の噂は？」

スタスタと距離を詰める中、楽しそうに、嬉しそうにニコニコと笑い休む暇なく話し続ける。

「……なあ、ティラミスって人はあんな性格の人だったのか？ てかなんであんな嬉しそうなんだ？」

「いや、私ができる訳ないだろう？ 次元からして違う存在だよ。なんでこんな超有名人が……」

「……なあ、なんであんな探るような目で口の端曲げ始めてんだ？ なんであんな手をわきわきさせてるんだ？」

「いや、私ができる訳ないだろう？ きつと狩り疲れて手が凝ってるんだよ」

じつとりと手に汗を感じ始め、まるで捕食者に睨まれた被食者のようだと感じ、その歩みを戦々恐々と眺めながら立ち尽くすことしか出来ず。

「あの噂が広まってくれたお陰で色々楽しかったのだが、ここ最近ぱったりだね。

沈む気持ちで家に帰ってみると、我が恩師たる人物の家宅損害を目撃してしまって。

聞いてみると其の相手というのは恐ろしく強く、まだ近くで暴れているのではと言っじゃないか！

ならば是非お手合 成敗せねばと各地を巡りここまで来たもの

の……聞いているかい？」

はいっ！ と背筋を伸ばしてびしりと直立不動すると、ぱちくりと瞬きした後、そんな自分達が面白かったのか、ふはははと声量を増した笑いを零す。

それにえへ、えへへへと追従するように情けない笑い声を被せると、ようやく笑いを収めた相手は此方へ名前を尋ねてきた。

「あ、はあ。ええと、俺の方は山田 信士で、こっちのとつぱいのがREPOBITANNつてのです」

とつぱいのつて、と小声で愚痴を零すのを無視し、尋ねられたことを答える。

と。

すごく嫌な予感のする笑みを浮かべ、更に嬉しそうに目を細め始める。

「どこかで耳にしたことがある……ああ。尋ねるが、山田というのはあの「違いま」ええその通りです」お前何人のこと売ってんだよ……」

切羽詰った表情で否定する自分の声に、しれっと割り込み肯定を告げ、それに満足したようなニヤリとした笑みを浮かべて嫌な感じに眺め始める其の人物に。

ああ、なんだろう、何か終わった気がする。

そんなことを考えながら、遠く広がる青空を眺めた。

「とりあえず、自己紹介も終わったことですし。改めましてREP  
OBITANNと申します。

あ、気軽にリーさんでも、リーお兄ちゃんでも大丈夫です。後者と問題ないです」

そう口上を述べて、「ふむ、ではリーお兄ちゃん」と言われ悶えている何かを足蹴に。

先程の話に出た恐ろしく強いというそれには出会えていないという話が気になり尋ねてみた。

もしかしたら近くにいるのだと思うと、やはり少し腰が引けてしまっ。

話された内容は、その恩人の住む街周辺から始まり、気がついたら魔王城の中に足が伸びていたというちょっとした大冒険で。

そこに列挙された単語には、其の人となりがありありと示す言葉がふんだんに、盛大に、所狭しと並べ立てられていたが、其の合間にふと紛れ込むように紡がれた単語に目の色が変わり詰め寄るように問い掛ける。

「配置が、変わっている？」

「ん？ ああ、そうなんだよ。魔王城にはちよくちよく暇潰しに一人で来ているのだが、今までとはどこか違うと感じていたのだよ。そこで、何が？ と考えてみて漸く気がついたのだがね。」

城内のモンスターが外に居たり、違うダンジョンのボスが城内に居た 「ぐええ」「」

心臓が焦燥からか早鐘を打つように鼓動を早め。

何かを踏んだ気もするが、それすら気に掛ける暇もなく。

何故考えなかったのか！

以前の常識は、全て崩壊しているのだと！

何故もつと早く動かなかったのか  
帰りの遅さに気がついていながら

走り、其の姿が無事に其処に在ってくれと祈り  
それと同時に、その場外で見かけたというモンスターがどんなもの  
だったのか聞いてくるべきだったかと考え、どこにそんな時間が！  
とその思考を吐き捨てる。

何が居ようと構わない。

そこに魔王が居ようと。

願うように、請うように。焦る気持ちだけが滑る様に先を駆け。  
それでも早くなることのない足にただ自分の無力さに失望すら感  
じた。

俺の所為でこれ以上

「サタン様、お話して置きたいことが。実は少しここを離れることになりました」

「へ？ そのなの？ 何かあったっけ？ まあうん了解。で、どこ行くの？」

「はい、実家に帰らせていただこうと」

「実家？ ……え？ 実家？ え、っっていうか…な、何？ 実家あるの？ というかどんな理由で？」

「はい、先日ズー殿と少々賭けをしまして……」

「うわこの流れで聞きたくない名前出てきたね……それはどんな？」

「サタン様の浪費癖を抑えることができているのか？ と。私は勿論サタン様はそんな簡単に誘惑に堕ちることは無い、ときっぱりとはっきりと大丈夫だと申したのです。が……」

「え、あ、うん。ありがとう……。そ、そそそれで、その、続きを窺っても？」

「成らば賭けをしてみましよう。ドンと来いですという私に揭示された内容は『簡単なことです。このズー先生の通信教育のパンフを目に付くところに置いてもらえれば』と。」

其れを聞いて私は鼻で笑ったものですよ。こんな物に手を伸ばすサタン様では無いと」

「……………」

「ええ、即答しましたよ。すぐにそれを寄越しなさいと。嬉々として作成を始めると、ものの数秒でそれを作り上げ渡されました。」

ですから、私も言ってやったものです。もしこの賭けが私の勝利となった場合は」

「ば、場合は？」

「再び魔王城をサタン様の手に、と」



「……………」

「大仰に頷き了承したのを確認して、私は此方へと戻り、早速とばかりにそれを目に付くところに置きました。より目に付きやすいように慣れない小芝居までして、です」

「え、演技には、見えなかったなあ、ななーんてヒイイツ！」

「という訳で、長い間お世話になりました。私の助力等何一つ役に立たなかったようです……ええ、痛感させられた思いでした。それでは失礼します」

「え、あの、急にっていうか、あ悪いの僕なんだけど、僕なんだろうけど……あ、そんな怖い顔で、あはいすいません怖くないです。いやそうじゃなくて、あちよつと行かないで！ リヴィアさん、様！戻ってきて！」

おねが痛っ！ あ、やめっ！ あ嘘ですいくらでも、あ、そんな目で、見てもいいから行かないでー！！！」

## 04 (前書き)

PVとユニーク数を見て笑っちゃいました。  
膝が。

続きを出来るだけ早めにお届けできるよう努力いたします、ええ。  
今後残酷描写になるかもな流れで、さてどうしたものかというの  
もあり。

後書きと言う名の本編というかあちらも続けたものかと悩んでみ  
たり…。

「随分とまあ…慌てて駆け出したが、何があつたのか聞いたら答えて貰えるのだろうか？」

瞬時に変わった空気にぽかーんとなるが、それでも足元に転がっている何かを視界に入れるとそんな声を呆れたような、驚いたような表情でティラミスは口を開いた。

しかし、話しかけられても依然動かぬそれに、おや？ と思い「大丈夫か？ リーお兄ちゃん」と声をかけてみるとあら不思議。驚く速さで平時の余裕ある態度を取り戻していた。

「実は私達はメインクエストでここを訪れていたのだがね。二人ほど戦闘に不慣れというか、この先を考えて『この世界での戦闘』に早く慣れて貰うべく、ある程度技能規制を付けて送り出したんだが…城内のモンスターが出てきているというのは、何分知らなかったのですね」

ふーん、と興味なさそうな相槌に、興味が向く方向が判り易いなと苦笑する。

「てことは……リーお兄ちゃんを捨てて消えるということは無いんだね？ あれ、何そのドキイって顔？ もしかして追いかけたほうがいいのか？ 山田殿には逃げられたくないんだが」

「追いかける、というのは賛成ですが隠れてこっそりと、という条件を付けても？」

何とも無いように頷くと同時、即座に駆けた其の姿は、あっとい

う間に遠のいて行き。

お兄ちゃん、か。結構いい、グツと来るねえ、等と頬を緩めつつ。ならば頼れるお兄さんも頑張らないといけないな、と迫り始めたデュラハンに顔を向けた。

真っ黒に塗りたくられたキャンパスに、一人ポツンと放り込まれたように。

視界に映る全てが黒く暗く光の無い世界に在って、自分の姿だけがくつきりと認識できる。

闇魔法技能 『ダークネス』

捉われた対象を二十秒間視界遮断の状態異常にさせる。

この状態になるまで思い出せなかった。

ここまで追い込まれてようやく思い出した。

足をつき立っている場所は先程の場所だろう。

視界が変わっただけであり、二十秒経過すればその場に立ち尽くすだけの自分に戻る。

だが、このまま立ち尽くすだけでいれば、レイジーの攻撃により死ぬだけなのは目に見えている。

ならば、と逃げ動くにしてもカーリンが何処に居るかわからない。

下手に動きそちらに誘導するハメになるのだけは絶対に避けたい。

ここまで来て自分の失態を考え続けるわけにはいかない。

これから出来ることを考えないといけない。

手は無いか、打てる、打つべき手段は何かないか？

何も浮かばない、何も浮かばない、何をすべきかわからない。

ガチャン

聞こえるレイジーの足音も、方向が全く分らない為、どちらに動けば避けられるのか分らない。

避けられる？ いや、そればかり考えるべきではない、と手に持つ双剣『双竜・天地』を装備解除し、幅広の重量感を感じさせる両手剣『デIFエンダー』を取り出す。

装備者の移動速度を半減させる代わりに防御力を大幅に引き上げるという変わった武器である。

攻撃力も低い物では無いが、HPの高い人物意外は所持している人など居ないだろう。

二十秒。

デIFエンダーを取り出した所で気休めにしかならないだろう。

『閃武』発動前なら耐えられたかもしれない。

思考が巡る。カラカラと空を切る音と共に。

ガチャン

何か、耐えるための一手ではなく、打開するための一手は

「破棄、シャイニング・ショット！」

聞こえた声に微かな安堵を覚え、今自分は何を考えたと自分を激しく罵倒した。

『まあ、ルナ・ボウもあるし、光魔法はー、本当は禁止のがいいだろうけど一応三回まで使っていていいってことで。つってもウサミが居るしそこまで心配ないだろうけど、まあそんな感じで慣らしていこう』

信頼を受けている。

妹からも、彼からも。それが何だこの無様な姿は！

向かわせない。決して妹の方には向かわせてやらない。

逃げると言ってもそれを聞かず、こんな姉を救おうとする大切な大切な私の妹の下へだけは。

『ディフェンダー』を再びアイテムポーチに収納すると、特殊武器の一つを取り出す。

多節根 『白蛇』 六節からなる中距離対応武器。火力は低いもののその攻撃範囲は広い。

「円舞！」

多節根技能の一つ『円舞』を、腹の其処からの大音声で使用選択を告げると同時、手に持つ『白蛇』は意思を持ち始めたかのようにヒュン、と風を切り周囲の全てに踊りかからんと伸長した後円を描く。

それは長鞭を振り回すように素早く、綺麗な円運動を二度行い、その範囲内に在る存在へと牙を向けた。

未だ暗闇の世界の中、後どれくらいと考えるのももどかしく、次の一手へ思考を巡らせる。

ゲーム時代、こんな時どうしていた？

あの時代は死んでも大聖堂で復活していた。

ならばそんなことは考えても無駄だ。手持ちの武器で考えるべきだ。

多節根を継続使用？ 距離伸張攻撃は技能のみだ。相手の居る場所が解らないなら打つ手はない。

まだもう一度が残っているカーリンの魔法使用を考えると 妹が今から逃げてくれるとは考えられない。きつとまた同じ行動になるだろう 再び妹が魔法を使い、レイジーのターゲットが移ったとき、再びその対象を奪う為に『円舞』を使う為のSPは残しておかなければならない。

ここに来るまでに技能の使用感をと試した回数が多すぎたんだと、残存SPを思い悔やむ。

ごめんねカーリン、こんな頼りない姉で。

それでも私は姉としてこれから

ガチャン

そう、これからもだ。

この先のことも考えての二人だけなのだ。

たとえ『今』を乗り越えても、この『先』を生き抜けなければならぬ。

何が在る？

私の手には何がある？

「破棄、シャイニング・ショット！」

っ！

先程の『円舞』からややの時間経過を持って。再びカーリンから援護が入る。

『シャイニング・ショット』のクールタイムが終了したから？

いやそれにしては間があった。

つまり、レイジーの射程に私が捉えられたのだろう。

ならば、一拍おいた後に

「円舞！」

助けられている、という自覚はある。これ以上ない程に。

だが、それもこれまでだ。

未だ動かぬ私の姿に、カーリンも異変を感じて居るんだろう。何が？ と。大丈夫なのか？ と。

体感ではとづくに二十秒どころか数分の経過を感じるのに、未だ開けない視界に自分の未熟ぶりを悔やむ。これが信士だったなら、と。

いや、それは考えるな、考えるべきは先のことだ。

これから、メインクエストを進めるに当たり、いやこの世界で生きていく限り避けることの出来ないだろう、ハルムーンの騒動に…  
…対人をも視野に入れて。

そう、そうだ。その為に試したいと考えていたものがあつたのを忘れていた。

デュラハンと遭遇したら試してみたい、と持ってきたものを。

ガチャン

すっと思考が落ち着くを感じる。

こうしてみると今はまだ十八秒くらいかな？ とどこか冷静に考



える自分がいる。

ならば、もうすぐだ。それからが自分の仕事だと。

多節根をアイテムポーチに戻すと、二振りの小ぶりな短剣を取り出す。

特殊武器でもなく、短剣の二刀流でもない。特殊な部類ではあるが、その双剣を。

ガチャン

もう、そろそろ視界は明ける。

その時目の前にはレイジーの姿があるだろう。もしかしたら背後だろうか？

先程までの自分はなんだったんだろうな、と自嘲気味に苦笑しつつ、きつとそれが本当の自分だったのかもしれないと、少し情けない気持ちになりはじめ。

すうっと視界に光が戻り始めるのを認識しながら、さて始めようと探すべき姿を求め視線を巡らせた。

遠めに見え始めたその鎧騎士の姿に、浮かぶ深紅の色彩を視認し

クソツと悪態をつきながら、間に合ってくれと祈り、速度を落とすことなく駆け続けた。

レイジーだ。間違いないくあそこにいるのはレイジーだ。  
何処に現れた？

ウサミの側か？ それならまだ大丈夫か？ 楽観的に考えるな！  
カーリンの背後から？ クソツ！

レイジーだ。『ダークネス』を使われた時点できっと詰む。  
こんな場所に居ると考えて居なかった。  
対策など一つもしていない。

唯一の対抗手段として、カーリンの『キュア・サークル』くらいか？  
あれだとして使用術者が移動不可になるうえ発動までも待機時間がある。

其の上効果範囲も考えれば、むしろ其の状況になっている時点でアウトだ。

間に合え！ 間に合え！

逸る気持ちを抑えることも出来ずにただただ現状がどうなっているのかの最悪な結末だけが脳裏をよぎる。

そうして見えた光景に、動きを見せる姿は三つあり。

間に合ったことに安堵を覚えつつも、ならば早く駆けつけなければと速度の落ちていた足を振り上げ。

「まあまあそんなに慌てなくてもいいじゃないか。どうしたんだいそんなに慌てて？ 漸く追いついたと思ってても、また走り出そうとするのは酷いんじゃないかい？」

力強く肩を？まれ、空を切る足に体勢を崩し、寸での所で持ち直した体を其の声の主の居るほうへと振り向ける。

「おや？ ずいぶんと怖い顔をしてるね？ 何をそんなに怯えているんだい？ そんなに私が怖いのか？ これでも結構可愛い容姿だと自負してるのだがね？」

何を言つてと掴みかかろうとした手は、向けられた視線のどこか真剣さにぴたりと止まった。

止まって、しまった。

「落ち着いたかい？ まあそのまま掴みかかってくれてもそれはそれで僥倖、此方の望み通りでもあったのだが……まあ、待ちたまえよ」

そういい、ついと視線を移した先には、ウサミへと歩み寄るレイジーの姿。

絵図的に見ても、そんなレイジーに対し微動だにしていないウサミからは『ダークネス』に捉われているのが伺える。

「やはり、捨ててないね。何かやる気だ……何を？ 短剣？ いやあれは双剣か？ ……珍妙な、この場で『ブレイカー』を？ 狙いは何を？ そのままの意味で？ 何のために……」

微かに聞こえる其の声は、思考そのままの漏れ出しただけの声なのだろう。

ウサミの姿から目を放せないだけに、其の表情までは窺えないが、きつと何かを探るような、それでいてあの嫌な雰囲気を感じさせる笑顔を浮かべているのだろう。

「頼みたい。俺もあいつが何を考えて居るかはわからん。だが、もしその考えが通りそうになかったら……」

即座に助けてください、と。

「わかっている。それを考えた上でご主人様を止めた。間に合う距離で、この場所で」

これ以上無いであろう人物に、助勢の願いを聞きいれて貰い、安堵に息を吐こうとして。

な、なんとといったこいつう?! とうっかり視線を移してしまつた其の先には。

ああ、やっぱりあの目を背けたくなるほど嫌になる、極上の笑みを浮かべていた。

左!

視界に捉えると同時振り下ろされ始めているクレイモアを見、僅かに体をずらすとそのリーチの無い武器をクレイモアと深紅の鎧へと導く。

双剣 『ブレイカー』 正式にはソード&メイル・ブレイカー

低確率で対象の武器と防具を破壊する。

武器破壊確率は攻撃命中時七%の確率で、防具破壊確率は攻撃命中時八%の確率で。

三度の『シャイニング・シヨット』と、これまでに自分の攻撃により蓄積されたダメージで、移動速度こそ衰えてはいるが、『閃武』によって増している攻撃速度は依然変わらず。

振り下ろされたクレイモアがギャリつと鳴ると、そのまま横に切り払われる。

その流れる方向から逃げるように先へと動き、振り切られたクレイモアへと再び一撃当てる。

そのままに飛び、一度距離を開けると、着地と同時にまた飛び込む。振りぬかれたクレイモアが引き戻され、そのまま突き出されたそれを着地後身を捻ってかわすと同時、その動きに合わせて弧を描く軌道に乗せて振られる双剣をクレイモアへと叩き込む。

ギャリンという音と共に、その凶暴な顎が漸くその本性をようやく曝し出した。

それを確認するや即座に『ブレイカー』をポーチに戻すと、再び愛用武器の一つ『双竜・天地』を取り出した。

これから必要なことは簡単だ。確認したいことは確認できた。後はレイジーに残されたHPを淡々と削りつくすだけの作業。根元から消失したクレイモアを、オモチャに喜ぶ赤子のようにただ振り回すだけの存在などに、これ以上何ができるといいのか。

予期せぬ展開にはなつたけれど、出会えて良かったと今は思う。

ギャリン

ゲーム時代と同じだと考え、緩んでいた頭のねじに気づかせてくれてありがとう。

ギャリン

常識が変わってしまったことを、ここまで明確に体験させてくれてありがとう。

ギャリン

自分に出来ることを、これからの自分に出来る事を教えてくれて  
ありがとう。

ギャギャン！

終わった、と思うと同時に、意識が切り替わるような空気を感じ、  
それによって運び込まれた走り寄る小さな、それでいて明確なその  
音に、どんな言葉で謝ればいいかな、と視線の先で泣きそうに顔を  
歪める妹の姿に、双剣を腰の鞘に戻して軽く両手を広げると、  
ぼすん、という暖かな衝撃に、小さく、感慨深く、それでいてはっ  
きりと心配かけてごめんなさい、とつぶやいた。

終わってみると、二人共に無傷であった。

#### 04 (後書き)

カリカリカリ

「あー、疲れた。そろそろ晩御飯の時間かな。ねえリヴィ 何作ろうかな」

カリカリカリ

「あれ？この書類間違ってるような…ねえここ もう一回見直すか」

カリカリカリ

「……………」

カリカリ

「…………グスツ」

「もうすぐ、二週間か。はは、なんだろうなあ、この空虚さは」

ガチャ スタスタスタ ガラガラガラ スタスタスタ

「あ、御気にせずに続けてください。すこし盗さ 機材の電池の交換しに來ただけです」

スタスタ ガチャ

「…………え？ いやいや何？ あれ？ 今の…え？ ズーだよね？ ……え？」

ガチャ

「あ、先ほど言い忘れました。強く、遅しく生きてください。影ながら応援いたします」

「いや、あの…え？ 何盗撮？ え、どうということ？ 何これドツキリ？」

「いやまあ、ドツキリというよりは『ドキッ 魔王様の生態観測』と申しましようか」

「いや、いやいや、いやいやいやいやいや。え？ それ誰が得するの？」

「え？ それはもう、魔王城にて皆さん大爆笑でご覧になられていますが？」

「うへえええ！？ え？！ 何なんで？！ あっこれ今も撮られてんの！？」

「はい、バツチリです」

「何で得意顔なんだよ！！ やめようよ！ ほんともうやめてよ！！」

「まあ、期限は一ヶ月ですので、頑張ってください」

「嫌だよ！ 何、え、全部？ 今までの……え、何？ あの、全部？ 音も？」

「完備です。 抜かり在りません。 これでも私先生等と呼ばれてまして」

「そんな名称捨ててしまえ！ うわああん！ あ、見られて、あっ声も！ ぎゃああああ！」

「それではこれで失礼します。 まあ、頑張れ？（笑）」



「見事……」

正に、と横合いから零れた声に頷きかけた信士は、それまで自身がウサミとレイジーが織り成す円舞曲の観衆でもあったかのように見入っていたのを実感した。

それほどまでに、其の一言に集約されたように。

流れるように動き、予定されたように次の位置へ。

フィナーレを告げるように、レイジーのクレイモアが砕けると同時、手に握る得物を瞬時に換え、幕を引くように数合で。演者が一人、舞台を降りた。

カーテンコールを告げるように響く、小さな小さな足音が、主役を務めた少女に抱きつき、幕の下りた舞台を現実へと引き戻し始めていた。

「素晴らしい、というより…美しい、かな。あれほどの人物が居たとは…世界とは広いものだな」

美しい。

自分としても其のティラミスの言葉に全面的に同意した。

昔からも状況に応じては武器を持ち替え、場面に対応するという器用な戦闘スタイルではあったものの、それを視認するだけでここまで物になるとは思ってた居なかった。

それに、駆けつけた時の状況が状況だ。

見ただけでも視界遮断の状態異常を被っているのは解る。

その中であって。

きつと迷走した思考の中で、暗闇の効果が切れると同時に、あそこまでに華麗な動きを見せてのけた。

身震いすら感じる。

あれだけの戦闘を出来る者が、ウエポン・マニア等という言葉で、たったそれだけの言葉で表せる程に安く軽い物なのだろうか。

「……惜しむらくは、始まりから見れなかったことか。いや、これから私と」

ぎよつとして隣へ視線を転じれば、うきつきとした様子で自身の愛用の得物へと手を伸ばし始め、そこへと向かうべく足を一步前へと進めている姿がある。

ちよつとちよつとちよつと！ 待て待て待て！ いやこれヤバイヤバイ！

と即座に伸ばされた手は、肩を掴もうとして空を切り。

しかし其の先に伸びる手首をがっちりと掴むと、途端に不機嫌そうな顔を向けられた。

まるで嫌いな食べ物を目の前に出された子供のような。

あれ？ でもそういえばこの人って頂点プレイ……嫌、怯んでいられない。

「駄目です、行かせません。止めてくださいそんな嬉しそうな顔で武器に手を伸ばすの」

「な、嬉しそうにはしていないよ。見たまえこの顔を。いや何、先程素晴らしい物を見せて貰った手前是非賞賛と手合わ、んんっ！ えー、そう、賞賛と、激励？ それをしなければ」

「漏れてます。本音駄々漏れです。隠せてません、一ミクロンも」

ケチな男だねと肩を竦められるも、それ以上は抵抗する素振りは見せなかった。

それから何度も念を押すように、刷り込むように、洗脳だと言われても否定できないほどに口酸っぱく手を出さないでくださいね、戦闘ダメ絶対。と繰り返しながら。

はいはいと渋々頷くティラミスと共に、信士は二人の下へと歩き始めた。

だから、忘れてしまった。見落としてしまった。  
そしてそれは、一つの悲劇を生んだ。

噁り上げるような音が聞こえ、予想以上に妹に心配を掛けてしまったと罪悪感を覚える前に、顔を上げたカーリンの表情は、それでも懸命に笑顔を浮かべて迎えてくれていた。

もう二度と、とは考えるものの、この先を思うとその考えに暗雲が立ち込めるのが解る。

そうして意識が外に向かうと、小さくも足音と会話する声が聞こえ始める。

その音が何かと考え、時間が掛かったから迎えに来てくれたのか

と視線を移すと。

見知った姿の隣に居るのが、最近見慣れてきた背の高い男の姿ではなく。

視線が合う。

それだけで、その挑みかかるような視線に釘付けに成る。

何に？ 何を？

その視線の意味に、その理由を探しては心に不安が込上げる。

しかし、視線を外すことが出来ず、ただその距離が詰まるのを待つだけで。

「おい。最後辺りは見てたぞ。見事だったよ、本当に」

声が聞こえ、その声を聞いただけで何か安堵したように気持ちが落ち着く。

それから、聞こえた言葉のその内容に、少しこそばゆい気持ちも沸き起こる。

最後辺りは見てた……本当だろうか？ もしかしたら最初から見てたんじゃ……。

いや、大丈夫。きっと本当のことを言っただけだろう。

そう思い、視線をその顔へ向けると、やはり何故か怯んでしまっ  
そうで。

そして、次に聞こえた声に。

初めて聞くその声、その音に乗って聞こえた言葉に、驚けずには居られなかった。

「やあ、はじめまして。先程は素晴らしい物を見せて貰った。あれは見事だ。美しいと思ったほどだ。

それは私だけでなく隣の『ご主人様』も認めている。いやあれは  
実に見事。あそこまでもなると余程武器に精通「いや、ちよつと

待て、ちょっと待て待ていや今なんつった俺のこと「うん？」『ご主人様』？」

呆然とした表情で何かを確認するように会話を遮った男の声に、焦る何かを感じる。

そして響く大絶叫。

いや、何でこんなに冷静にそんなことを分析しているんだろう？  
え？ 何、『ご主人様』？ え、それってどういうこと？  
えっと、つまり…え？ ええ、と……。

纏まらない思考の中で、それでも自分が何かに驚いたように、信じられないとでもいうように。

空白に染まりつつある意識の中で、それでも自分も同じように大声で何か叫んでいたような気がした。

「いやあっはっはは。何だろうね少し目を離したと思ったら。随分とまあ面白い状況になって。

さて、一番まともそうなのは……ティラミス殿、これはどういった状況なのか尋ねても？」

一人だけ何かを堪える様に蹲ってお腹に手を当てる大変いいお顔

のその女性に声をかける。

ちよつと待つてとでもいうように伸ばされた手は、そのままの姿勢を維持するのも辛そうに小刻みに震えている。

それだけで誰が何かをしたのかという構図はわかるのだが、さてどんなことをしたのかと考えるも、其処から先へは理解が向かわなかった。

「はあゝ。いや久しぶりにここまで笑わせて貰ったよ。今日は本当にいい日になった。この出会いも何かしらの運命なのかもしれないブウ」

これは当分このままなのかな、と再び波に飲まれたティラミスの姿に、それでも、言いかけたただけのその言葉の意味を考えると、確かにいい日で、いい出会いなのかもしれない、と思った。

「えー、ごほん。いいか、二人とも。あれは俺が言えとか言ったわけじゃない。それは解るだろ？」

俺がそんなこと言うと思うか？ そんな目で見んな！ 言うわけあるか！」

たつぷり十分は魂状態で遊泳していたと思えるほどに、ようやく意識を取り戻した三人は、その場に見知った姿が居るのに気がつき、それから先程の言葉を思い浮かべ。

自然集まる視線にやや狼狽しながらも、慥然とした表情を浮かべて言葉を放った。

その仕種もどこかいい訳染みて見え、ますます嫌疑が膨らみ始める中、その会話のやりとりで先程の光景を思い出した一人が笑いだし、その会話で全てを悟った一人もそれに習った。

「成程、いやはや何がどうなつてと思つたものも、こうして蓋を開ければ納得できるものだね。それにしても、中々貴重な体験をしたんじゃないかい？ ご主人様」

「黙れ！ もともとお前が変なこと言い始めたからだろうが！ 何でそんな我慢しなさいみたいない方してんだよ！」

ちらりとアイコンタクトをするリーとティラミスは、互いに頷くと我が意を得たりと言葉を続ける。

「まあまあ、よいではないかご主人様。ここで逢つたのも何かの縁という物。これを大事にしたいという私なりの心遣い、無駄にしないで欲しいのだよ、ご主人様」

ガツデム！ マイガツ！ と叫び始めた信士を、その場に居る二人はまるで我が子を見守るように、残る二人はその悪魔的な二人に恐怖の視線を、その被害者に悲哀の視線で見守ることにした。

「屋上へ行こうぜ……久しぶりに……キレちまったよ……」

遂にという感じでゆらりと動きを見せた信士の姿に、その背後に別の誰かが居るように見えた。

リーの何かを崇める様な視線と、微かに聞き取れた「…タロウ」という言葉。

それに次いで、物凄くうれしそうな顔を浮かべ立ち上がった一人の姿。

「この展開は考えていなかったが、ああ、勿論私とその権利を貰おう。何少し運動するだけだ、余り気負わなくてもいい。いやしかし

今日は本当に嬉しい一日だね」

嬉々と信士の後を追うその姿に、リーも仕様が無いなとばかりに腰を上げて後に行く。それを見上げた後どうしようかと悩むような妹の姿に、私達も行くこうかとその手を引いて立ち上がらせると、どこまで行くのか考えながらその後が続いた。

五分も歩いたかどうかという頃、漸く歩みを止めた信士は、はっとしたように動きを止めると、あれ？　ここどこだ？　と気の抜けた声を上げていた。

「ここでいいのかい？　なら早速はじめようじゃないか、ご主人様」  
振り向き、ムキイと声を出した後、ん？　始める？　と疑問の声を寄せていた。

それで、振り向かれた後向けた視線に、移動の意味を悟ってしまった。

信士が振り向き確認するように私の隣へ、カーリンの存在がそこに在るのか確かめるように視線をめぐらせたのを。

しかし。ここまで連れて来てしまった手前、今更自分達だけこの場を離れるのもおかしいというのが解ってしまうだけに、如何すべきか悩んでしまう。

巡らす視線がカーリンの姿を越え、その向こうにあるリーへ辿り着くと、彼もまた信士の視線の先を認め、そこに示された意図を読み込んだかのように頷いていた。



「頭は醒めたかい？ 信士。なら少しお話をしようじゃないか。そうだね八章開始について、この辺で全て話し合うべきだと思うのだよ」

八章開始。

メインクエスト内の一つの章であり、商業都市 ハルムーンにて始まる章である。

その言葉に含まれる意味は、それを全て話し合おうと言う意味は。

ちらりとカーリンへ視線を向ければ、よく解ってないという表情でリーの姿を見上げていた。

前方へ視線を戻すと、信士が女性の脇を着いてくる様に示しながら此方へ歩む姿が見える。

そういえば、名前も聞いていなかったな、と思いながらもその到着を待ち、これから話す内容と、その後に思い浮かぶ展開に、さて私は妹に何と言えばいいのだろうか、それに対する思考へと意識を向け始めた。

「何と言うか、話が終わるまで待つて欲しいということらしいね。八章とか聞こえたが、それが何かはわからないが、そこまで重要なものなのかい？」

それに大仰に頷くリーは、やはりこれから話す内容が内容なため、真剣な表情を浮かべたままに何時もの無駄口すら繰り出していない。短い付き合いながらもそれだけで解ったというように座り込むその女性の姿に、自然皆がその場に腰を降ろしていた。

「済まないね。しかし大事な話でもある。確認したいことと、伝え

なければならぬこと、それに私達の今後に係わることなのでね」

そう切り出し語り始めたリーは、詳細に全てを話すのではなく、要点だけをゆつくりと、しかし重々しく響く声で話し始めた。

死者の復活は無いと。

この世界にはPKが存在するのだと。

それを生業にしている者がハルムーンを牛耳っていると。

「私と信士はそれを承知の上で、それでもクエストを進める予定でいる。カーリンとウサミツチには、この話を聞いてこれ以上無理だと思ったならここで降りてもらって構わない。いや、どちらかというが無理はして欲しくないというのが本音だね」

小刻みに震え、その話された内容の衝撃の大きさに、カーリンは声も出せず視線すら彷徨わせるようにふらり、ふらりと頭を揺らしていた。

「……今の話は、確かな物だと？」

それまでの軽薄さが消え、剣呑な気配を見せる。

「より詳しく、より詳細に。そこで何が、どのようにと、知りえるだけ全て教えてもらいましたよ」

そうか、と黙り込む姿から考えられるのは、今話された情報の内何一つ知らなかったからだろう。

「……数々の教え、感謝を。しかし、私はこのような生き方しか知らない人間でね。知った上でもう一度、厚かましくも頼みたい。一度手合わせを願っても？」

そうして向けられる視線の先は。変わることなく信士を捉え。

「……一つ、条件と。それからそこまで俺に拘る理由が聞きたいです  
ね」

「条件は何だろうと飲もう。理由か、いやなに、君がもし”あの”山田殿なのだとしたら、『ラタトウスク』と聞けば、それが何か解つてもわかるだろうか？」

ああ、と漏れたその声には、ややうんざりとした雰囲気滲み出て。

それを示すように諦めたような表情を浮かべると、慥然とした声で続きを促した。

「……聞きたくない名前が出たもんですね。ええええ、解ってますが、それで？」

「やはり……。山田殿は、あれを十分も掛けずに討伐したと」

真偽を確かめるように。

その真偽とは、今の話の内容というよりは、目の前の人物が『その山田』本人かどうかと。

「まあ、確かにあの時は焦って色々やった気はしますがね。しかし大袈裟に話が広まっただけだと思いますよ。十分掛からずって無理でしょあれ？ 普通に十分越えてたと思いますかね」

「私がそれを聞き一人で挑んだとき……倒せる気すらしなかったよ」  
でしようね、と頷きながら、二度目で漸くでした、とその時のこ  
とを考えながらという顔で返事をする。

しかし、それにすら驚きの視線を向けられ、あれ、まずった？  
という表情に変わり。

「五度ほど挑んで漸くだったよ私は。その間に一度パーティーでの  
討伐方法というのを見せて貰って、その後に漸くだ。それが、たっ  
た二度で……」

「あー……ええもうこれ以上話すと色々追い詰められそうなので  
解りました始めましょうか」

観念するようにつな垂れながらも、未だやりたくないという気配  
を発するその背中に、酷く哀愁が漂い始める。感謝を、と告げた後、  
少し場所を変えますかと向けられた視線の先には、未だ虚ろなまま  
のカーリンの姿。

前に進む者。前にしか進めない者。

その背中を眺めて、しかし腕の中にあるかけがえの無い温もりに。

もしこの子が降りるとしたら。

私はその手を握るのだろうか？

きつと信士はその時手を差し伸べはしないだろう。  
その手を掴むには、握られた手を振り払うしかない。

どちらを諦めるのか。

どちらかを諦めるしかないのか。

わからない。

わからない。

わからない。

05 (後書き)

ガチャリ

「『ただいま戻りました、サタン様』」

「えっ！ お、お帰りリヴィ、ア？ ……何してんのアムおじさん」

「ブフフウウ、いや、ちよっ！ 何その満面の笑顔！ どんだけ笑わせんだよ！」

「……なにそれ、レコーダー？ ホント何しに来たの？ 死ねよ」

「げらげらげら！ ほんとおもしれえわ！ あ？ そう睨むなよ、わかった帰るよ」

ガチャ

「あのー、新聞の契約勧誘すけど、今ならお米券つけますがとりあえず二ヶ月どうすか？」

「無理です、節制してるんです、諦めてください」

ガチャ

「お前が魔王か！ 漸く辿りついた！ いざ勝負」

「何やる気だしちゃってんの？ あーはいはい、これで死んでてね  
「なっ！ ぐはあ！」

ガチャ

「私のパンチを受けてみよ！」

「色々アウトだよその発言。何TA TOに喧嘩売ってんだよ  
「ぐえっ！」

ガチャ

「見つけたぞ！魔王！ わが一撃を」

「ああはいはい、面倒くさいなあもう！  
「がはあっ！」

ガチャ

「ただいま戻りました、サタン様」

「何だよもう今日はホントに！ まだ居たのかよお前、もう帰れよ

「！」

「……………」

「まだ何をっ！ お、おおお？ あの、えーと……………本物、で御座いますよね？」

「はあ、まあそう言われればそうと答えることはできますが。では帰ります」

「いやあのちよっとお待ちを！ いやほんと待ってください！ 誤解ですこれには深い訳があっただけで決して心からそう思ってた言葉ではなくいやホント今日はいろいろ合ってというか」

「はあ……………相変わらず駄目な犬ですねサタン様は」

「ええそりやもうほんとこんなもんなんすよええ。こんなもんっすよ魔王とかいっても」

「……………まあ、今回はこの辺で勘弁しようと言が決まりましたので。

ええ、それでは今後もよろしくお願いします、サタン様」

「ああ……………うん。そうだね、うん、漸くいつも通りって感じた。これからもよろしくね、リヴィア」

死者の復活は無い。

PKが存在する。

それを生業にしている者がハルムーンを牛耳っている。

並べられたその言葉の意味を、脳内で肉付けを始めるように浸透させ、それがどんな単語の羅列であり、またその単語の持つ意味を咀嚼するように飲み込み始めると。

体が震えだすのをとめられなくなった。

最初の地下遺跡ゲマニエで

もしあそこであの人が現れなければ？

中央都市 ミルドサレムで

もしあそこに居た全ての人が、その仮面の下で自分に狙いを定めていたら？

先程の、レイジーと呼ばれていた深紅の鎧騎士を相手に

もしあそこでお姉ちゃんがあのままその剣に打ち据えられていたら？

死んでも大聖堂で復活すると考えていた。

ここはそのまま『天上転華』の世界であり、私はそこに迷い込んだだけだと思い込もうとしていた。

街でプレイヤーとすれ違っても、あの時のように知らない人とはすれ違うだけ、知ってる人なら声を掛ける。それが普通だと思っていた。疑うことすら思いつかなかった。  
それが。



どうして。

何でそんなことに。

怖い。

何が？ 誰が？

モンスターが？ 人が？

この世界の全てが？

意識が外界を認識できず、漂うように視界も霞む中、ふと聞こえた真摯な声に、他の何もが意味を持たない思考の中で、その澄んだ音だけが意識を掠めた。

「……一度手合わせを願っても？」

それから続けられた言葉は何処か遠くへ流れる中で、その言葉だけが意識に残った。

この状況に、こんな話を聞いた上で。

なぜそんな言葉が出てくるのだろうか？

どうしてそんなことを言えるのだろうか？

どうすればそこまで強くなれるのだろうか？

何でそんなに前だけを見ていられるのだろうか？

怖くはないのだろうか？ いやきつと怖いに決まっている。

怯えたりしないのだろうか？ いやきつと怯えるに決まっている。

逃げ出したいと思わないのだろうか？ いやきつと、逃げたいに、

決まっている。

意識が戻ったように視界が開けてくると、最初に感じたのは握られた手の暖かさ。

誰とたずねるまでもなく、隣に姉が居ると感じる。

すいと流れた視線で捉えた周囲には、誰の姿も見られなかった。

そうか。

私は、置いて行かれたんだ。

そんな私のために、お姉ちゃんは残ってくれたんだ。

そんなのは、嫌だな、と思った。

私の所為で姉が自由を捨てるのは。

それはどれくらい嫌なんだろう？

逃げたくて、死にたくなくて、それでも前へ進むしかない状況でも？

それで姉が苦しまないなら、そう思えば私は進めるのだろうか？

きっと大丈夫。先のことは解らないけれど。その時には一歩前へ出てやる。

だからどうか、私を、姉を置いていかないで。

手に力が入る。

この決意を何処へも逃さず掴み続けてやるといっように。

それに応える様に返された力に、そこに姉の存在をしっかりと感じる。

「無理はしなくていいよ。私は佳織を失いたくない。足が竦もうと、腰が引けようと、それを笑ったりは絶対しない。だから…お願い。無理だと思ったのなら、偽らないでそう言って。ずっと側に居るか

「ら

優しい姉が、全てを捨てて隣に居ると言った。  
苦しい選択を迫られて、それでも私の隣に居ると、居てくれると、  
言わせてしまった。

「……………」

だけど。

だけど……。

絞り出そうとした声が、唯の一つも音を結ばず。  
零れ始める涙を、そんな自分の顔を姉にみせて悲しませたくなく  
て。

俯いてしまった私の弱さに。

お姉ちゃんは優しく背を摩り続けてくれた。

それだけで、先ほどの決意が消え心に安堵を浮かべて居るのだから。

自分は、なんて卑しくちっぽけな存在なんだろう。

「落ち着いた？」

そんな言葉に、漸く頷けるだけ気持ちも落ち着き。  
酷い様だなあ、とそう思うとまた泣き出しそうになる自分にここ  
まで自分は弱かったのかと、ほんとに情けないなと感じていた。

「本当は、もっと早く教えておけば良かったもしれないって。そう  
考えてた」

その言葉に、ああやっぱり気を使われてたんだな、と考える。  
記憶を辿ると、その言葉に納得できそうな場面が何度か思い当た  
る。

「だから、ごめんね。でも、大丈夫。もう、無理をすることもその  
必要も無いんだから」

その言葉に、ズキンと痛みが込上がる。

ズキン、ズキンと一度で治まることの無い、繰り返し、繰り返し、  
ズキン、ズキンと。

「エスプリの街に戻ってさ、二人でノンビリ暮らして。偶にはどこ  
かに出かけたり、一日中のんびりすごしたり。そうしてさ、落ちて着  
いてきたら、それからその後どうするか考えよっか」

頷いてはいけない、甘えてはいけない、これ以上話させてはいけ  
ない。それ以上優しい言葉を聞いちゃ戻れない。ずるずるずるずる、  
墮ちるだけ、墮ちるだけ。

でも、何を言葉に乗せればいいかわからない。  
違う話題を。違う流れを。

だから、自然と浮かんだそのことに、今の精神状態では、それを  
聞くことに抵抗はなかった。

「お姉ちゃんは、信士さんのことが、好きなの？」

聞いて答えてくれるかはわからない。

私のことを考えて嘘をいうかもしれない。

だから、言葉を重ねた。

話題を戻さないように。後ろを振り向かないように。

これ以上後悔をしないように。これ以上、後悔をさせたくないというように。

「中学校の時のお姉ちゃん、ちょっと変だった。ううん、少し、怖かった。何かに取り憑かれたんじゃないかって。でも、高校に入ってから、少し変わったよね。入ったばかりの頃は、本当に昔みたいに明るかった」

思考を切り替えるように記憶を辿る。

惨めな思考に上書きするように。

弱い自分を追い払うように。

「その後、また暗くなったりしたけど……それでも、やっぱり、中学校の時よりは、ずっと楽しそうにしてた」

だから、もう一度聞いた。

あの人が好きなのかと。

「たぶん、そうだとは、思う」

どこか曖昧な、濁すようなその話し方に、辛そうな表情で浅く笑う其の表情に、言い切れない何かを感じた。

「一緒に居たい、とかそういう気持ちはあるんでしょ？」

でなければ、今ここに居ないのだから。

そこまでは口にしないが、あのミルドの宿でそれは確信していた。

「無いわけじゃないんだけどね。でもどうしても側に居ない方がいいんじゃないかって、思っちゃうんだよね」

「……何か、あつたの？」

言い辛そうに、それでもこの状況だからか、毀れるような擦れた声で、しかし二人しか居ないこの場では、その声ですらハッキリと聞こえた。

「高校一年の時の、秋頃だったかな。信士の中学校からの友達で洋介って人が居たんだ。その人は入学前からの付き合いらしいから、結構仲よさそうに話しててね。」

私はそこで信士と久しぶりに出会えたからさ、教室で色々と話もしてた。それで、気がついたら三人で話すことも多くなつて。

秋になって、私は洋介に好きだって言われた。

私は、それに応えることができない、それでも、これから今までの関係でいたいって思つて。

やっぱりあいつが好きなのか？って言われて、あいつはお前のことをそんな風に見て無いつていわれて。

きつとそうだろうとは解つてはいても、その断定されたような言い方は、直接本人から聞いていたからこそ言えるのかと思うと……辛かったな。けど、それでも何時かはきつとつて、ずっとそう考え生きてたから、それでもいいんだ、つてそう答えて。

でも、やっぱりさ。

それまでのように、何もなかった昔のような付き合い方って無理だった。

洋介は、何処か信士を避けるようになって、私には昔のように、それでも少しは壁があるような感じはするけど、それでも話しかけてくれたりしてたんだけど……そこに信士が加わると、話に加わることなく消えていって。

しょうがないのかな、とか思ってたんだよね、その時は。時間が経てば、きつと昔みたいになるって。

それが、ただの。自分の夢見る希望でしかなかったのにな。

それから、暫くした時。その時も廊下で偶然出会った洋介と、いつも通りの雑談、ていうのかな、その時なにか話したら、廊下の奥のほうに信士の姿が映ったの。

信士もこっちに気がついたみたいでね、私と眼が合ったから、手を挙げて呼ぼうって、そう思ったんだけど。視線が合ったと思った後、信士はね……何も見ていなかったみたい、そのままどっかにいっちゃってさ。

馬鹿、だよ、私も。

よくよく思い出してみると、あれから、信士と洋介が二人してどこか歩いてるとか、そんな姿みかけなくなってたのに、それでもまた昔みたいになればって、時間が経てばきつとって。

でも、結局は、違った。

どんどん、私とも距離を置くようにしてたのも、感じてた。

だから、私は、それから洋介をなるべく避けるようにしてさ。

そしたらさ、信士と洋介が掴み合いの喧嘩したって聞いて。

それで……それからどれくらい経った時だったかな。

十一月の、十日。その日だけは忘れられない。

その日洋介がね。夜遅くにゲームセンターからの帰りにね……何  
て言えばいいかな、色々あってね。その日から洋介とはもう、喧嘩  
どころか、話も何も、出来なくなっちゃって。

私は、自分のせいだって知ってるから、どうしたらいいのか、す  
ごく悩んだ。

何がだめだったのかって。何でこうなっちゃったのかって。

結局、答えなんて出ないし、出たとしても時間は戻らない。残さ  
れた結果も、ただ信士の親友を一人居なくしただけ」

何も言えなかった。でも、聞かない方がよかったとだけは思えな  
かった。

きつと、そんなことをずっと考えて、後悔して、我慢して、必死  
に耐えていたんだと。

声に出せず、誰にも頼れず、それなのにこんな私に優しくしてく  
れて。

「信士のさ、本名って、徳間 信士っていうんだ。

でも…それは今の、名前。私が最初に逢った時の名前ってのが、

山田 信士なんだ。

だから、さ。考えちゃうのかな。

親しい人が離れていくってのは、どれくらい辛いことなのかな、  
って。

きつと二度と味わいたくないような、そんなものなんじゃないの  
かなって。

私が中学校の時にさ、信士が転校しちゃったあの時の自分のこと  
を思い出すと、どうしてもそんな風に考えちゃって。だからこそ、  
その時のことを考えると…私が側に行かなければって。

だめだよな、こんなんじゃない……だから、どうしていいのか、本当  
はもうわからない」



知っている。四年前に一緒に暮らす家族が変わったというのは。あの人、二人だけの秘密だと言って教えてくれた。でも、私が知っているのはそれだけで。

それ以上何も知らない自分に、何を言えるのが解らなくて。

「考え出すと、なんか頭の中がぐちゃぐちゃになっちゃってね。どれが自分の本心なのかがわからなくなっちゃうの。」

そうになると、不思議と自分が一番納得できちゃう理由ってのが見つかるんだよ。

私がこれ以上踏み込まないのも、このままでいいって思うのも、結局私も二度と同じ思いをしたくないだけなんじゃないのか？ っ  
て。

本当はさ、信士と洋介が疎遠になって其の原因が私だったから、それはとても辛かったことなんだけど、その後気がついた『そのこと』に、『これで信士と二人になる時間が増えるのかな』ってそんな考えに、少しほっとしたというか、開放されたって感じもしてたんだよね。そんな単純な結果になるわけ…無い筈なのにね。

やっぱりさ、信士はあんな感じで…悪い言い方すれば『捨てられる』みたいな別れかたがトラウマみたいにひどく辛いみたいだね。私との間にも、それ以来分厚い壁ができたみたいになってさ…結局、縮まったと思った距離は、変わってはいなかっただけじゃなく、むしろ開いちゃったんだよ、ね」

「そんな関係が辛くなったから、そんな理由に落ち着いたんじゃないのかな？」

「どうだろうね。よく、わからないんだ、本当にもう」

全て話してすっきりしたとでもいうように、もう諦めはついてい  
るつもりでいいように。平坦に、感情を捨てたような声で話すそれは、  
これまでどれ程姉の心を苦しめてきたのだろうか。

だから、もうそれだけで十分すぎると思った。

これ以上辛い別れはさせたくないと思った。

きっと本心では、その思いは変わってないのだから。昔から、離  
れたくない。側に居たいんだと。

でなければ、ここに居ないんだ。それが証明になるじゃないか。  
理屈という名で上辺に浮かぶ、諦めようとするための理由なんかに、  
姉の本心を潰されたくは無い。

「お姉ちゃんはさ、さっきの人、あの人と信士さんが並んで歩いて  
るの見たとき、それを嫌だなとか、思わなかった？」

「そうだね、多少は……嫌だというか、辛かったかな」

姉の本心がそうなのならば、私は今後逃げないと誓える。

それだけで、きつと前へ進める。

「信士はね……本当は、もっと静かというか、頑ななんだよ、学校  
でというか、元の世界に居たときは。だから、今の信士は、『山田  
信士』の延長を、きつとそうになっていたという風に生きて  
いるんだと思う」

「それは……、それでもお姉ちゃんは、そんな昔から好きだったんで  
しょっ?」

「……うん、その時は気がつかなかったけどね。信士が転校して居なくなつて、それから付き合つた人と別れて、それに何の未練も無いのに…信士のこととは忘れられなくて。だから、気がつくと思つてもかも…無理言つちやつたし、頑張れた」

「なら、私はそれでいいと思う。お姉ちゃんが初めて好きになつたのが『山田 信士』さんで、これから一緒に居たいと思つたのが、『徳間 信士』さんというだけで」

別人になつたというのなら、それはそれでいいと思う。

それでも忘れ切れなくて。それでも離れ辛いのなら。

初めての恋というのは過去へ、これからの未来に期待を向けて。

今この世界に居るのがその初恋の相手だというのなら。

これから先の未来の為に、次へと進むそのために。

そのためにこの世界を終わらせなければ成らないのならば。  
そのためにメインクエストを進めなければ成らないのなら。

それで姉が救われるのなら。

それだけで私は、前へ進める。



06 (後書き)

「さて、サタン様。私が戻って来たからには自堕落な生活は許しませんので」

「サー！イエッサー！」

「これまでよりもより一層強く、精神的にも逞しくなってもらいます」

「ふふん、望むところですよ！ ハードルは高ければ高いほど！」

「高ければ高いほど？ 因みにハードルとは陸上競技の？」

「そう！ 何時までも自堕落には生きず、より一層高いハードルを前に」

「サタン様、その発想は高飛びという競技者の物です」

「えっ！？ えつとじゃあ、壁が高ければ高いほど乗り越えたくないと」

「サタン様、それで降りられなくなればただの馬鹿ですが」

「ぐっ！ そ、その、ほらえーつと」

「全く……何が言いたいのですか？」

「その、ほら、ね？ いい言葉でもって、自分を奮起しようというか」

「自己暗示ですか？ まあそれで強くなれるというのなら止めませんが」

「そ、そうなんだよ！ ほら先人達に習ってね！ 堅実に、着実に一歩づつというか！ そうそう、こういうのはなんだっけ……石橋を叩いて渡れ？」

「サタン様……意味も分からず不確かなままに言葉を使う物ではありません。」

「いいですか？ それは施工業者に対する宣戦布告という意味です」「絶対違うよ！ え、何いっちゃってんの？！ いや、あれ？ そういわれれば頷ける気もするけど……でもその言葉考えた人はきつと

そんなこと考えてないよ！」

「煩いですね……：そういえばサタン様、私最近何かを埋めたくてしようがなかったんですよ」

「はいしません！ 自分生言いました！ ほんとサーセン！ ほらあやまっていますから！ 自分もう生いいませんから！ 後生ですから！ やめ！ ダメ、ダメEEEEEEEE！！！」

目前に迫る凶刃を冷めた目で見据えながら、それをすい、と何とも無いように避け、お返しとばかりにその手に握る武器を叩きつけられる。

苦痛に、というよりも、屈辱という風に顔を歪め、距離を取ろうと跳び去るその背に、容易く追いつき追撃を受ける。

宙を駆けるその最中に、受けた衝撃に体を崩し成す術もなく膝から地に落ちる。

背後に迫る足音に、振り返ることもせず横っ飛びに逃げようとすその先には、既に用意された罠が暴虐の顎をガバリと開いて待っていた。

失策を悟り、しかし既に踏み出された足は、そこへと勢いを落とすことなく自身を運び。

ああ、これが私の望んでいたことなのかと、口の端をゆっくり吊り上げ愛用の得物、『断罪の執行者』を持つ手によりいつその力を注いだ。

歩くこと五分。

十分に開けたその場所にて、信士とティラミスは足を止める。

隣り合うように並び歩いてきたその距離は、会話するには十分な距離で。

しかし何も言わずに視線を向けるだけで、二人はその場に足を止めていた。

解り合うというのはこういう物なのだろうか、と益体も無いことを思いながらも、しかし自分がこんな展開など望んでいなかったとその考えの一切を否定する。

「……条件が、と言っていたが。できればそれを聞きたいのだが？」

背を見せ距離を取るように歩きながら、ゆっくり、戦闘の準備を始めるかのように、一歩、また一歩と進みながら、その都度張る声に力が籠り始めている。

「まあ…簡単なもんですよ。これから俺が使うもんを口外しないでくださいねってことだけで」

この世界がどんな風に変貌したか。

それを考えるだけで個人に過ぎた力を持つというのは、きっと恐怖の対象に選ばれる。

自身の持つこれも、そして目の前のこの人も。

それだけの力を持つのなら、それで対処は幾らでも出来ようが…  
…例え逃げを打つにしろ、その時一人で居るならば。

「成程、つまり本気で相手をしてもらえると、そう考えて良いのだね？」

「ええそう、そうですよ。もうこっちも遠慮もくそもないですよ。うなると。さっきの話、聞きましたよね？その上でルールというか、



決め事もしておきたいですし」

即座に返す飲もうという言葉に、こういつところだけはありがたいなと、それでも疲れることにややうんざりしつつ。

「まあ死にたくないの見極めは大事でね。やばいと思うときにはもう降参を。相手をみてやばそうなら降参勧告を。その上で此方の都合上、制限時間を十分として欲しいのですが」

「全て飲もう。それでは始めようか？ 私は何時でも始められる」

猪突猛進。

いや違うかな？ 徹頭徹尾のが似合うのかも。

求めるべきは厭くまで強者と。

新たな足音に顔を振り、そこに居るのがリー一人であることを認めると、丁度いいから立会人とさせてしまおうかと声を掛ける。

目の前の人物が負けず嫌いだというのは隠すことが出来ない程に判り易く、そして自分もまたそれを否定できないだけに、あの男にその辺を見極めさせた方がいいだろう。

「まあ、僭越ながら雲上人同士の激戦の立会い人という立場を拝命いたしましたので……私が止めに入った時点で、そこで決闘は終了と。この内容でいいですか？」

声はなく、しかししっかと頷きあう。

一人はその手に特殊武器 カタールを。

一人はその手に魔術書らしき石碑を。

それを確認したりーは、その手に銀貨を一枚取り出し、心を落ち

着けるようにか一度だけそれを弾いて掴むと、これから出される合図がどの様なものと示して見せる。  
それから。

ピイイイン

天高く舞い、回転を始め球体に見え始めたその輝きが。  
リーが去り、その落下を見守るようにその場に残るのは信士とテ  
イラミスの二人のみ。

重力に引かれ地へと回帰を果たした銀色の輝きが、二人の視線の  
絡む高さを通り過ぎ。

地に落ちると同時、それは始まった。

銀貨の着地を確認し、それから即座に横つ飛びに飛ぶ。  
先ずは回避。その間に完成させる。

そう考え、迫り来るだろう凶刃の現在位置をと確認し、それが数  
瞬前の自分を貫いている位置にあるのに、その余りの速さに愕然と  
した。

予想より速いどころか、想像すらできなかった速さ。

これが頂点に在る超人。それを只の初撃、只の一合で本能に刷り  
込まれる。

「破棄、術書解読」

『断章』

術式開放：プレッシャー

開放状態を宣言した位置を基点に一定時間周囲に重圧空間を作る。空間内に存在する使用者以外全ての行動速度を減少させる。空間内では全技能消費SPが倍増する。

ぞわりと周囲の景色が色付く。歪む様に食い破るように、捻じれ、暴れ、拉げる様に。

それは目に見える程にはっきりと、しかし形を持つことなく曖昧に。

「成程、これが山田殿の奥の手、ということでもいいのだね？ さて、どのような物か」

そう話す声ですら、やや速度を落として聞こえるように。

しかしその話し方から感じる印象はまるで効果を実感できていないように。

体感できない感じなのだろうか？ それともモンスターにしか効果がないのか？

疑問は浮かぶが確証は無い。

ならばやることは決まっている。

瞬時に駆けて距離を詰める。その手に持つ石碑を武器に。

驚くように咄嗟に繰られた執行者の名を持つその刃に、その動きの遅さに戸惑いつつも、迫る速度は変えず、その手が届く圏内へと踏み入れると同時に、渾身の力をもって叩きつける。

痛み以外の何かに耐えるように変わる表情に、即座に動く気配を

見せるが、その姿すらまるでスローモーションのように見え。跳ぶように逃れ距離を取り始めるその背を、只の一步で追いつくと、何の警戒も見せないその背に追撃とばかりに叩きつけた。無理な体勢での着地の後、ゆらりと見せたその動きに

「破棄、炎竜！」

発動と同時に轟と暴れる火柱の渦中へ、誘い込まれるように人影が飛び込む。

確信した。

効果はある。被術者は自身が置かれた状況を体感するのは、術者の無慈悲な手に因つてのみと。

十分。それがこの決闘の制限時間であるとともに、この『プレッシャー』の制限時間でもある。

石碑『断章』に在る物理攻撃力は然程高くは無い物の、それでもこれなら追い詰められるか？

既に五割のSPを消費し、残る全てを手札に回し。

足を踏み出しそこへと迫る。この世界に在りて、その頂点へと。

純獣人という種の特徴は、圧倒的なまでの俊敏値であり、またそこに付随する移動速度増加に因つて戦闘を優位にさせている。

力もまたドワーフ種に次いで高いものの、それは目を見張るほど、というものではない。

手数を重ね、着実にというものだ。

だからこそ。その手に持つべき武器に拘る者が多い。

速さを重視し、圧倒的な速度で手数を増やすか、一撃の重さを念

頭に入れ、付かず離れず隙を見つけ、それを逃さず攻撃を繰るか。

カタールという武器はそのリーチから考えるに前者を取るスタイルだ。

包囲状況に陥ることを考えたとしたら、その防具は物理耐性を上げるのが基本的であろうか？

追尾性能のある魔法というのは少ないが、広域魔法というものがある。

ならば、魔法耐性を上げればいいと考えれば、それもそうだろうなずける。

獣人種は知力値の伸びが悪い。それはそのまま魔法耐性も低いということになる。

汎用性を考え双方の耐性を持つ防具を選ぶのが一番だと思うが、其処から先は個人の拘りと戦闘スタイルで変わるといっただけで。

見た目ではあきらかに物理耐性の低い軽鎧だが、魔具併用防具であることを示している以上、果たしてどちらに比重を置いた魔具を用いて構成されているのかを推測する。

戦闘スタイルで考えられる物を並べてみても、どちらかといえ、という物しか考えられない。

あれほどの移動速度を持つならば、魔法の効果範囲外から即座に回避し、即座に迫れる気もするが、それは同じく物理攻撃の網に包囲されたとしてもその後の展開は同じではないかと。

制限時間。

残存SP。

巡る思考に、決断を下す。

詰められたのならその手で払い、離れた位置にあるのなら、その術を放つ。

「破棄、地葬」

「破棄、冷槍」

相手にしてみれば瞬時に展開されるその魔法に、対処しようと動くときには次の一手が目前に迫る。

そこで思考が揺れる状況に、更に追い討ちが掛けられる。

「破棄、迅雷」

辛うじて、迫る三本の氷の槍の内二本避けたその直後、逃れようの無い紫電が無慈悲に迫る。

思考を乱し、体勢を崩し、本命の一撃を確実に見舞う。

消費の大きいそれを外す事ができない現状で、それを避けられるというミスだけは絶対にできない。

五分はとうに過ぎている。が残り時間を考えると、残存SPの枯渇が先だと考える。

その間に、降参を迫れば勝ち。そこまで辿り着けなければ負けだろう。

さて、次の一手はと考えた時、迫る気配に声を被せる。

「破棄、烈風迅」

捉えられ空を舞うその姿に、浮かべられている笑みに心が躍る。

戦闘狂と謂われる由縁、楽しむように戦い、闘う。

成らば自分はと考えるまでもなく、きつと今は同じような顔なのだろう。

時間が迫る。幕が引かれる。

ちらりと視界に捉えたりーの、その表情が物語る。

残存SPを考えて、それに全てを乗せて笑う。

「破棄、隕星」

星を滅する流星群。火属性魔法の最上位。

中空に突如現れる煌く紅点。それが空間に侵食を始める。

それに押され、ひしゃげるように、周囲の空気が色を変える。

歪みが戻り、元の姿へ。捻じれが戻り、過去の姿へ。

天が墮ちるといふ感想が、此れほど似合う光景はないと。

重力に惹かれ地に魅せられて、そう思わせる何かを見せる、圧倒的なまでの重圧に。

その向かう先にある人影が動く、ゆらりと揺れて、そこから消える。

ははは、と笑いが漏れた気がした。

それは自分の声だったのか。

それとも、目の前のあなたの声か。

「そこまで！」

その声に意識が戻ると、傍らにはリーが居り、信士の手とティラミスの手を取り動きを制していた。

その顔に浮かぶ呆れたような眼差しに、それでも先の見えた勝負を止めてくれた事に感謝を送りたくなかった。

それに反して怒ったように、不機嫌な様子で噛み付く声は、不満をありありと滲ませている。

ただの一手も決められず、必中の一手を止められて。

宥める声もその耳には届かず、諭す声もその耳には意味を成さず。

「本当のことだよ、実際。俺はガス欠、あんたは元通り。さっきの一撃が分かれ目だったよ」

勝つか、負けるか。

それもゼロを目指した物ではなく、厭くまで試合。

「調整つて難しいよな、実際。途中からその辺飛んでたかもしれないし。それはあんたも一緒だろ？」

そんな信士の声に応える声は、バツの悪そうな肯定を示し。

苦笑を漏らしながら仰いだ空に、心地よい疲れを感じごろりとその体を投げ出す。

「あれが俺の全てだったよ。あんたはそれができなかつただろうけど。あれじゃ満足できなかつたか？」

「いや、そういう訳ではないのだが……、わかってはいるのだがね、これが只の我が侂だと」

楽しかった、と。それだけははっきりと。

そりゃよかつたと思うと同時に、先のことを考える。『この』向こうまで追い詰める人間が居るのだと。

ただの快樂、欲望の為に。ただの強欲、誇示のために。



今回の手合わせは、有意義であった。

対人に対する考えを、対抗の為の手段を、頂点に迫る武力の髓を。

ザリツという足音に、誰かと振り仰ぐ視線の先に、見知った二つの姿を認め、込上げてきた感情は不安、戸惑い、疑念と何か。

先の光景を見られたことに対してではなく、今この場所に足を運んだ意味。

帰途を共にという訳ではない。それならばあの場に居るだけでいい。

ならば、と導かれる答えに、視線の先に映るカーリンを見る。それまでより強く足を踏み、純粹な意思を眼に浮かべ。

それに、その姿に自分がおびえ始めるのを感じる。

視線が絡む、誘われるように、決められていたように。

やめる、やめてくれ。そんな眼で見ないでくれ。

記憶が跳ぶ、過去へ過去へ。

同じ眼を向け親身に接し、それから僕の期待に崩壊を齎し。

記憶が跳ぶ、更に過去へ。

同じ眼を向け優しさをくれ、それから僕の世界に背を見せ去った。

違うここはあの世界じゃない！

『徳間 信士』の期待を崩壊し、『山田 信士』に背を向けた。

繰り返し、繰り返し。歴史は只の繰り返し。

二度あることは二度あり、七回転んで八回倒れ。

ズキリと痛む頭の悲鳴に。

そのまま意識が霞むのを感じた。

07 (後書き)

「サタン様、少し休憩にしましょう。今コーヒーをお持ちします」

「ああ、ありがとうりヴィア。そうだね、少し休もうか」

「それでは少々お待ちを」

「うーん。それにしてももうすぐそんな時期か。懐かしいねえ」

「お待たせしました、さあどうぞ」

「あ、うんありがとう……、いや、うん。うれしいんだけど、なんだろうね」

「どうしました？ サタン様」

「あ、うん、そのね、何と言うか、その、こうコーヒーってこんなだったかなって」

「何か問題でも？」

「ほらさ、コーヒーってさもつとこう、色が濃いつていうか、こう、ね。琥珀色というか」

「ええ、そうですね。深い色合いに漂う香り。至極の一品です」

「そうだよね。でね、これはどう見てもちよつとだけ、極々はんなりと色が付いた『お湯』に見えるというか……」

「最近胃が痛いとおっしゃいますので、薄めにと。アメリカンという奴です」

「いや、いやいやいや。それは逆にアメリカンに喧嘩を売っているようにしか聞こえないというか……そのね、もつと……いやもうすこしコーヒーっぽくして欲しいなあ、なーんて」

「とはいえ、コーヒーの香りは致しますでしょう？」

「ああ、うん、そういわれれば、そんな感じが、する、かな？」

「え？」

「……え？ いや、今『え？』って言った？ え、何で？」

「あ、いや嗅覚まで犬並になられたのかと思ひまして………たった二・三滴注いだけで？」

「いやあの、リヴィアさん。聞こえちゃったというか、その色々うん、そう辛いんだけど……どちらかというと、その薰りというのはそのリヴィアさんのお手元からというか」

「ああ、なるほど。しかしコーヒーとはいいものですね。さて、休憩はこの位にしましょうか」

「……あい……グスッ」

『もう、会わない方がいい』

これは……記憶か。またこの光景を見ているのか俺は。

忘れられない、消えて無くならない。

消えて、亡くならない……。

辛そうにゆがんだその表情には、後悔というより慙愧が強く見え、そんな顔にさせてしまったのが自分であると思うと、ひどく居た堪れない、と思うよりも強く、鋭く心に痛みを齎した。

それでも、ここで泣いてはいけない、と、その感情の暴走だけは必死に押し留めなければいけないと、力いっぱい握られた両の手に、歯を食いしばるしか出来なかった自分には、何も返事をすることができなかった。

ただただ、頭に乗せられたその手の大きさに、懐かしい安堵を覚えると同時、それもこれで最後であると、これ以上甘えることはできないと、そう考えるだけで手に入る力はより一層と増していった。

無視されるだろうとも思っていた。

笑顔を浮かべて会話ができるかもとも思っていた。

それでも、結局迎えた結末は、お互いにひどく傷つけあっただけという、予想通り過ぎた結果だった。

しばらく続いたその沈黙に動きがあり、それがこの再開の終わりを悟らせる。

釣られるように見上げた先、見受けられるものはすでにその後姿

だけ。それに込上げてきた寂寥感は、必死に押し留めた双眸を決壊させ、一筋の道を作り始める。

「さよなら。俺が居なくなっても、きつと大丈夫。今日で元気で暮らせ、信士」

馬鹿だったよなあ、俺も。

いや…どうしようもなかったのかな……。

ここで会っても会わなくても、結局同じだったんだろうなあ。

これまでの思い出があふれ出し、より一層勢いを増し始めた雫の数に、しゃくり上げるような音が混じり始める。それが耳に届いたのか、遠ざかり始めるその後姿は一度だけ足を止めたものの、其の姿が振り向かれることはなく、またゆっくりとその影を遠くへと運び始めた。

きつとこうなるだろうとしていたはずの覚悟など、何の役にもたたなかった。

決して泣くことだけは、泣いたとしてもその姿が消えるまではと意気込んでいた決意ですら脆く崩れ去っていた。

視界から消え去ったその背中に、そのやさしさがもう手の届かないところに行ってしまったといのは、これ以上無いほどに受け入れざるを得ず、それを考えれば考えるほどにどこか心の隙間に暗く、黒く、そしてじわじわと広がっていくようにそれまでの様々な出来事に対する記憶を塗りつぶして、食い荒らして、ぽっかりと何も無

い空間を作り上げていく。

気がついた時には、周囲はすでに行きかう人々の喧騒も聞こえない程夜も更けており、見上げた空には星の海原がその存在を主張するように輝いている。

落ち着いた、と強引に思い込みつつ、鈍く働く思考に浮かぶ、早くうちに帰らないと、という思いに引き摺られるように足を動かす。

道中何があつたのかを思い浮かべること出来ないほどに、目の前に見え始めた我が家の明かりに、それでも気分は沈んだままだった。

ここで引き返していたら、少しは違う生き方ができたのかな？  
きっと無理だ。同じ未来だ。いや、どうだろう？ もう少し受け入れられたかな？

視界に入る玄関の側、見知らぬ車に視線を移すも、それが何であるのか考える気も起きず、未だ震える手で玄関を開くと、弱弱しい声で帰宅を告げ自室へと足を向けた

「おかえりなさい………どうしたの？ 元気なさそうだけど？」

心配そうな母の視線に、なんでもない、という言葉をかけようとした時。

其の後方から現われた見知らぬ男性。年にしても母と変わらぬように見え、やや緊張した表情を浮かべながらも、優しい眼差しを感じさせる其の視線に、体に電流が走ったかのごとき衝撃を覚えたと同時に、何故か全てを悟ってしまったような気がした。

「具合が悪いなら、部屋で横になってる？」

そんな母の心配げな声にも、その表情にも、申し訳なさも何も浮かばず、ただ空しく響くだけの雑音に聞こえ、それでも動かぬ僕にやや戸惑いつつも何度が言葉を重ねつつ、何かを迷っているように視線を左右させていた。

それだけで。

何故か、すべてが終わったんだ、と思った。

もう、見たくない。

これ以上、自分を観たくない。

どこまで 終わらせる 視せるつもりだろう？

コレイジヨウナニモミタクナイ

これ以上ここに居てはいけない、と思った。

母の口が何かを告げる前に、ここを離れなければと思った。

呪縛が解けたかのごとく、それでもどこか機械的な動きにはなつたものの、そんな僕を見て安堵の息を付いた母の表情は、どこか負い目を感じているような、後ろめたさを隠すように固い表情で。

「本当は、もう少しゆっくり話たいと思ってただけだ。聞いてお



いてほしいの」

次に機会が何時になるかわからないから、と。変わらぬ僕の表情に、もうすでに悟っているのだと考えているのか、それから浮かべられた緊張した眼差しは、何かを覚悟しているようで。

拒絶？ 侮蔑？ 後悔？ 嫌悪？

自分が恐れたのはそのどれだろうという思いから、数時間前の光景がフラッシュバックする。

目の前の母が、まるでその時の自分に重なり、それが自分の意識を現実へと戻した。

戻して、しまった。

だから、一字一句はつきりと聞こえた其の言葉は。

「紹介するわ、信士」

何かが音を立てて崩れていく。

それは理性か、記憶か、それとも自分の人格がグラリと流れる景色が黒く染まってゆく

ココロガコワレル  
アタマガイタイ  
モウナニモミタクナイ

「この人は『徳間』さんと言って、

……」

其の宣告は

「ソレカラネ、シンジ。」

オクレチャッタケド……」

最悪のタイミングで告げられてしまった。

タ  
ジ  
ヨ  
ビ  
オ  
デ  
ト

コンコン ガチャ

「沙丹さー……誰ですかこの女性は？」

「え？……つえ！？ いや誰ですかってリヴィアだけ。いやそれより君」

「ひどい！ 私のこと騙してたのね！ 『僕には君しか居ないよ』なんていつておいて！」

「サタン様、此方の方はどなたですか？」

「言つてないよ！ ほんと誰だよ君！ いやあのリヴィアさんどうしてそのように私物をまとめ始めているというか、いや本当君だれだよ！」

「あ、はい三丁目の雑貨屋の……（えつとセリフセリフ）…沙丹様の嫁です！」

「今何見たの？！ 怪しい動き見せたよね！ リヴィアも見たよね！」

「それではサタン様。どうぞ…どうぞお幸せに……」

スタスタスタ ゴソゴソガチャガチャ

「うーん。やつぱり一人で全て回収するのは厳しいかな……（あ、お嬢さん、お疲れ様でした。これはほんのお気持ちです）……さてお久しぶりです同土リヴィア。それと…おや？ どうしましたサタン様、そんな鳩みたいなお顔をなさって」

「またか……またお前なのか……」

「これはこれは、些か機嫌が悪いようですね。何かありましたか？」

「『何かありましたか？』じゃねえよ！！ 何してんだよ！ てかまだその盗撮機材残ってたのかよ！」

「……サタン様、一ヶ月、と以前言いましたよね？ 脳みそ足りてますか？」

「十分だよ！ 悪巧みできる容量が無いだけだよ！ お前と違うん

だよ！」

「まあ、少し落ち着きましょう……そしていい加減諦めましょうよ？」

「嫌だよ！ 何で上から目線なんだよ！ お前の方がいい加減にだよ！」

「サタン様、いい加減慣れて下さい」

「慣れっ！ てきてる自分が居るけど、それでも嫌なものは嫌なんだよおおおおおおお！！！」

「あ、お嬢さん、胃薬一つお願いします。此の方の好物ですので  
大至急で」

「気が付いたかい？」

開かれた瞼に光が差し込み、その光の強さに再び瞼が下りる寸前。光が翳り、現れた天井の存在にゆっくりと眼を開き始める。覗きこむように視界に広がり始めた顔は、先程聞こえた声の主が誰であるのかはつきりと認識させる。

「……寝ちゃってたか。すまん、どれくらい寝てた？」

安心したような表情から、呆れたようなそれに変わる顔に、自分が現在どんな状況なのか、記憶を辿り思い浮かべる。

感じる疲れ、微かに残る頭痛、胸に渦巻く嫌悪感。

ああ、そうか。

ティラミスと試合をして、疲れたままに体を横たえ、それから……そうか、あの夢を見て。

空を見上げるとそこには青空が広がり、それほど時間は経過していないように感じる。

「まあ……二十分から三十分がいいところだろうか、ね。しかしそれほど疲れたのかい？ 確かにあれを見たらそれも不思議には思わないけど」

あれ、と言われて思い出す光景。

頂点に座すプレイヤーとの手加減無用の戦闘。

どんな戦闘を好み、どんな戦術を用いるのかという情報もない相手に、本気ではあったが手札の全てはさらさずに挑んだ。

結果は一步も二歩も及ばず。

次にもう一度と考えても、絶対勝てるとは……どうしても思うことができません。

「あれが、頂点と呼ばれるプレイヤーね。流石というか、納得というか。よくあんな化け物相手にあそこまで追い込むことが出来たものだ。その点では信士も……十分化け物なのかもね」

「……全然追い込めてないよ。しかし……頂点つても、獣人の、って感じだな。その辺の対応は大体思いついたが、これから考えるともっと情報が欲しいな」

そうだねえという呟きは、頭が痛くなる問題がどれ程山積みであるかを物語るように遠い目をし、一文字に口を引き締めつつ、音が聞こえるほどに大きく鼻から息を吐き出しながら、その痛みを振り払うように、無くなることを願うように緩く首を左右に振っていた。

「とりあえず……戻ろうか。皆待ってる。その辺の問題もこれから考えればいい。まだ五章が終わるだけならば、この先もう少し時間はあるさ」

頷き、信士は体を起こす。

歩き出したリーの背中を、ぼんやりと見つめながらその後が続く。時間はまだ有るとは言う物の、本当にそうだろうかと考える。

その時間の経過と共に、ハルムーンの街はどう変化していくのだろうか？

互いが互いを滅ぼしあい、戦火は下火になるのだろうか？

重ねた戦闘の経験により、情報を増し用意周到に虎視眈々とその牙を研ぎ潜ませるのか？

本当に人間というのは、なんとも自分勝手な生き物だな。

ならば自分はどうなのだ、と考えると……自分もそうなのだろう、何せ　いや、これ以上この考えに捉われるのはやめよう。

声が聞こえ始めそれに視線を移してみると、見知った姿が三つ見える。

何をしてるんだか、と苦笑を浮かべつつもその光景を見て気持ち少しづつ晴れていくのを感じる。

こんな日常も悪くないな、と思いつつもそれを見続けるにはそれを守るだけの力が必要なのだと考え、自分にそれが出来るのか？という問いに、先の戦闘が思い浮かび　明確な答えは出なかった。

「約束は必ず守る。他に何か望みがあれば其れも聞こう、だから一度でいい、頼まれてくれないか？」

「いや、確かに最初は私がお願いしたけれど、それはそれというか……」

必死に頭を下げるティラミスの姿に、それを受けて当惑し、困惑し、ハッキリ言えば迷惑なんですけどおみtainな態度で困り果てているウサミツチというその絵に。



どうしてこうなったのかと、それを少し離れた場所で呆然と眺めていたカーリンに尋ねる。

ビクツと飛び上がり、恐る恐ると振り返るその動きは、小動物のように愛嬌のある動き。

その視線が認めたりーと信士の姿に、ほつと息を吐いた後、事のあらましを話始めた。

あの戦闘が終え、そこに現れたウサミとカーリン。

それからメインクエストを進める旅を続けるという決意をりーに告げ。

ふと、ウサミの視線が吸い寄せられるように一点に向けられる。

特殊武器 カタール 『断罪の執行者』

叫ぶように発されたその声に、啞然とする場の空気を物ともせずすらすらと終わりを見せないように流れ、紡がれ始めたその高説、飛びつき眺め始めるその姿に。

それに何かを思いついたようにティラミスが話しかける。

「使ってみたくなかったかい？ 試してみたくなかったかい？」

悪魔の囁き。

ぎゅいんと目を輝かせて見つめた先に、浮かぶ顔には極上の笑み。その笑みに乗り続く言葉に、再びその場の空気が変わる。

「それを持って、私と試合をしないかい？」

で、今現在まであれの繰り返し、と。

うん、分かり易い。実に分かり易い展開。

カーリンもまた止めたみたいらしいのだが、そうしようと思うにも、ウサミもまたその魅力に贖い難いのか、度々手を伸ばしては引き戻してと、止めない方がいいのかという態度をしているそう。

うん、伸びてるね。物欲悪魔と 理性天使の戦いを示すように、小刻みに震えながら伸びてるね。

「何とも……私としては、一度手合わせするのもいいかと思うが……  
信士はどう思う？」

「俺も同感かな。先のことを考えれば慣れは必要だ。それに……これ  
以上無い相手だ」

カーリンの首が忙しくなく動く。あちらも気になるけど、此方の会  
話も気になる、と。

「まあ頂点プレイヤー相手だ、胸を借りれる機会等そうそうないだ  
ろっ」

「あつてたまるか、あんなしんどい経験。俺ももうこりこりだよ」

目を大きく見開くカーリンが、さらに忙しくなく首を振る。会話の  
内容も気になるけど、その真偽も、本当だとしたら姉はどうなる  
の？ というように。

これ以上動いたら首がやばそうだと、その肩に手を置きその動き  
を止めると、不安気な視線に手をひらひらと振り、リーにまた審判  
よろしくと指差し告げて、二人の言い合いに終止符を打つべく頭を  
かきかき足を進めた。

「あの、本当にお借りしてもいいのですか？」

「何、他にも武器はある。確かにそれが現在では一番手に馴染んで居るのは確かだが、それを手に入れるまで使っていた武器もある」

嬉しそうにうきつきとアイテムポーチに手をつ突っ込むティラミスの前に、ウサミツチは申し訳なさそうに、それでいて視線は手元に釘付けに弱弱しくもそう尋ねていた。

「では、ルールはどうでしょうか。先程と同じ制限時間十分の、申告制でいいのかな？」

銀貨を弾いては掴みと弄びながら、リーが言葉を発すると、ウサミは曖昧に頷き、ティラミスはその手に新しく現した武器を手に、問題ないと告げていた。

後方から信士が「技能も無しで」という声を上げ、リーは二人に目で確認すると、問題ないというよう首肯を受けて、ならばそれもと声に乗せる。

ティラミスの手に新たに現れたそれに、またしても眩しい視線を向けるウサミに対し、それに気がついたティラミスがキラリと眼を輝かせると、「これも後でお見せしようだから本気で…」云々と語り始めた。

やれやれとした苦笑を浮かべる男性陣に対し、未だ不安げなカーリンという外野を他所に。

では始めようかというリーの声で、その場の空気がゆっくりと変貌を告げ始める。

青空の広がる陽気の中で、この場だけ数度気温が下がったかのよう

に。  
弾かれた銀貨が宙に舞い、日の光を受け銀色に輝き。

地に落ちると同時、二つの影が姿を消した。

「さて、信士はこの試合をどうみる？」

「まあ、ティラミスが勝つのは間違いないだろ。ウサミも十分強いとは思うが……こればかりは相手が悪い、悪すぎるだろ」

視線の先でのぶつかり合いは、傍目には拮抗が保たれている、探り合いの渦中には見えるものの、その表情から明らかな違いが見て取れる。

それもそうだろう、と思う。あのティラミスという人物は、探りあいというものと無縁だというのが信士が実際に相対して思った感想。開始から全開。迷う暇なく自身の渾身の一撃を放つ。

相手の手の内を考えるではなく、自分の力が通用するか、其の一点のみで戦うように。

それに対し、ウサミは相手の手を読み動きの癖を探し、それに合わせて武器を変え自身の有利なスタイルに持ち込むように戦う。

その考えが悪いわけではないが、それをさせてくれない相手が、今日の前に居るのだから。

距離を取ろうにも詰め寄られ。手数で押そうにも押し切れず。

「善戦できそうだと思うが……いや、それはただの期待でしかないか」

「そうなのかい？ 私はウサミツチの戦闘スタイルを詳しくは知らないが：現状はそれほど差が無いように見える。ひよっとしてティラミスは手を抜いているのかい？」

「あいつがそんなことする玉か。見るよあの嫌な笑顔」

それに対して、と信士は視線を移す。

ウサミの顔には焦りが見え始め、その動きにも余裕の無さが見え始める。

瞬時に武器を愛用の双剣に切り替えると、迫るティラミスの刃を受ける。

その勢いにやや押されつつも、その勢いを流すと共にお返しとばかりに剣を風ぐ。

瞬時にその双剣に対応し、上下から迫る双剣の軌道に自身の手に在る『双剣』をティラミスが重ねる。

ウサミの双剣『双竜・天地』に、ティラミスの持つ双剣『双龍・光闇』

ゼロ距離で繰り返される四つの輝きを見せる軌道は。

その速さを誇る手数が多さも、それを繰る動きの巧みさも。

どちらもやはり優勢に押し始めるのは頂点に座すティラミスの方で。

しかしそれでも押し切れないかのように、捌き、受け流し、その上で時折見せる反撃に。

夢見るように幸せそうに。その時間を慈しむように。

死へと至る凶刃を前に、舞うように躍り掛かり、狂うように笑みを浮かべ。

本当に楽しそうに、嬉しそうに、戦い、闘う。

そうして、訪れる終焉の時。

「決まるな」

二人だけの時間が終わりを告げる。ウサミの渾身の一撃が空を切り、テイラミスの瞳に光が灯る。

その信士の声に、カーリンは不安げに瞳を揺らし、リーは即座に動けるように足に力を込め。

「そこまで！」

終了を告げるリーの声も、耳に入らぬとばかりに続く剣戟の演舞と澄んだ音色に、結局こうなるのかと苦笑しつつも、駆け出すリーの背を見つめ、もう暫く見たかったな、とそんな思いで空を仰いだ。

「いやはや何と言うか相変わらずいい所で水を挿されるもんだね。不完全燃焼というか、悔いが残るといっつか……だが、君達のパーティーは実に楽しませてくれる。ひよっとするとリーお兄ちゃんも私を楽しませてくれたりしないかね？」

充実したような顔を見せつつも視線に不満の色をありありと浮かべ、成らば次の獲物はその不満の色をリーへ向け。

向けられた当の本人は、そんな分かり易い態度に苦笑を浮かべるしかない。

「私とでは楽しめませんよ。私のスタイルはこれですからね。『破棄、継続倍化、完全追尾』……とまあ、こんな感じですよ。楽しめないでしょう?」

リーの腕輪に浮かぶ円環が三つゆるく回転し、それに続く開放の言葉を待ち続けた後、それが与えられないことを悟るように、時間が経過すると泡が弾ける様に其の姿を音も無く消した。

その言葉を聞き、あからさまに不機嫌顔を浮かべるティラミスにリーも苦笑を消せないで居た。

闇魔法技能主体の戦闘スタイル。

純悪魔にのみ取得可能な闇魔法用融合技能 『真理把握』。

継続倍化は状態異常継続時間の倍化。完全追尾は魔法の対象を通常の倍の距離まで完全に追尾しその効果を顕すというもの。

自身の速さに比重を置く戦闘スタイルであり魔法耐性が低い獣人では、一番相性の悪い『状態異常魔法のエキスパート』。

対抗するには光魔法が無ければ何も出来ずに終わりそうな、正に極悪という相手である。

それでも、と言う風に悩み始める姿を見せるのだから、『本物の』戦闘狂にして頂点プレイヤー。

其の言葉の持つ意味を純然と示す。

しかし、出会いがあれば別れもあり。

このような機会が次に訪れるのは何時になるんだろうか、とティラミスに借りていたカートを物欲しそうな眼と感謝を付け加えて返しているウサミの姿を眺めながら、そんなことを考え始めた。

「報告は学術都市 ガルエイムでいいんだっけ？」

無事にといつか色々あったものの。当初の目的は問題無く果たせたので、これからのことに話題は移る。その輪の中に一人増えているが、その一人の今後も気にはなる。

あのお話を切り出した時点でリーと二人だけになるだろうなと思っ  
ていた。

その予想はあっけなく空回り、また同じメンバーで話し合っている。

降りてもしかたないだろう、と。裏切られたという思いは湧かず、  
それが普通だろうと。

けれど。

現状はいつも通り。

何故だろうなと考えると、小さな疼きと微かな温もりを感じる。

「そういえば、信士とウサミツチは十一章開始からだったね。十一章はガルエイムから始まるから序でにそっちも進めようか？」

リーの言葉にそうなんだという思いで十一章の内容を聞く。未確認紋章の情報を追うという物らしく、その情報を持ち帰ることで十一章が終わりだそうだ。

「それを各町の研究者に、まあ各町とはいってもその内の誰か一人  
でいいんだが。それを見せれば、十二章が開始する。ほら見たこと  
ないかな。街の中に魔王軍が現れて暴れ回る」



「ああ、あれか。いやあれほんといい迷惑だよな実際。ミルドが『リヴィアⅡタン』で、ハルムーンは『ベヘⅡモド』だっけ？」

「そうそう、知らないで始めたか、テロ目的で呼ぶか。HPの五割減少で帰っていくけどね」

因みに、と続けられた言葉にはガルエイムでは『ジーⅡズー』を、リンレンでは『ベルジⅡアム』を。

「その十一章で持ち返る紋章というのが魔王軍の召還陣なのだが、不完全なものという設定でね。唯一それを指摘し街に魔王軍を呼ばずにクエストを進められるのが、北の『鉱山都市 ザングルム』だね」

まあ、開始後向かうのが北の街だからそのまま消化するのが主流だという言葉に、それもそうだろうと頷きかけて、ふとした疑問が脳裏に浮かぶ。

「ふーん……ん？ それだと一人少くない？ 側近リヴィアⅡタンと、四天王のもう一人……名前は……ああ、『ハⅡデス』は北担当ってこと？」

「ん？ ああ、そうじゃないよ。『冥界 ヘルエイム』がハⅡデスだね」

今まで通りの、これまで通りの。何気ない日常の何時もの会話。それから六章にはと続く会話に耳を傾け。

気持ちのいい日差しにふと気づき、空を仰ぎ見れば暖かな日差しが迎えてくれた。



「そういえばサタン様。先日もうすぐそんな時期か、と仰られておりましたか、あれは？」

「ん？ あああれはつと……つと出てきた。これこれ、もうすぐだから」

「拝見します……成程、もうそろそろそんな時期でしたね」

「そう！ 僕が主役の一大イベントだよ！ 毎年満員御礼！ 今年も忙しくなりそうだよね！」

「なりませんよ」

「だよね！ ……え！？ あ、あの？ そのー、なりますよ？ なりませんよね？」

「……なりませんよ？」

「だってその、『魔王遠征』って言ったらほら、一大イベントだったじゃないですか、その、ね？」

「何が悲しくてこんなものを見に……時間の無駄でしょう？」

「こ、こんなつて……で、でもほら！ 何処に居るかわからない魔王様がですよ！」

「っは！ なにが何処にいるかですか。こんな貧相な部屋にしがみついている身で」

「で、でもね！ ラスポスというか、最強の力を体験できるというか！」

「そういえばあのフィールドは力の解放がされるんですしたね。なら私が並んであげますよ」

「ええっ！ だ、だめだよ！ 死ぬよ僕！ あそこは僕ら力の加減とかできないんだよ?!」

「それがいいんじゃないですか。偶には、私も、本気を出さないと体が鈍るといけません」

「やだっ…あ！ それならいいこと思いついた！ 今年は僕じゃな

くてリヴィ  
「

「楽しみですね、サタン様」

「……………ことは」

「楽しみですよね？」

「……………グスン」

## 10 (前書き)

折り返し折り返し。書き溜め分放出終了。

これにて漸くハルムーンに突入できそうです。

それでは次話投稿まで暫し時間を貰います。

ここまでお読み頂きありがとうございます。

魔王城を発ち、一路学術都市ガルエイムへと足を向けた信士達一行は、街の無事を祈りつつなるべく早く辿り着こうという思いからか五日目にはその道程を踏破していた。

辿り着いて始めて間近で見るとその光景は特に違和を感じず、それでも一応は警戒をという感じでそろりそろりと足を踏み入れる。

「ゲームん時は特に雰囲気をとんとか思わなかったけど……こうして見ると、陰気な街だな」

生活感はあるものの通りに活気はなく、ただ必要と思われる店が数軒と人が居ることを示す家が其処彼処に見られるもの。

それ以外はいえ、怪しげな煙を上げる施設と思われる建物や研究所が雑多に並び、大図書館と呼ばれる中央塔が街の中心地にその異相を聳えさせている。

その中央塔に眼を向ければ、時折明かり取りの開口部から紫色の光を迸らせ、異様な街の陰気さにより一層拍車をかけている。

「まあ、そんなことどうでもいいじゃないか。街が無事だった、それだけで十分だろう」

すたすたと先頭を歩くりーの後に続きながら、そりゃそうだと一人こちる。

向かう先は街の片隅という言葉が似合う日当たりの悪い一角にある、やや大きな建物。

『ミルディネオ王国 国家研究施設』

という文字が門に彫られ、中からは忙しく走り回る音や微かながらに話し声さえも聞こえてきていた。

門扉側には地下遺跡ゲマニエにて見かけた認証台のようなものが見え、それにリーが歩み寄り腕輪をかざすと、閉ざされていた門扉がゆっくりと開いていくのが眼に映った。

「ゲーム時代とは、こういう所も変わってんだな。てか良くこんなシステムだってわかったな」

「ん？ ああ、そうだね。ミルドでオークションの参加方法が同じ感じでの認証だったんだよ」

登録時は違うのかい？ と言われ、そういえば物品登録時そんなことがあったっけか？ と記憶を漁って見ると、成程と思いつつもそれから終了までの二日間の出来事を思い出し、信士は懐かしくもその結末に頬が緩むのを感じた。

そして、ふとその時のことを思い出していた刹那、何かが気になりそれが何であったか？ という思考に意識が沈んで行く。

そんな信士の変化に気づかず、先へと進むリーとカーリンを他所に、ウサミは信士に声を掛けようかと迷うように視線を左右させ、結局その場に留まることを選んだ。

どれ位の時間そうしていたのか、漸く信士が顔を上げると、そこには誰の姿も見えず、とそんな信士の動き出した姿にウサミが躊躇いがちに声を発した。

「考えごとをしてたみたいだけど、何が気になってたの？」

其の声の出所を探すようにひょいと体ごと振り向けると、複雑そうな顔をしたウサミが居た。

最近考えることといえば、あまり楽しい物では無い以上、そつちの心配事が増えたのかと思っただろう。

「いや、オークションで…ってウサミはわかんないよな。うーん…先刻の認証あっただろ？ オークションの時にさ、入札者の名前表示がキャラクター名だったんだよ。あーなんていえばいいかな…」

腕輪で見れるステータス表示、そこに浮かぶプレイヤー名は元の世界の本名に変わってるだろ？ という信士の問いに、表情を変えることなくウサミはコクリと頷く。

それから入札者の表示にあったのは、『REPOBITANN』だったということ伝える。

認証台での認証であるのに、その腕輪が表示するプレイヤー名は、この世界の住人になった時から現実のそれへと変わっているのに。

信士の言いたいことが解ったのか、ウサミもまた考え込むように静かになる。

そこにある、矛盾ともいふべき欠落した何かを探るように。

何かがあるのか、何かがあるようで何も無いのか。

二人は互いに腕輪に触れ、自身のステータス表記を示す縦長の長方形で形作られたそれを呼び出し、それが相手にも同じように見えるのか等確認したりと、考えられること、確認できること、そこからこれまで知らなかったことを貪欲に探り始める。

「こつちからみても…徳間 信士と表記されてるね。ステータス数値は見れないけど、レベルとか種族とかその辺は見える。でも、この名前の下の空白はやっぱり気になるよね」

「うーん、つってもここはあれだろ？ ゲームん時は所属パーティー名が入るとこだし…今パーティーとかどーなるんだらうな。組



めるのか？」

「組めるからのスペース、だと思っけど……そういえば、カーリンの友達が固定でパーティーがどうこう言ってたけど、どうなんだろう？ ああ、でも一応リーダー的な人が居る程度とかいってたっけ？」

確認作業は淡々と進むが、やはりこれといって状況を好転させるほどの考えは何も浮かばず。

しかし、気になるのは確かなだけに、何か見つかるのではないかという思いが手を止め思考を止める事を許さない。

そんな考え事をしたまま自身のステータス画面を見ていた信士は、その画面へと伸ばされた手に、何を？ と思ったものの、それに口を挟まずに眺め続けた。

そして、変化が起きた。

「……、この文字が見えるか？ ウサミ」

「……登録、招待、トレード、拒絶……これって、あれだよな、ゲーム時代の……」

ゲーム時代、相手キャラクターの名前にカーソルを合わせ右クリックした時に表示されるウィンドウ。

フレンド登録、パーティー招待、アイテムトレード、チャット拒絶とりあえず登録を選んでみようと話し合い、その文字へと指を伸ばしたウサミは、その後に表示された『すでに登録済みです』という文字に、どちらともなくまた考えこみ始める。

それを確認する術はあるのか？ それからメッセージのやりとりなどができるのか。

食い入るように見逃した点は無いかと自身のステータス画面を眺め、また自身のステータス画面に触れたりとしてみたものの、相変わらず変化は何も起きない。

「ついて来てないと思ったら、ずっとここに居たの……何か深刻な顔をしているようだが、何かあったのかい？」

建物の中から現れたリーとカーリンの姿を認め、ウサミが信士へ視線を送ると、これを見てくれと先程見つけた変化をリーへと示した。

その文字を見たリーは、一瞬驚きの表情を見せた後、考え込むように見続けた後、登録という文字へ指を滑らせる。

再び現れた同じ文章を見、それからどのようにその画面を出したのかと問う。

それに頷き、再び現れたその画面に、今度は招待という文字へ指を運ぶ。

『REPOBITANN 様から パーティーへの招待を受諾しますか？ YES/NO』

それに信士がYESへと指を運ぶと、今まで在った名前の下の空白に『PT:REPOBITANN』という文字が追加された。

「いやはや…よくみつけたね。しかしこれは、今後を考えた上では大進歩だろう」

それにしても随分と嫌なシステムだねえ、これは、と続けられた言葉に、何がと考えた後にその意味に気が付いた。

本名、レベルを他人に教えることが前提条件。

其の上でここまで辿り着けて、漸くPT活動ができるというもの。

嫌な、という意味に気が付くが、それでもパーティーを組めるといふのには、この状況ではメリツトが大きい。

現実世界であつたなら、自分の名前を相手へ告げるのは別段違和感はないだろう。

だが……ゲーム世界となると、そこにこれまでの躊躇いがでるのが当たり前のように思う。

そのキャラクターを操るのが誰か分からない。だからこそそこでは違つ自分になれる。

例え隣にいる人物がリアルで自分の親友だとしても、それを知らなければその世界だけでは別人として付き合える。

そう、例えばゲーム世界でキャラクターの性別を入れ替えたとしても。

このシステムでパーティーを組むということは、そこに一度眼を通させることになるということなのだ。

追加されたその文字列に、信士は早速指を滑らせる。

『PT:REPOBITANN』という文字に触れたと同時に、新たに現れた画面には

PT名 REPOBITANN

PTリーダー名 REPOBITANN/97 学術都市 ガル

エイム

PTメンバー名 山田 信士/95 学術都市 ガルエイム

という三行の文字。

これを見て救いがあるとするならば、パーティーリーダーだけが招待するときにその人の本名を見るだけで、PT加入後にメンバー

が見ることが出来るのはゲーム時代に名付けたプレイヤー名である、ということだろうか。

現在ここに居るウサミもカーリンも、それを告げたところで特に抵抗するでもなく。

登録を済ませて行数を増やしたメンバー名を見、それに全員が期待をこめて大きく頷きあつた。

「トレードは、この画面を出さずに行えていたし……フレンド登録は、どうなのだろう？ 意味をなさないように思うが……なんにしても、PTメンバーの位置把握が出来るのは大きいね……そうか、それならば……」

考え込むように、記憶を漁るように首を傾げ顔を下向けたリーの姿に、何をとは思ふものの誰も口を開かず続く言葉を待っている。再び上向けられた顔には、決断を強いるような真面目な表情を載せていて、それがこれからの行動への何かしらの考えであるのかと、残る三人も静かに耳を傾けた。

「提案がある。ここで二手に別れよう。私とカーリンで七章終了までメインクエストを進める。其の間に信士とウサミッチには十一章を終わらせておいて欲しい」

掲示された提案とは、八章開始までの別行動。

まず、と続けられた言葉は六章の内容。移動、ダンジョン踏破の数、それから研究素材の収集などとそれだけを聞くならば人手が多いほうがとは思ふものの、それに対して十一章はと次いで出された街の名に、ああそれは同時進行するのは厳しいな、と納得させられる言葉が続く。

「六章は確かにガルエイム周辺でのクエストが多い。五章終了時のメッセージ、『魔王不在』という言葉の真偽、それから周辺の調査がメインになるからね。活動範囲が南西寄りの範囲でのクエストが多い。」

それに対し十一章は開始から北のザングルムへという物だからね」

だからこそ、というリーの言葉に、それでも疑問は残るという難しい表情を浮かべたウサミが、それを口にする。

「十一章を急ぐ必要が、その、あるのかどうか」

カーリンが十章終わったら同時進行、というのでは駄目なのか？無理をして自分達のクエストを急ぐ必要は無いのでは？ という、寧ろ其の方がいいと思えるというより、それが当然であるような気がする。分かれて行動するよりも、一緒にいた方が安全なのはこのまでも無いし、安心も出来るだろう。

「いや、私も最初はそう考えていたのだがね……。保険を掛けておきたい、ということかな」

保険、という言葉に漸くその意味を悟り、悟ったからこそ呆れたような表情が浮かび、それを考え付いた人物に愚痴を零す。

「何とも過激な保険だな。こんな手札まで持つことになるとはね」

「無いよりはましだろう。何もなければ使わなければいい、だから保険だ」

「四人で街相手か……。絶対使おうと思うけどな……。何と云うか、逆に

俺たちが悪者扱いされそうだな……」

「そこについても対処している。何、相手が相手だ、あまり気にすることは無い」

それはどんな、と聞き返す愚は冒さない。

対処しているというその内容が解ってしまっただけに。

あの時、別れ際に何やら二人きりでひそひそと隠れるように話し合っただけを見てしまっただけに。

それが本当だとしたら、嬉々と駆けつけ楽しむのだろう。

あの嫌な笑顔を浮かべながら。

成らば残る問題はと、自然カーリンに視線が集まる。

その意味するものを悟ったかのように、気負いも見せずぶれることなく、芯の通った意思を示すようにゆっくり頷きその意見に肯定を示すと、顔に微笑みを浮かべていた。

何も問題はないのだと。心配することなど無いのだと。

よろしくお願ひしますと明るい声でリーへと告げるその姿に、親しげな空気が感じられ、何時の間にもそんなとは思ったものの、それは何も自分だけではなくウサミもまたそれに戸惑いを覚えるような顔をしていた。

「時間としては……こちらの方が掛かるだろうが、此方への協力は必要ないだろう。」

信士達は十一章が終わったなら暫くは二人で好きに動いて貰って構わない。技能なり装備なり、自由にしている。こちらにも出来るだけ急ぎはするがね」

「しかし、そうなると合流はどうするんだ？ エスプリで待ってた方が無難だろ？」

「PT名を変更できないか試してみる。それでこちらの進行状況を伝えることができるかどうか次第かな。」

「そうだね、二週間。其の間に変更が見られなければそっちがクエスト終わり次第工スプリで待機、という方向で行こう。これなら確実に合流はできそうだしね」

「妥当な考えだろう、という言葉にそれならば問題はないだろうかと頷く。」

「この男はこれでいて相手にしたくないと思うような嫌らしい戦闘スタイルであり、その強さもまた側に居るだけで安心できるくらいに頼もしい。」

「決まりだね。ならばここで別れよう。次に会うのは何時になるか。その時まで精進したまえ」

「そっちも急げよ。あと二ヶ月もすれば『魔王討伐』のイベントだろう？ 俺あれにも行きてえし」

「ああ……本当になんというか。こんな世界になってもそこに興味を持つとはね……信士は相変わらずというか。とは言え、まだ二ヶ月は先だろう。其の前には、この問題を終わらせようじゃないか」

十一章の開始は中央塔の三階からだという言葉を受け、ウサミを促しその場に背を向ける。

一時の別離。

背後から聞こえるカーリンの声に、大きく振られるその腕に、あんな調子で本当にこの先大丈夫なのかという不安が込上げる。

「佳織は、相変わらずだねえ。まあ、あんな話を聞いた後でも、あ

れだけ元気なら大丈夫なのかな」

「リーも一緒だから大事にはならないとは思うが……とりあえずは俺らの方だな。聞いた感じそんなに面倒なダンジョンは無いし、終わった後どうするかだな。ウサミは何かあるか？」

「そうだね……やっぱり、カタールとその技能は欲しくなったね」

「ああ、あのティラミスが言ってた奴か……この世界だとあれは対人を考慮すると化けるよな」

「『攻撃速度増加』、『直線加速』、『後背強襲』。技能だけでもこれだけは最低は欲しいね。」

それと、最上位に位置するカタール……」

特殊武器であるカタールの技能は、ほぼ全てが装備時SP上限の二割減少という異質な物。

取捨選択を取得時から迫られ、それを気にせず五つも取得するとSP0という状況に陥る。

しかし、それに見合うだけの効果を得られるのも事実であるが。

「上位じゃ火力が低すぎるのが悩みどころだよね……最上位は全三種。」

『断罪の執行者』 『闇夜の暗殺者』 『The death call』

そのどれもが、入手難易度の高さというか、討伐ボスの強さというか

この武器はあの有名なダンジョンのボスを、次にこの武器はあの時のダンジョンのと。



聞きたくない名前のオンパレードでは有ったものの、倒したことのある名前ばかりがウサミの口から告げられ、やっぱり楽な相手はいないのかとげんなりしつつ。

そんな会話をしている間に、三階はもう目前という所まで辿り着いており。

「まあ……終わったらカタール入手にでも行くか。手に入れることが出来たら技能取得の為にダンジョン巡りの旅って感じで」

「信士は、何か、というか行きたい場所とかは無いの？」

「俺は、レベルあげりやどこでもいいよ。もう少しで上がりそうだし。だから、ウサミのカタール入手に付き合おうよ」

十一章の開始を告げる、未確認紋章の研究依頼が北から告げられた為にその確認に向かってくれないかという話を聞く。

まずはこれを終わらせてから、と中央塔を後にすると二人は足を北へと向ける。

その足が南へと向けられるのは、何時になるのだろうか。

南にありて最大の街、商業都市 ハルムーン

暴虐と怨嗟の渦巻くその街は、自分達が足を踏み入れるとき、どのように歓迎してくれるのだろうか。

わからないことは考えず、出来ることに眼を向けよう。

先ずは北へ

今はただ、  
それだけを。

「ゲラゲラゲラ。『うわああん！ あ、見られて、あつ声も！』つて！ どんだけ笑かすんだよ！」

「ねえ、なんで居んの？ アムおじさん」

「フフフ 『えっ！ お、お帰りリヴィ、ア？』 どれだけ必死なんですかこの顔」

「ねえ、なんで居んの？ ズー先生」

「『まだ居たのかよお前、もう帰れよ！』 ああ、この後のこのお顔。そそりますね」

「もう本当勘弁してくださいリヴィアさん」

「……………」

「初登場だし何か話そうよデスちゃん」

「いやはや、愉快なものを拜見できると誘われてみれば、これはこれは中々に。『そりやもうほんとこんなもんなんすよええ。こんなもんっすよ』 っつてフフフウ！ 自分でこんなもんっつて！」

「ねえ何で普通にこの中に混ざっちゃってんですかティラミスさん。明らかに場違いでしょ？」

「いや何、自宅待機を申し付かった身で暇を持て余していた折、そちらのズー先生なる御仁にお招きいただき」

「もうホントズー先生何してんだよ！ ていうかアムおじさんも城の方どうしたんだよ！ お前管理してんじやなかったのかよ！」

「あ？ ああ、城？ いやよー、余りに暇なんだな。そこらに居る奴呼びまくって広間カオスにしてきたから大丈夫だろ？ あそこ越えてくる奴いたら逆にあの城くれてやりたくなくなるわ」

「おまつ……………そーいえばモドは居ないけど、まだ暴れてるの？」

「何処かのガーディアンが強いという噂を耳にしてまた消えたという話がありますね」

「また勝手にそんなことを……………誰だよもうそんな噂流したの……………」

「あ？ こいつに決まってる？」「ズー殿です」「……………」

え？ 私なにかやっちゃった？」

「やっちゃったじゃねえよ！！！！ あいつ暴れた後奔走するの僕なんだよ！ どうしてくれんだよ！」

いやテイラミスさん？ そんな嬉しそうにどこ行くの？ 自宅

待機じゃなかったの？ 『いやなにこれは別問題で』じゃなくてね

？ 全く同じ問題というかだから立ち上がらなくていいから、まだこれ見てていいから！ これ以上問題増やさないでよ本当にもう！

！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9072q/>

---

魔王が居る世界

2011年3月6日10時05分発行